

---

# 夕空の下、天使さま。

雛月詩音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夕空の下、天使さま。

### 【Nコード】

N0796D

### 【作者名】

雛月詩音

### 【あらすじ】

一日中夕空、ときどき黒い雨が降る、すこし終末的だけど現実によく似た世界でのお話。天使病患者である天使さまたちは、今日も一生懸命みんなの心の支えになろうと頑張っています。ちょっとひねてるけどふつうの子、沙凼は、ある日とつぜん天使さまになるんだと言われて……。

## 序

天使さまがテレビの中で福祉活動している。

隣みかこの美加子がふらふと、吸い寄せられるように走り寄っていく。足取りは何だかあやしいのに、やたら速い。

「待ってよ、美加子」

「ごめん、沙凪さなぎ」

白くて長い髪を揺らして謝るけど、視線は街頭テレビに向いたまま。美加子は熱心な天使さま信者だから、天使さまを見るとおかしくなる。

テレビの中では、天使さまがお年寄りに笑いかけていた。天使さまの白、お年寄りの白髪、病院のシーツ、とテレビの中は美加子の髪みたいに真っ白だった。本当は逆であつて、美加子の髪が天使さまみたいに白いんだけど。

美加子はその様子を見てはあ……、なんてため息をついている。まるで夢見る少女みたいな、浮いた目つき。テレビの中のレポーターさんも、同じように熱っぽい調子で天使さまを誉め称えている。天使さまたちは今日も、病気の体にも関わらず身を粉にしてボランティアに従事しています、何て素晴らしいことでしょう。隣で美加子がうんうん激しく頷いている。

でも、わたしはちよつと、冷静だ。

美加子やレポーターさんみたいにテンション高いひとのほうが普通で、わたしみたいに冷静なのはどっちかというと、少数派。なんで天使さまはこんなに人気があるんだろう、とか思っている。

病気だから？ 天使病なんていう死病に侵されながらも、気丈に社会貢献する姿がみんなの胸を打つ……のかなあ？ 病気なのに働いているのは、たしかに、すごいと思うけど。あんまり具合悪そうに見えないのは、とりあえず置いておくとして。

でも例えばわたしが重い病気にかかって、それでボランティアし

たとして、ここまで騒がれるものかなあ？

うーむ。

それにしても、天使さま、美人だな。いつも通りだけど。

これが騒がれる原因かな、とか考えてしまう自分がちょっと嫌だ。だって、天使さまたちつてば、なぜか美形揃いなのだ。男の天使さまも、女の天使さまも、みんな。さらに頭のとっぺんからつま先まで真っ白だから、ほとんど人間離れして神秘的に見える。さらに羽根まで生えてるし……ちいさいけど。いわゆる本物の天使と比べて足りないものといえば、頭の上の輪っかくらいなものだ。

「ねえ、美加子」

「なに？」

テレビを見つめたまま、なおざりな返事。

「なんでそんなに天使さまが好きなの？」

美加子の白い髪は、もちろん地毛じゃなくて、色抜きしたものだ。天使さまの真似。何も美加子だけじゃない、そんな子は沢山いる。今も周りを見れば、白い髪に真っ白な服を着た子が、探すまでもなく目に入る。

「儂くて、きれいだから！」

そんなに輝いた目で言われたら納得するしかないです……想像通りすぎるけど。もう、アイドル扱いだ。わたしにはちょっと特別な病気に罹っただけの、ふつうのひとたちに見えるんだけど。

天使さまたち自身はどう思ってるんだろう。天使病に罹ると入院、それも専用の病棟に入って、残りの人生ずっと暮らすことになるんだとか聞いたことがある。天使さまとしてボランティアするとき以外は、カンヅメだそうだ。

テレビでちゃやほやされるのは幸せか、ほとんど病院から出られないのは不幸せか。

「あ」

そんなことをばやあと考えつつ、真っ白な画面から目を背けると、真っ黒い雲が目に入った。地面に落ちて、跳ねる水滴。

雨だ。

今日の雨は、結構黒い。

「やだなあ雨降ってきたよ……」

「黒雨警報、出てたっけ？」

美加子が雨を見上げて、そう言った。テレビにおける天使さまの  
出番は終わったようだ。

「出てなかったと思うけど」

わたしがそう言った瞬間、テレビに黒雨警報を知らせるテロップ  
が流れた。遅いですよ、言うのが。

とはいえ、道には屋根がついているので、直接雨に濡れることは  
ない。濡れると大人たちがうるさいから、少しは注意しないといけ  
ないのがちょっと面倒だけど。

「なんで大人たちは、雨が嫌いなんだろうね……」

独り言みたいなたしの疑問に、美加子は律儀に答えてくれた。

「私たちが生まれた頃、雨のせいで結構酷いことがあったらしいよ  
？ そのせいで過敏になってるんだって」

「へえ……」

初耳だった。今は少し濡れたくらいじゃ何ともないのに。激しく  
濡れたことはないから、そのときはどうか、分からないけど。

まるで天気に従うみたいに、ニュースは暗い内容になっていた。

食料自給率下降の一途、配給量減少は免れないか。少年少女十三人  
が廃屋で集団自殺、現場には麻薬が残されていた。寝たきり老人が  
配給を受けられず孤独死。先日地下街でテロがあり、幸い死者は出  
ませんでした。が重傷者三名を含む云々。何となく気分が滅入るので、  
わたしは目を逸らす。

「いこ、沙凼」

美加子が、少し先で手招きしていた。目当てのお店はすぐそこだ。

黒い雨。暗いニュース、そして明るい、天使さま。

ふと、閃く。もしかして、世の中暗いから、天使さまみたいな明  
るい話が必要なのかなあ、とか。

……なんていう考えは、すぐにわたしの中から消えて。

基本的には、そんなことわたしには関係、ない。わたしは美加子ほど天使さまに興味が持てないし、天使さまのボランティアを受けるようなこともない。

たぶん一生関わりはなくて、今みたいに友だちと楽しんだり、よく分からない宿題で困ったり、家庭の事情で悩んだりするだけの、ごく平凡な日常生活を送って、年を取っていくんだろう……。

と、そのときは、思っていたんだけど。

人生とは何があるか、分からないもので。

まさかこのわたしが、天使さまになるだなんて。

## 1章、1

— 天使さまの体は、砂糖菓子でできている

「いまなんて言いました、せんせ？」

「だからな、名霧<sup>なぎり</sup>。お前天使さまになるんだよ」

菱沼<sup>ひしぬま</sup>せんせはわたしの顔を見ながらそう言った。

真顔だ。

何言ってるんだらうこのひとは。

「それってわたしが天使病だってことですか？」

「そうだってここに書いてあるし、医者<sup>いしや</sup>の先生もそう言ってたぞ」

せんせは手に持った紙を手の甲でぴしぴしと叩いた。わたしの健康診断結果らしい。

「でもわたし白くないですけど？」

テレビで見る天使さまは全員真っ白けだけど、わたしは標準的な日本人のものであるところの、黒髪だ。ついでに言う<sup>い</sup>と肌の色もふつ。……少なくとも今朝までは。

「これから白くなるんだろ？」

そういうことですか。まあ、天使さまといっても、ちょっと普通じゃない病気に罹<sup>かか</sup>っちゃった普通のひとだもんね。最初から白いわけじゃない……ってことか。

「いやしかし、名霧が天使さまか……」

せんせはじろじろとわたしの顔を見た。わたしは居心地が悪くな<sup>な</sup>って顔を背ける。そんな目で見ないで欲しいです。恥ずかしいから（天使さまは美形揃いなので）。

それにしても、本当にわたしが天使さま？ 信じられない。

「ちよつとその紙見せてくださいよ」

半ばひつたくるようにせんせから紙を奪い、わたしは結果を確認した。よく分からない数字の羅列。ええと何処に天使病<sup>てんしびやう</sup>って書いて

あるの？

……と思つて見ていたら、一番下に書いてあつた。

後天性色素欠乏及び翼状畸形症候群の疑い濃厚。

そういえば正式名称はそんな感じだったような気がする。

ううむ、これは、本当に、まじなのか。

わたしは天使病で、これから白くなつてちいさい羽根が生えて、テレビに出て日々ボランティアやらに明け暮れることになるのか。

……なるのか？

「いやあ、すごいなあ」

菱沼せんせは何やら感心している。そうじゃなくてですね。

「いやすごくないですって。病気ですよ？」

「でもお前、天使さまだぞ？」

だぞ？つてそんな何を言つてるんだみたいな顔をされても困ります。

というか、何かおかしくない？ 確か天使病つて、死病だったよね……。

「まさか俺の生徒の中から天使さまになるやつが出るとは！ すごいなあ！」わたしが記憶の真偽に悩む間にも、せんせのテンションはうなぎ上りだ。

「だからすごくないですって！」何度も同じことを言わせないで欲しい。

ていうか、軽っ！ 死病の告知という重々しいシーンのはずなのに何だろつこのテンション。おかげで実感がぜんぜん湧いてこない。本当なら元氣出せとかそういうことを言うべきところでは？

「なあ、名霧」

「は、はい」

ふいに菱沼せんせはたたずまいを正し、真面目な声でわたしの名を呼んだ。急だったのでわたしはどきつとした。これはあれか。ようやく教師らしく、死病であることが発覚して傷心の教え子を慰めようという気になったのか。



「天使さまになるお前に、言っておきたいことがあるんだが」  
「は、はい」

真剣な顔で見つめてくるので、ばかみたいに同じことしか言えなくなってしまう。

緊張するわたしの前で、菱沼せんせはこう言った。

「今のうちにサインくれないか？」「お断りします」

秒速で断るとわたしは踵を返して職員室を出た。ろくでもないだめ教師だ。緊張して損した。

扉を閉めて歩いていると、改めて信じられない気持ち がむくむくと湧いてくる。

本当に天使さま？ わたしが？

手にした紙をもう一度確認する。後天性何たらという長い病名は、やっぱりそこに書いてあった。夢じゃない。

「はあ」

何となく溜息が出た。どうなっちゃんだろう、これから。

\*

「沙凧が天使さま！？」

「声大きいって！」

わたしは慌てて美加子の口を塞いだ。周りを見回す。学校でこの話をする気になれなくて、わたしたちは二人で公園に来ているのだ。何人か、ひとがいる。

どうやら、誰も聞こえていなかったみたいだ。

「む、ぐ、」

「あ、ごめん」

苦しそうな声、我に返って手を離す。

「えっと、冗談じゃないよね？」

冗談だったら良かったのに、と思いつつまたも健康診断結果表を確認してしまうわたし。やっぱり後天性以下略という長い病名はそ

こにある。

「それ、ぼくにも見せて」

わたしは黙って結果表を手渡した。今日は「ぼく」の日か……。何でも自分のことをぼくと呼ぶ天使さま（女のひとだ）が居るらしく、ときどき美加子の一人称はぼくなる。美加子はミハーだから気まぐれだ。

「うわ、本当だ……」

美加子の視線は何度もわたしの顔と結果表の間を往復した。

「へええええ、沙凩が天使さまかあ……」

美加子はそう言うてにつこり笑うと、わたしの顔をじいつと見つめた。居心地が悪くなる、わたし。なんとなく顔が赤くなっていくのが分かってしまう。そんな目で見ないで欲しい。なるほどなんて呟かないで。

「すごいなあ……」

にやにやしながらしみじみと言う。圧力を感じてわたしはすこしのけぞった。

「すごくないって！ わたしは何もしてないし」

「でも、天使さまだよ？ 純白の、穢れ無き、純粹無垢の象徴たる天使さま……。その浄潔の御手はすべてを癒し、あまねく救い給うのよ！」

なんだジョウケツのミテって。

「天使さまかあ……うふふ」

夢見る少女、湯葉美加子の背後には少女漫画みたいな花々が乱れ咲いていた。目が遠いです……。

「ねえ沙凩」

「な、なに？」

美加子とはつぜんわたしの名前を呼ぶと、腕をがっしと掴んだ。

「天使さまの体は、砂糖菓子でできています」

「は？」意味がわからない。

「だから甘いんです！」

美加子が壊れた！

「だからね、沙風」

じりじりと、美加子の顔が近付いてくる。離れたいのに腕をしつかりと掴まれていて、それできない。

そしてとんでもないことを言い出した。

「食べさせて？」

「え……」

「だから、食べさせて？」

にこーりと笑いながらおかしなことを言わないで欲しい。

「冗談だよね？」

「何が？」この人まじです？

「天使さまのお体を食べると長生きできて幸福に満ちた人生が送れるんです！」

天使さまって病人なんだけど！ 長生きどころか早死にするんじゃない？

「ね、いいでしょ？」

よ、よくないです。

「せめてなめさせて？」

美加子の顔はもう目の前だ。

「健康に悪いってば！」

「いいじゃない。ぼくに幸せをください！」

そう言ってがーっと襲い掛かってくる美加子。わたしは思わず目を閉じた。

と、ぱつと腕を掴まれる感触が消えた。

おそろおそろ目を開けると、美加子は離れて笑っていた。

「なんてね、冗談」

さっきまでとは少し違う微笑み。ちよつと寂しそうだった。

「ちよつとふざけてみただけ。最後に」

最後。

ああ、

そうなんだ。

天使病の患者は専用の病棟に入って、そこで残りの一生を過ごす。つまり入院で、すなわちお別れなのだ。

「沙凩、天使さまになっても、ぼくのこと忘れないでね？」

「美加子」

わたしはうんうん頷いた。切ない気分がどんどん心を満たしていく。

「忘れないよ。ぜったい」

「お見舞い行くから」

「うん」

「病院の場所とかつてもう分かるの？」

「ううん、まだ分からない。分かったら教えるよ」

「いつから入院？」

「それもまだ、分からないんだ」

「そっか……」

そこで言葉が途切れた。

二人して、しばらく黙る。

「まっ」わたしは何だか泣きそうだったので、努力して明るい声を出した。「もう二度と会えないってわけじゃないと思うし、そんな大したことじゃないでしょっ」

「うん」

「わたしがテレビに出たら、あの天使さまわたしの友達なんだよすごいでしょって言えるよ」

「うん」

「まあやっぱり、ちょっとは、いやかなり寂しい、けどね……」

「うん……」

だめだ。失敗した。

だって、美加子のせいだ。美加子の目と鼻頭がどんどん赤くなっていくのが悪いのだ。そんな顔されて笑っていられるほどわたしは鈍くない。

「うー、沙風い……」

そんなぐずぐずした声でわたしの名前を呼ぶなよ。

ああ、だめだ。涙が出てきた。目から溢れてぼたぼた落ちた。

「あ」

それを見た美加子が声を上げた。

「ん？」

泣きながら微笑むという、かなり切なくなる表情で。  
でも。

「涙、なめてもいい？って痛あつ！」

わたしは美加子の頭のきれいな分け目にチョップしてやった。雰  
囲気ぶち壊した！

両手で頭を押さえて、美加子は苦笑い。涙目なのはチョップのせ  
いもあるかもしれない……（分け目チョップは素肌に直接ヒットす  
るので、いたい）。

「まあ、湿っぽいよりはね。やっぱり笑ってお別れしたいじゃない」  
それはそうだけど。何か、釈然としないなあ。

「入院するまでまだ少しはあるでしょ？ その間にたくさん、楽し  
いことしようね」

それについては、異論なし。

わたしは、はつきりと頷いた。

## 1章、2

わたしが天使病に罹ったことを、育ての親である叔父夫婦に言ったときのことはあまり思い出したくない。というか、そもそも叔父夫婦にまつわる思い出で良かったことなんて殆どないんだけど。

天使病だった、入院する、と言ったときの顔。

嬉しそうだったな……。

わたしの存在は、あの人たちにとって、金銭的にかなりの負担になつていたみたいだ。天使病患者の治療や生活、一言で言うとなんか全部、にかかる費用は全て国が負担してくれるそうなので、叔父夫婦はわたしを養う必要がなくなる。

つまり、あの人たちにとって、わたしの存在が消えてなくなるのと同じなのだ。

惜しまれることは全然期待していなかったけど、それでも、ああもあらかさまに嬉しそうにされるとショックだった。人間、やっぱり、お前居なくてもいいです、むしろ居ないほうがいいです、と言われたらかなしい。

まあわたしのほうも気楽にはなるんだけどね。……とか、無理矢理にでも前向きに考えないとだめだった。

\*

入院日は、あつという間にやってきてしまった。家での生活に惜しむようなことはほとんどなかったから、それは良い。むしろ美加子とか、学校関係のほうが後ろ髪引かれる思いだった。

面会謝絶だつて言われたから。

メンカイ、シャゼツですよ……。はあ。

だから余計に。やっぱりというか、最後は泣いてしまった。でもちゃんとお別れをしてこれた、と思う。これからどうなるか分から

なくて不安だけど、わたしはその思い出を胸に、やっていけると思うのだ…… たぶん。

事前の説明によると、何も持っていなくていい、というより持ってくるなということだったので、わたしはほとんど手ぶらだった。一番痛かったは携帯NGだったこと。まあ病院だし、それは仕方ないのかもしれない。とりあえず生活必需品は全部用意してもらえらしい。

いまはお昼過ぎ。わたしは近くの小学校の校庭で、お迎えを待っている。待ち合わせ場所にここを指定されたからだけど、理由は不明。ちなみに日曜日だから、誰もいない。

落ち着かない気分だ。お迎えか、文字通りだよ、とか暗い気分ですわってみたい。笑った後でため息が出た。

天気は良かった。雲はなく、空はお昼過ぎにしては珍しいくらい深い茜色に染まっている。いつもはもっと薄い、紫とか藍とかそれ系の色なのに。

茜色は、なぜか切ない。

どうにも今の心境に合い過ぎていて、もし神さまでも居るなら、もしやわたしのために用意してくれたのか、なんて普段は全然考えないことに思いを馳せたりしていた。

その夕空の中を、一機のヘリコプターが飛んできた。こちらに向かってくる。ヘリは真っ白だった。天使さまの色。もしかして、と思うわたしの予感を裏付けるように、それはゆっくりとわたしの目の前に舞い降りた。なるほどだから校庭、とかわたしは一人で納得。ヘリから大人のひとが出てきて、名霧沙凧さんとご家族の方ですね、と聞いてくる。叔父夫婦がすかさずにじり寄って挨拶した。見たこともないくらい愛想がいいその姿をできるだけ視界に入れないようにしながら、わたしはさっさとヘリに乗り込んだ。彼らに最後の挨拶はしなかった。何だか捨て鉢な気分だった。

ヘリの中ってどうなってるんだろ、と思いながら体を引き上げると、目が合った。

先客がいた。

何故か誰もいないと思いこんでいたわたしは、面食らって一瞬固まってしまった。

「はじめまして」

先客であるところの女の子は、何だか大人びた口調でそう言った。

「あ、は、はじめまして」

わたしはぎくしゃくした動作で、外見通りに狭い内部を縦断して、その子の隣に腰を下ろした。

「日野日羽<sup>ひのひな</sup>よ。よろしくね」

短くて覚えやすい名前だなあと思いつつ、お返しにわたしも自己紹介。

「名霧沙風です。よろしく……あの、あなたも？」

「日羽でいいわよ。あなたの思ってる通り、入院」

やっぱりそうかあ、とわたしは納得した。

だってものすごい美人なのだ。肌はきめ細かくてきれいだし、長い髪は絹みたいサラサラでしっとり真っ黒。切れ長の瞳。純和風美人。わたしははあ、と溜息をついて思わず自分の貧相な胸を見下ろした。わたしと同じ年くらいだと思っただけだなあ。

「やっぱり人それぞれよね……」

「何がっ？」突然日野日羽がしみじみと呟くものだから、わたしはどきっとして彼女を見た。思わず胸に両手を当てて。彼女はそんなわたしをきよとした様子で見ている。

「あ、いえ。あなたも随分落ち着いているようだったから。私の周り、私が天使病だつて分かったら大騒ぎだったのよ」

ああ、そういうこと。

「それだったら、わたしの周りもすごかったよ」

わたしは主に美加子を思い浮かべながらそう言った。

「ただ病気になっただけなのにね。そんなに騒ぐことかなあって」

「同感ね。それだけ、天使の人氣がすごいということなんでしょうけど」



日羽もわたしに似て、天使さまに対する接し方が割とドライなようだ。すこし共感を覚えて、ちよつと安心する。入院先でみんな天使バンザイしてたらわたし、やってけないかもだし。

それにしてもそんな二人が天使さまになるとは、何というか皮肉な結果だ。どうせならすきなひとがなったらよかったのに。いや病気だし、よくはないけど。

ヘリが浮き上がった。そういえばヘリに乗るのは初めてだったけど、意外に怖くない。もつとぐらぐら揺れたりするものだと思うってたけど。

ところで。

「なんだか、それっぽいヘリだね……」

わたしはヘリの中を改めて見回した感想として、そう述べた。医療器具っぽいのがそこの壁に取り付けられていたり、天井からぶら下がっていたりしている。救急車ならぬ、救急ヘリ？

「このヘリ、天使がいつも移動に使っているのをそのまま転用しているみたいね」

なるほど、天使さまは病人だからして、移動中に具合が悪くなっても対応できるようにということですか。

「わたしたち、病気……なんだよねえ……」

今のところ、特に気分が悪いとか具合が悪いという自覚が全くなかったです。だからこういうのを見ても、自分がその世話になるところが全然想像できない。

「そうよね……病気、なのよね」

日羽は何だか沈んだ顔で黙ってしまった。わたしと同じで実感がないのか、それとも病気になってしまったことを憂いているのか、よく分からない。

きゆうに雰囲気が暗くなったので、わたしはちよつと焦った。

「ま、まだ全然悪いとこないのに、入院でカンヅメなんて大げさだよね？」

自分でも妙に思えるくらい明るい声で、そんなことを言う。言っ

てからちよつと失敗したかと思った。彼女にはどこか悪いところがあったのかも。

だけど幸いというか、日羽はにつこり微笑んで普通に返してくれた。

「そうよね。でも自覚症状がないっていうだけで、水面下では結構進行してるとか……」

「ええっ」

わたしは思わずのけぞってしまった。なぜなら日羽の笑顔がちよつと怖いかんじ、すなわちにつこりからにやりに変わったからだ。

「お、おどかさないでよ」

「ふふ、言ってみただけよ」

このひとは……。

「大丈夫よ。自覚なくても強制入院で検査なんて、天使病じゃなくてもよくある話よ」

「そうなんだ」でもそれは大丈夫でもなんでもないような。

「病院ってどんなところなのかなあ」

「そうね、分からないけど……住みやすいといいわよね。噂では結構いいところらしいけど」

「へえ、そうなんだ」

わたしの天使さま知識はほぼ全て美加子から聞かされたものであり、美加子は病院に関する話をぜんぜんしてくれなかったなのでその噂の内容は分からなかった。

「これから一生病院暮らし、なんだよね」

「そうね」

「治らないのかな？」

「そういう話、聞かないわよね」

「そうだねえ……」治ってたらニュースになってそうだし。天使さま引退式とか。

うーむ、治らない病気なのにこんなに自覚がないって、アリ？いや痛いより全然いいんだけど。

そんなとりとめのない会話をしばらく続けていると、ヘリが下降した。またどこかの学校に着陸するようだ。

窓から外を眺めていると、中年くらいのおじさんと、その隣に、小柄な女の子の姿。遠目でよく見えないけど、女の子はわたしたちより少し下、中学生くらいに見える。あの子がそうなのかな？

と思っていたら、果たしてその子が増り込んできた。

その子は不安げな瞳でわたしたちを見ると、なぜか慌てたように目を逸らして離れた席に、しかもこちらに背を向けて座ってしまった。わたしは日羽と顔を見合わせると、連れ立ってその子のところへ歩いていった。

「こんにちは？」

そつと声をかけたつもりだったんだけど、後ろからだったせいか、その子は痙攣したみたいにビクツとなってこつちを振り向いた。

その子も、やっぱりというか、とても可愛かった。肩くらいまで伸びた髪に陽が反射して、輪っかを作っている。何というか小動物系。笑ったら、見ているだけで幸せになりそうな気がする。

するんだけど……。

なんだかものすごくおどおどしているのだ。わたし、何かした？とか不安になるくらい。見た目がかわいらしいので余計に心配になつてしまうのだ。虐められてないかなあとか。すこし変な気分になる表情だ。

「初めまして。日野日羽よ」

日羽の落ち着いた声で、正気に返るわたし。

「あ、わたしは名霧沙風」

「あつ、ほ、穂<sup>ほのむぎ</sup>ノ村、奈緒<sup>なお</sup>です」

かわいい声だなあ。

「よろしくね。奈緒も入院？ あ、丁寧語じゃなくていいよ」  
わたしの質問に、がくがく頷く奈緒。激しく人見知りするタイプなのかな。

日羽と二人で、奈緒の近くに腰を下ろす。奈緒は俯いて固まって

しまった。どうしようか、という気持ちを込めて日羽を見ると、目が合った。同じことを考えてたと分かって、二人で苦笑い。

「ね、奈緒は天使さまになるって聞いて、どう思った？」

とりあえず無難そうな話題を振ってみる。

「あ、わ、わたしは」

すると、俯いたままではあったけど、奈緒の声にほんのすこしだけ、力がこもった。

「ずっと、憧れてたから……」

そして頬を桃色に染めて、とても幸せそうに、口元を緩めた。やっぱり笑うと可愛いなあ。

「すごく、嬉しいなって……」

ああ、この子も天使さまファンなんだなあ。

わたしはまたも日羽と顔を見合わせてしまった。どちらかというと奈緒みたいな子のほうが多いつて、分かつてはいたけども。

それにしても、世の中には病気になって嬉しいという子がたくさんいるのだなあ。天使病限定だろうけど。どうなんだろう、それって

「でも、わたしなんか、ちゃんと天使さまになれるのかなあ……」

小さい声、また不安げな表情に戻ってしまった。それはきつと身体的なことじゃなくて、ちゃんと天使さまとして社会貢献できるのかなという意味なんだろう。

「それはわたしも、ちょっと心配だな」

だいたい天使さまは具体的に何するのかさえよく分かってないし。訓練も何もなくて、いきなり天使やってください、とはならないと思うわよ」

日羽は気楽な構えだ。わたしも彼女を見習おう。

「でも……」

奈緒はやっぱり不安みたい。

「まあ、きつと大丈夫。よくわからないのは同じだし、これから一緒にがんばっていこうよ。仲間なんだし」

ね？ と奈緒に向かって首を傾げると、彼女はちょっと驚いたよ

うに目を丸くした。わたし何かへんなこと言ったかな。

「うん……」

俯いてしまったけど、でも、その後で安心したみたいに表情を緩めた。

「そくだよね……がんばる。がんばろう」

そしてうんうん頷いて、えへへと笑った。ほわんかオーラがちいさい体からふんわり放射。なんだか和む。

奈緒の緊張もずいぶんほぐれたみたいで、それからは普通の雰囲気になった。わたしはほっとした。これから一緒に天使さまやるのに、ずっとおどおどされてたんじゃちょっといやだしね。

## 1章、3

三人でしばらく話し込んでいると（といっても奈緒はあんまり喋らなかった。引っ込み思案な子だ）、ヘリが降り始めた。いつの間にか随分陽が傾いている。深い深い茜色。そして眼下は木ばかりだった。どこかの山の中みたいだ。

少し視線を巡らすと、山の中にぽっかりと空いた場所があつて、そこにいくつかの建物が見えた。ヘリはそこに向かっていているみたいだった。

ある建物の屋上に、着地。長いような短いようなフライトは終わりで、いよいよわたしたちは、これからの人生を過ごす家である、病院に辿りついたようだった。

病院が家。我ながらいやな想像。

三人して夕日が照りつける屋上に降り立つと、一人の女性が出迎えてくれた。

「初めまして。新しい患者さんたちね」

三十歳くらいの女のひとだった。ジャージ姿で、さばさばした態度で話しかけてくる。手にクリップボードみたいのを持っていて、視線がわたしたちの顔と順番に往復していた。あそこにわたしたちの顔写真その他が貼ってあったりするんだろう。

「間違いないようね」

確認を終えたらしい女の人は、ボードを下ろすと改めてわたしたちに向き直った。

「私は浅川 瞳<sup>あさかわ ひこみ</sup>。これからあなたたちの、寮母兼教師になります。よろしくね」

「あ、よろしくお願いします……」教師？

日羽は礼儀正しく、奈緒はやっぱりおっかなびつくり。三人三様に挨拶するのを待って、先生であるらしい浅川せんせは口を開いた。「まずはあなたたちの病室に案内するわ。ついて来て」

病院の中は、ちょっとイメージと違っていた。床はフローリングで、壁にはちゃんと壁紙が張ってある。ところどころに花が飾られていたりした。病院というより小洒落たマンション？みたいな雰囲気……なのだけど、においだけは、ここが何であるのかはつきりと主張していた。ちょっと薬くさい。

せんせは階段を二階分下りて、廊下の端にある部屋の前で立ち止まった。

「ここがあなたたちの部屋よ」

部屋の入口の横にはネームプレートが掲げてあって、そこには四人分の名前が書いてあった。

日野日羽

名霧沙凪

穂ノ村奈緒

白河夢

一人だけ、知らない名前があった。しらかわはかな、と読み仮名が振られている。それを横目に、誰だろうなあと思いつつ、扉開けっ放しの部屋の中に入ろうとしたわたしは、思わず立ち止まってしまった。

ベッドの上にお人形さんが座ってる！

ただっ広い部屋の中、四つあるベッドのひとつに、可愛らしいお人形さんがちんまりと腰を下ろしていた。半分振り返るような体勢で、こちらを見ている。ゆるゆると波打つ長い髪が、ベッドの上に散らばっていた。

そのお人形さんが、あ、と声をあげた。

そして微笑んで、小さく頭を下げるように、こんにちは、と挨拶する。長い髪が揺れて一房、ベッドの縁からはらりと落ちた。

夕日に照らされて、整った顔だちに朱と翳が差す。消えてしまいそうに儚い微笑み、それはまるで、絵みたいな光景だった。

ここまで名が体を表している人もまずいない。ベッドの上に居たのはもちろんお人形さんなんかではなくて、知らないネームプレートの女の子、白河夢だったのだ。

\*

四人揃ってまずはじめに浅川せんせがやったのは、わたしたちの右手にバンドを巻きつけることだった。

桃色の、ビニールでできたバンド。生年月日と名前が書いてある。外せない構造になっているみたいで、引っ張っても取れそうになかった。

「こら、取らないの」いきなり怒られた。

「取り違えとかないようにするための、大事なものだからね」

「は、はい」

「それじゃ、最初は一通り案内するから、これ、暇なときにでも読んでおいて」

その次にして最後、わたしたちに手渡されたのが「病棟での生活ルール」という冊子。説明らしきものはそれで終わりらしく、浅川せんせはさつさとどこかに行ってしまった。あっさりしすぎ！と思っただけ、延々説明されても退屈そうだしこれはこれでいいかもしれない。条件反射的に冊子をばらばらとめくると、一日の生活スケジュールとかお風呂の使い方、図書館とかの病院内の施設についてなんか書かれていた。

で、当然のように、閉じる。

それよりも、最後の同室者のほうが気になるのだ。

「ね、夢も今日からここなの？」

名前だけの簡単な自己紹介の後、みんなそれぞれ四つあるベッドに腰を落着けた辺りで、わたしはそう切り出した。

「うん、わたしも。みんなよりちよつと前に着いたみたい」

「やっぱりへり？」



「うん。わたしひとりだったから、ちよつと寂しかったわ」

ちよつとはかなげに苦笑い。手足なんかすごい細くて、なんとうか守ってあげたくなるような女の子だった。

「あと一人くらいは乗れたと思うし、儂も一緒に連れて行けばよかったのにね」

日羽が答える。

「多分、儂が来たのと方角が違ったんじゃないかしら」

「あ、なるほどね。わたしは関東だったけど……」

「わたしは九州ね」

ということとは、ここはその間にあるということか。そういえば随分長いこと、ヘリに乗ってたもんなあ。

ところで儂は九州人。その割には……、

「九州のひとつて方言ないの？」

「ある、んだけれど……でもわたしの周りには偶然、関東出身の人はかりいたみたい」

「へえ……学校でも？」

儂もやっぱり、わたしたちと同じくらいに見える。当然学校に行ってるだろうと思って聞いてみたんだけど、儂の顔がちよつと曇った。すこしだけ困ったような微笑。

「わたし、学校には行ってなかったのよ」

「えっ」

「ずっと入院してて。あ、そんなに重い病気じゃないのよ。でも、もしものときのためって言われて」

慌てたように、言葉を重ねる儂。わたしも慌ててしまう。

「ごめん、いきなりへんなこと聞いちゃって」

「ううん、気にしないで」

てのひらをふりふり。その腕の細さも病気だったと言われると納得してしまう。

「にしても」わたしは話題を変える。「儂ってきれいだよ。お人形さんみたいな」

「……うん」

ずっと黙っていた奈緒が、ちいさな声で、感心したように、同意した。わたしや日羽と会ったときはおどおどしていた奈緒だけど、儂相手にはそんな様子がない。これは儂の出してる雰囲気のせいだと思う。とっても柔らかい雰囲気なのだ。

「ありがとう。でも、みんなも天使さまみたいにきれいよ」

ふふ、と言つて花咲くように笑う。本当、絵になる笑顔だ。

「天使さまといえば、儂はどう思った？ 天使さまになるって言われて」

日羽はクールで、奈緒は懂れてたつて言つてたけど。

「私は、嬉しかったわよ」

ちよつとどきつとした。相変わらず雰囲気は柔らかかったけれど、強いやる気というか、意志を感じるというか、……うまく言えないけど、声にそんな感じの何かが混じったから。それがどういう意味かはわからないけれど、一つ分かったのは、儂も天使さま肯定派だということだ。

そんな雰囲気は、でも、嘘だったみたいに一瞬でどこかに行つてしまった。

儂はふと思ひ出したように、斜め上を見てこう言つた。

「そういえば、現役の天使さまたちってどこにいるのかしら？ 何だか人の気配がしないけれど……」

そういえばそうだ。

「お勤めに出てるんじゃないかしら？」

と、日羽。なるほど、お仕事中か。

「お勤めってちゃんとできるか、不安だわ……」

儂が、わたしたちの心中を代弁するようなことを言う。これに対し、日羽が衝撃の推論を述べた。

「さっきの浅川さん、寮母兼教師って言つてたわね。きっとその辺りに関する授業とか、してくれるんじゃないかしら」

先生って、そういうことか！

「病院に来てまで、勉強かあ……」

我ながら情けない声が出た。でも考えてみれば当たり前だ。天使さまのための訓練とか何もないはずがない、それすなわち勉強、ということだ。

「ふふ。まあ、みんなで助け合っていきましょう」

日羽は余裕の笑み。この人は頭よさそうな感じがする。

「うう。よろしく願います……」

因みにわたしは、勉強は苦手だ。げんなり気分をごまかすべく、ばさーと布団に顔をうずめる。きもちいい。異様に肌触りのいい布団だ。家のより全然いい。

家よりいいと言えば、この病室。ベッドに机、クローゼットが四人分、さらに洗面台も大きなのが備え付けられているのに、広さにはまだまだ余裕がある。内装もきれいで、はつきり言って快適だ。

「ここ、快適だよね」

わたしがそう言うのと、奈緒ががくがくと激しく頷いた。他の二人もそれぞれに同意。

「でも、病院なのよね」

日羽、さくつといい気分を破壊。わたしは突然怖ろしいことに思い当たった。

「もしや点滴とかありますか？」

「定番ね」

日羽め。すこしは気遣いというものをしてほしい。……奈緒も蒼い顔してるじゃないですか。

「大丈夫よ。慣れれば大したことないし、すぐ慣れるわよ」

儂さんそれフォローになってませんから。

「そうそう。それに点滴なんかの治療よりも、検査のほうがつらいと言っし」

どう考えてもわざとおどかしている。そのにやにや笑いをやめて欲しい。日野日羽はサディスト女だ。

「天使病の検査って、どんなのかしらね……」

そして夢はちよつと天然？

段々付き合い切れなくなってきたので、奈緒に話を振って逃げることにする。

「それ、何が書いてあるの？」

奈緒はぼやつとしていたらしく、わたしの声にびくつとして顔をあげた（多分わたしと同じで病院トークを聞きたくなかったんだろう）。その手元にはさっき浅川せんせが置いていった「病棟の生活ルール」がある。

「えつと……」

奈緒の視線はわたしの顔と手元の冊子を三往復くらいした。

「もうすぐ、ご飯の時間みたい」

そつえばお腹減ったな。

「ご飯でどんな感じなんだろうね」

「病院食だから、やっぱり健康的なのが出そうよね。夢は知ってるかしら？」

夢にあつさりと入院ネタを振れる日羽は、結構ただ者ではない。わたし的には結構触れづらい。

当の本人は全く気にしてないようで、

「そうね。配給食より少しいいものが出ているみたい」  
なんてふつうに答えている。

「じゃあ、ちよつと期待していいかな。……配給っておいしくないし」

「全くね。それくらいの役得がないと、割に合わないわ」

あ、奈緒の目が、ちよつと輝いてる。相当期待してそうだ。

「なんだ、ちようどご飯の話してたのか」

そこに聞き覚えのある声。入口を見ると、浅川せんせが立っていた。

「晩ご飯の時間だよ。食堂に案内するからついてきて」

## 1章、4

「何か見たこともないくらい、豪華な感じなんですけど……」

いま食堂にいるのはわたしたち四人だけ。やっぱり天使さまたちはどこかに出かけているようだ。せんせも何やら忙しいらしく、案内が終わるとどこかに行ってしまった。

だけどそんなことよりも。

ちよっとおかしいくらい豪華な夕飯だった。ご飯に味噌汁、焼き魚……というと基本のように聞こえるけど、どれもぴかーと輝いてる。いや、冗談抜きで。

「確かにこれは……すごいわね」日羽も驚いている。「病院食って、こんなにすごいのかしら」

「ここまでは……」

夢まで驚いているということは、これは本当にすごいらしい。

「とりあえず、いただきますーす」

わたしが言うのと、みんなが唱和。

「頂きます」「い、いただきます……」「いただきます」

ご飯を一口。う、うまい！ ふっくらもちもちが口の中で弾ける。しかも何だか甘い。配給米のぱさぱさカラカラに比べると、もはや別の種類の食べ物みたいだ。

「これ、日本米だわ……」

感嘆した様子で、日羽が呟いた。まじですか、日本米って言えば超高級品じゃないですか。

「お魚もすごくおいしいわ……」

ほとんど呆然とした様子で、儂。何ていう魚か分からないけど、淡泊な中にも脂が乗っていて、確かにものすごくおいしい。

「ひうつ」

しゃくりあげる声が聞こえたのでドキッとして見ると、奈緒が泣いていた。

「ど、どうしたの、奈緒」  
「ううう」

隣に座っていた儂が、すかさず背中を撫でてあげた。大粒の涙をぼろぼろこぼして泣いている。

「どうしたの？」

儂が優しく尋ねると、途切れ途切れに奈緒は答えた。

「ご、ごはん」

「うん」

へんなものでも入ってたのかな……。

「お、おいしいよあ……」

あまりのおいしさに号泣ですか。

何だか逆に、微笑ましい気分になった。何といっても号泣である。泣くほどかなあと思わないでもないけど、気持ちはよく分かる。このご飯は、それくらいおいしいのだ。

みんなで顔を見合わせる。やさしい表情だった。

「毎日こんなご飯が食べられるのかなあ」

それだったら相当幸せなんだけど。

「わたしたちが生まれるちょっと前くらいまでは、これくらいのご飯が普通だったそうだけど……」

奈緒が落ち着いた頃を見計らって、儂がそんなことを言った。

「え、そうなの？」

なんてぜいたくな時代なんだ。

「ていうか、じゃあなんで今はこんなになっちゃったの？」

「……黒塵のせいよ」

儂の表情が、ちよつと曇った。

「黒塵……って？」

何となく儂に聞くのがためらわれたので、わたしは奈緒を見て、日羽を見た。奈緒は知らないらしく、ぷるぷると首を振ったけど日羽は知ってるみたいだった。

「昔、大裂穴っていう大きな災害があったって、聞いたことないか

しら」

「うーん、知らないなあ」ニュースか何かで名前くらいは聞いたことがあったかもしれない。

「十五年くらい前になるのかしら？　世界のいろいろなところで、とつぜん、地面に大きな裂け目ができたのよ」

「へえ……」

「日本だと、北海道に一つ。当時はずいぶん、沢山の被害者が出たみたい」

「そうだ、ニュースで見たのってその大裂穴十周年だから北海道が映ってたやつだ。」

「そして、その裂け目からは塵が噴き出している。それが黒塵」

「そうなんだ。でもそれと食べ物が、どう関係あるの？」

「塵が大気中に巻き上がって、太陽の光を遮ってるのよ。それで作物が育たなくなっ、食べ物があまり採れなくなった、ということらしいわ」

なるほど。大裂穴というのはずいぶん重大な災害だったようだ。

「あ、もしかして今、食べ物が配給なのってそのせい？」

「そうみたい。以前はお金さえ払えば、好きなだけおいしいものが食べられたそうよ」

「へええ、昔はいい時代だったんだね」

「ね？　と奈緒に同意を求めると、うんうんと熱心に頷かれた。ちんまいので何だかわいらしい。」

「大裂穴以前は、空もいつも青く澄んで、きれいだったそうね」

「そう言う夢の目は何だか遠く、笑顔はちょっとだけ、弱々しい。」

「今は大体いつでも『夕空』っていうけど、昔は夕空って、日が沈む前のほんの少しの間にしか、なかったみたい」

「きれいな空かあ……そういえば、昔の映画とかの空って青くてきれいだね。何だろうこれって思ってたよ」

「空と言えば、灰っぽい青色とか藍色とか、暗いイメージが強い。ときどき真っ赤になってるときはきれいだと思うけど、それも明る

いとは言えない雰囲気だし。

「それも黒塵のせい？　なんだよね」  
頷く儂。

これについて、日羽が追加で説明してくれた。

「大気に散った塵が、陽の光を反射するのよ。青い光はたくさん反射されると見えなくなつて、赤い光が残るから、空が赤っぽくなるのね」

「へえ……く、詳しいね」いまいちよく分らないのは内緒だ。

「ええ……。父の仕事の関係で、よくそういう話を聞かされていたのよ」

日羽は苦笑い。ちよつと喋りすぎた、というかんじの顔だ。

「日羽のお父さんは、学者さん？」

「ええ。そうだったわ」

「だった？」

「もう随分前に、死んでしまったの」

「あ、そうなんだ……」

ちよつと申し訳ないこと聞いたかな、と思つたけど、日羽の顔はそれほど深刻な感じでもなかった。

「昔の話だから、もう気にしてないわよ。だからいいの」

「う、うん。わかった」

こつちとしては、やっぱり多少気を遣つてしまふ。でも日羽の態度は本当に気にしてなさそうだった。

「その、黒塵のせいで、なんだか随分色々なことが変わっちゃったんだね」

そうね、と日羽。

暗い話はちよつといやだったので、わたしは話題を変えた。

「えつと。天使さまつて、結局どういうことするのかね？」

「ボランティア活動よね。老人ホームとか、児童養護施設に行つて話し相手になつたりとか、お茶配りとか」

「そついうのつて、テレビでよくやってるね」



「そうね。あとは……」

「チャリティコンサート、とか……」

そう、ちいさな声で、奈緒が言った。奈緒が自分から喋るのは、これが初めてだ。この子なりに気を遣ったのかもしれない。

「コンサートって、楽器とか？」

「うん……楽器の天使さまもいるし、歌う天使さまも」

「へえ……奈緒は行ったことあるの？」

ぶるぶると、横に首を振る奈緒。天使さま好きみたいだから行ったことあるんだろうと思ったけど、ちよつと意外。

ここで夢が話に加わってきた。

「部活、って言うてたわよ」

「部活？　っていうか、夢って天使さまと話したことあるの？」

「ええ、入院してたとき、一度だけ天使さまがボランティアで来てそのときにちよつとだけ、話すことができたの」

まだ少し顔が白かったけど、夢の表情は笑顔だ。いいなあ夢ちゃん、と呟く奈緒に、奈緒ももうすぐ会えるわよ、なんて返す。もう平気みたいだ。

「……ていうか、部活なんてあるんだ」

「最初から部活として活動してたわけじゃなくて、誰かが冗談で『部活』って言ったのが通っちゃったみたい。わたしたちと同じくらいの年の天使さまばかりだから」

「なるほど」そういえば、もうふつうの学校へは行けないんだよねあ。

「いろいろなんだね、天使さまのお仕事って」

「そうね。結局は自分でやりたいことを、やるのかもしれないわね」やりたいこと、か……。よくわからないな。ちよつとばかり不安が増した気がする。

「さて、ごちそうさまでした」

気がつけばみんなの食事が終わっていた。

色々思うところは、あるにしても。

今はとりあえず、明日からも同じようにおいしいご飯が食べられることを祈ろうと思う。

夕ご飯が終わった後は、お風呂（ホテルみたいにとでかいお風呂だった）。奈緒が妙に服を脱ぐのを躊躇っていたのが印象的。恥ずかしかったのかな。みんながはだかになってしまっただけ、という感じだった。

それが終わると、今日のところは、何もすることがないらしい。寝るにも早い時間だったから、ベッドの上でごろごろしながら話している、ふいに入口から声が飛んできた。

「あつ、新しいひと、いたよ！」

振り向けば、そこはテレビの中の世界。

病室の入口は真っ白、天使病患者であるところの天使さまたちがひしめいていた。白い髪、白い肌、白い服、女のひとと男のひととみんなものすごい整った顔立ちをしていて、とっぜんその場所だけ昼になったみたいに明るく見えた。

天使さまたちは、うわあやっぱり今回もかわいいなあ、とか黒髪懐かしいなあ、などと言いながら次々病室に入ってくる。来た。頭を撫でられた。

わたしは大いに慌てて、助けを求めるように奈緒を見た。

奈緒はだめだ。

わたしと同じように頭を撫でられたり、体をぺたぺた触られたりしているけど、目が遠い。口元もふにやふにやだった。ここではない、どこかへみたい。日羽と僕もそれぞれ天使さまにいじられている。どこことなく困ったような顔。

白い激流がわたしたちを呑みこんで、どこか遠いところに連れ去ってしまうように思えた。テレビの中の世界とはつまり、夢の中の世界だ。

とんでもないところに来てしまった！

本当だったのだ。ここが天使さまたちの巣だというのは真実だったのだ。今の今まで、実は信じていなかった。ちよつと豪華なところに入院することになったなぐらいの気持ちだった。でも違つただ。ただの病院ではないのだ。

ここは天国、天使さまのまします白い樂園だったのだ！

というぶつ飛んだことを考えてしまつくらいすごい光景だった。全員白くて超美形、後光が差して見えるのだから、仕方ない。ないのだ。

わたしの頭の中まで、ついでに真つ白になった。結局、天使さまたちが満足するまでしばらくいじり回されてから、ようやく解放された。もう、半ば放心状態。

奈緒の状態がいちばん酷かった。

「うふふう……」

枕に顔を埋めてなにやら奇声を上げている。笑い声らしい……。

ときどき思い出したように足がばたついていた。不気味だ。

「奈緒が、壊れちゃった……」本気で心配そうな声をあげる儂。

「しばらく放っておけば大丈夫よ」冷静な日羽。

そんなみんなをぼうつと眺めながら、わたしはようやく実感していた。

これから本当に、天使さまたちの仲間入りをするんだ。

\*

入院最初の夜は、なかなか寝付けなかった。たつた半日で、ものすごく色々なことがあつた気がする。

何だかずいぶん、遠いところにきてしまったような……。

まったくの異世界だった。入院するのは初めてだったし、同年代の子と共同生活みたいなことをするのも初めてだったし、あんなにおいしいご飯食べるのも初めてだったし、生で天使さまを見るのも初めてだったし、あれ？ いいことばかりな気がしてきた。

でも明日からは治療とかするんだろうし、というか、わたしは病気なのだ、自覚ゼロだけど。……やっぱりいいことばかりじゃなさそうだ。はあ。

ベッドの中でぐるぐる考えながらもぞぞしていると、他のベッドからも同じような音が聞こえてきた。全然眠くないわたしは声をかけてみた。一応小声で。

「ね、起きてる？」

「起きてるわ」これは日羽の声だ。

「私も」「……うん」何だ全員起きてるじゃん。

「何だか眠れないんだよね」

わたしがそう言くと、皆がそれぞれに同意した。皆同じ気持ちなのかなあ……。

「ねえ、みんな寂しくない？」

これは夢の声だ。

寂しい、か。わたしはそんなに寂しいとは思っていなかった。美加子とかの友達と会えないのは寂しいけど、親はもういないし。

まず日羽の声が聞こえてきた。

「私は寂しくないわね。こういうときはホームシックになるものかもしれないけれど、私には親がいないし」

お母さんもいなかったのか……。でもやっぱり、そんなに深刻な感じがしない。もう気持ちに整理がついてるかんじの声。

だから、その雰囲気に乗っかって、わたしも自分のことを言ってしまう。

「日羽もそうなんだ。わたしもそうだから、あんまり寂しくはないなあ。みんな、いい感じだし」

「ふふ、そうね。ここに来るまで不安だったけれど、良かったわ」

「そう言う夢はホームシックとかどうなの？」

「わたしは、慣れてるから」

ずっと入院生活だったから、あまり状況は変わっていないんだと言っ。彼女の声は明るい。

「わ、わたしも……」

奈緒の声だった。

「心配してくれるような親、いないから。……このほうがいいな……」

消え入りそうな声で言う。曰くありがたな雰囲気だった。まあでも、むしろそれが普通かもしれない。わたしたちみたいにすっかり割り切れてるほうが、珍しいかも。

それにしても。

「みんな、ホームシックとは無縁みたいね」

日羽がどこか楽しそうな調子で、そう言った。わたしも何だか妙に高揚した気分だった。連帯感？

「明日から、いっしょにがんばろうね」

仲間意識らしきものを感じたわたしは、勢いに任せてそう言った。それぞれに返ってくる同意の言葉。

同じ立場の人がすぐ近くにいる、安心感とか。

明日からどうなるか分からない、不安とか。

いろんなものが閉じた目蓋の裏に浮かんで消えて、わたしはいつしか眠りに落ちた。

目覚めれば、明日が来る。

## 2章、1

二 天使さまの体には、黒蜜が流れている

「気持ちのいい朝だ！」

翌朝。軽やかにベッドから飛び降り窓に駆け寄ると、かしやーと一息にカーテン全開。射し込む朝日。陽光は元氣と笑顔の素だよな。「はいそれじゃ気持ちよくお薬飲みましょうねー」

空気が読めないにも程がある台詞に振り返ってみれば、看護師さんと思しき白衣の女性が何やら袋を持って、部屋に入ってくるところだった。

「これ、毎食後に飲んでくださいね」

何とも微妙な気分で袋を受け取る。うわぁいっぱい入ってる。

「はい朝ですよ、起きて起きて」

まだ寝ていた他の三人を叩き起しながら薬袋を押し付ける看護師さん。鬼。

「……ふえ？」

寝ぼけ眼で手にした薬袋を眺める奈緒。あ、倒れた。寝起きはよくないようだ。

「あと血採っちゃいますねー」

奈緒ががばつと起きて、この世の終わりのような顔で看護師さんを見つめた。笑顔で注射器を構えた白衣の天使は、奈緒の目には白衣の悪魔に見えているに違いない……。

四人分の採血を手早く終えた看護師さんは、来たとき同様さつさと去って行った。

「なんだかずいぶん、突然よね」 夢は苦笑いしてそう言つと、起きたして身だしなみを整え始めた。

日羽は不機嫌そうな顔で薬袋を見つめている。気持ちは分かる。

\*

朝ごはん（やっぱり豪華だった）を食べに行って幸せな気分で部屋に戻り、少し話していると、さっきの看護師さんが再びやって来た。

そして看護師さんは不幸になる呪文をとねえた。

「それじゃ、点滴しますねー」

「ええっ!？」

悲鳴を上げたのはわたしと奈緒だ。さっきの今でまた注射!？

「大丈夫だいじょうぶ、チクツとするのは一瞬だから」

うそだ！ 針長つ。見なきゃよかった！

痛い痛い痛いもう看護師さんなんて信じない！

「おはよう」

そこに浅川せんせがやって来た。

「早速やってるわね」やられてます。

「検査なんかは、ないんですね」

そう聞いた僕は、もう腕に点滴チューブ装着済。早い。慣れてるせいか。

「うん、天使病の初期治療は、だいたい確立された手順に沿ってやることになってるらしいから。でも採血はあったでしょう?」

浅川せんせが説明する傍らで、看護師さんがそうですよー、なんて言ってる。

そうこうする内に全員への針刺しが完了。看護師さんは病室から出て行った。

「さて、あなたたちのお勉強の話なんだけど」うわ。

…… やっぱり、やるんだなあ。

「あなたたちは全員義務教育を終了してるから、参加は任意なのよ」勉強しなくてもいいんですかつ?」

わたしの言葉に、浅川せんせ、苦笑い。嬉しそうな声出ちゃったのがちよつと恥ずかしい。

「まあまあ、勉強の内容聞いてから答えなさい」

「は、はい」

……というか、全員義務教育終了ってことは、奈緒って高校生だったんだ……中学生だとばかり思ってた。だってわたしの肩くらいまでしか背がないから（ちなみにわたしは普通だ）。

「で、内容だけど。基本的には、一言で言えば、天使になるための訓練ね」

ああ、やっぱりそうなんだ。

「あなたたち、天使については知ってる？」

もちろんだ。みんな頷いた。

「最近知らない子、ほとんど居ないわね。それじゃ一般的なことは省いて、少し詳しい説明をするわ」

せんせは一拍置いて、天使さまについての説明を始めた。

「あなたたちが罹っている病気、通称天使病には、症状にいくつかの段階があるの……」

せんせが言うには、こうだ。

天使病の症状にはいくつかの段階があつて、それは主に外見に表れる。

最初の変化が、髪や肌が白くなる、「白化」。

その次が、肩の辺りからちいさな羽根が生えてくる、「生翼」。

わたしたちがよくテレビで見ていた天使さまは、症状がこの段階にある人たちだ。

ここまでいくと、しばらくは症状が安定するらしい。そして、この状態にある患者さんは、薬や点滴の必要があるとはいえ、健康な人と大体同じように動ける。

「そこで、希望者はボランティアなんかで社会貢献、というわけ。動けるということは、他の誰かのために、何かができるということだから」

（ふむ？）わたしにはちよつと、よく分からなかった。話が飛んでいる気がした。



誰かのために何かをする、みたいなことを、わたしが真面目に考えたことなかったせいかもしれない。

やれることがあるならそれをやる、というのは、分からないでもない気もするけど。

「ボランティアと言っても色々あって、一口には括れないんだけど、基本的な考え方とか、行く場所によつては訓練が必要になったりするの。あ、あとテレビに出るときの心得とかね」

そう言えば、天使さまといえば、テレビに出るんだ。

「すごい人気ですよ、天使さまって」

夢のこの発言に対して、せんせはちよつと苦そうな笑いを浮かべた。意外な反応。

「あれは、ちよつと予想外だったけどね。こんなにおおことになるとは……。でも、テレビに出てる天使たちを見て、心の支えにしてる人もいるって聞くから、結果的には良かったのかもしれない」

「私、そうだったんですよ」「……わたしもです」夢と奈緒が控えめに、そう言った。そうだったのね、と答えるせんせの顔はさっきより少し、満足そうだった。

「で、そんな感じの諸々を、生翼の段階になって症状が安定するまでの間に勉強するわけね」

分かった？　と言うように、せんせはわたしたちを見回した。

「質問が」

日羽が小さく手を挙げつつ、言った。

「どうぞ」

「勉強は、天使のためのものだけですか？」

その質問にわたしはどきつとした。

「いいえ。ここではあなたたちの希望は、できるだけ叶えるようにしてるの。だからやりたいことがあれば、私たちはできるだけサポートをする。……まあ、あまり専門的なことだったりすると無理だけど。高校の勉強くらいなら大丈夫よ」

最近はとくに、普通の勉強をやりたがる子がいなかったから説明

を省いてしまったけれど、ということらしい。

「何をするにも自分の気持ち次第、何もしなくてもいいということですか？」

「その通り」

高校の勉強って言われて不安になったけど、そういうことならひとまず安心。

ていうか、何もしなくてもいいんだ……。すごいところだ。

「……質問はもう、いいかしら？」

みんな頷いた。

「それじゃ、こっちから逆に質問。あなたたち、天使のための勉強、する？」

ちよつと散歩でもする？　みたいな軽い口調だった。

「はい」「やりたいです」

奈緒と儂は即答だった。わたしはすぐに答えられなかった。なりたいか？　と聞かれると、よく分からない。絶対ならなきゃいけないものだと思ってたし。

日羽も答えなかった。

わたしたちが何か言う前に、せんせが再び口を開いた。

「さつきも言っただけど、天使になる必要は全然ないし、別のことがしたければでもいいの。全部あなたたちの自由だし、今やると言っただけで途中でやめちゃいけないということもない」

せんせの顔は、優しい。

「一応言っておくと、ここに来た人全員が天使になるわけじゃないから。天使やらない人もいるから。だから気軽にね」

本当に自由らしい。わたしはちよつと悩んだ。いつそ強制って言われたほうが楽かもしれないと思った。

「私も、やろつかしら」

日羽がそう言った。儂と奈緒は何だかほつとしたような顔をしている。

二人の視線がわたしに集中。そ、そんな目で見られたら。

「じゃ、じゃあわたしも」

って言うしかないじゃないか。

「オッケー。何度も繰り返すように申し訳ないけど、これは自由だから、それだけ忘れないでね」

まあ、とりあえずやってみるくらいなら損はないかな。ものは試しということ。

「じゃあ、今日はとりあえず自由行動。病院の敷地内は、立入禁止って書いてあるところ以外は自由に歩き回っていいわよ。授業は明日からということ」

そのとき。

「あつ、こつちかあ」

入口から女の人の声が聞こえた、と思うとそのひとはずかずかと踏み込んだ。天使さまだ。

「何しに來たの、綾菜<sup>あやな</sup>」

「いやあ、新しい子たちを見に來たんですよ。ゆうべは疲れてすぐ寝ちゃったし今朝は三度寝したからご飯も食べ損ねちゃって、結局今の今まで会えなかったから」

すごい早口……。

「まだこつちの話が終わってないのよ。後にしなさいな」

「かたいこと言わないでくださいよ。教室のほうだと思ってわざわざ無駄に一往復しちゃったばかりの身にもなってください」ぼく？

「それはあなたの都合で」

「やあ、初めましてみんな！」

浅川せんせを完全無視して、綾菜さまと言うらしいその天使さまはわたしたちに片手を挙げて挨拶した。手首の白いバンドがきらりと光った（ような気がした）。

「ぼくは歌撫<sup>かなで</sup>。よろしくね」

やっぱりぼくって言った。世の天使さまファンの何割かに「ぼく」を広めた張本人、ぼく天使さまは、どうやらこの人みたいだ。

「ふむう、みんな天使になるのかな？」

そこそこ長い髪の一部を三つ編みおさげにした、垂れ目がちの二重が愛らしい、少年みたいな口調だけど見た目はとても女の子な歌撫さまは、わたしたちの顔を順に見回しながらそう言った。

「一応、授業は受けるそうよ」せんせがそう答える。

「そっか。じゃあ、そのうち一緒に外に出ることもあるかもしれないね」

「そうそう。だから今は綾菜だけ外に出ててもらえるかな？」

そう言って、歌撫さまの背中を押して病室の外まで運んでいく浅川せんせ。歌撫さまはぶつぶつ言いながらもつつがなく追い出されて行った。

「い、いいんですか？ あれで」

わたしがそう言つと、

「いいのよ。まあ、その内また会うしね」  
との談。

その内とはすなわちその日のお昼ご飯のことだった。

「ここいいかな？」

と言いつつ誰の返事も聞かないで着席する歌撫さま。

「さつきはちゃんと話せなかったけど。よろしくね」

澆刺笑顔でご挨拶。うーん、きれいだ。わたしたちより少し年上っぽいので、まさしく美人、という感じ。喋り方は男の子みたいなので不思議な雰囲気。

「やつぱり黒髪はいいね。初々しくって」

そんなものかなあ。

「世間では白いからいいんだって言われてますけど」

「あは。まあ他のひとから見たらそうかもね。でも私たちにとって白が普通だからね、ずっとここで暮らしていると黒が新鮮になるのだよ」

そついうものですか。

「歌撫さまってここ、長いんですか？」

何だろ？ そう言うわたしを歌撫さまはちょっと面白そうな目で見た。

「うん。今年で五年目になるよ」

「歌撫さまは、今いる天使さまの中ではいちばん前からいる方なんだよ」

奈緒がおおずと話に入ってきた。なるほどさっきの歌撫さまの視線は、わたしが知らなかったのが興味深いってことか。

「天使さまのお仕事って、たいへんですか？」

儂のその質問は、全員の気になるところだろう。

「や、全然楽」

「えええ」

意外な答えだったので思わずわたしは変な声を上げてしまった。

「だって介護とか、そういう重たいことはしないしね。私たちのやることは、せいぜい話し相手になるとか、雑用とか、それくらいだもん」

でも仕事が簡単すぎると段々だらけてくるとか、どっかで聞いたような。

「それってダレたりしないですか？」

そう言つと、突然、歌撫さまの視線が鋭くなった。

「いや、それはないね」

雰囲気引き締まる。不意打ちだったので、絶句してしまった。

「ま、きみたちにもその内、分かるよ」

そう言つた歌撫さまの顔は、もう元のお気楽表情に戻っていた。うむう、何なんだろう。

## 2章、2

そんな次第で、わたしたちの新しい日常が始まった。

朝は点滴。ときどき採血ほか、簡単な検査。点滴スタンドを押し押し、四人で教室に向かう。そのまま授業だ。最初は針刺したまま動くのが気持ち悪かったけど、すぐに慣れてしまった。

午前は授業。「教室」と呼ばれる病棟内の一室で、四人と浅川せんせだけの、ゆるゆるとした、ちいさな授業。病衣の生徒と点滴スタンドが立ち並ぶ授業風景はちよつと異様だけど、居心地はわるくない。

午後は自由。みんなそれぞれに好き勝手なことをしている。日羽と儂は読書、奈緒は絵描きで、わたしはテレビ見たり病院内を散歩……というかうろろしたり。

夜はおやすみ。わたし以外は趣味が趣味だけに、午後と同じような感じで生活している。でもわたしが居るから、このときはみんなで話をしていることが多い。

そんな毎日。

「穂ノ村、起きなさい？」

がばつと身を起こす奈緒。かわいそうに、よだれを拭うのも忘れて目をぱちくりさせている。すかさず儂が横からハンカチを差し出し、奈緒の口元をふいてあげた。

「最近、よく寝てるわよね。大丈夫？」

「す、すいません……」

ちなみに、授業中。黑板にはでっかく「天使のおしごとは、がんばるな」なんて衝撃の文句が書いてある。つまり、基本的な心構えの授業。黑板の言葉は「無理してもいいことないからほどほどに」とかそんな感じの意味だ。

「もうちょっとだね……」

お説教の気配を察知。

「ちよつと待つて、せんせ」

こうなってしまうと、奈緒の性格では何も言えなくなってしまう。だからわたしは奈緒をかばった。

「奈緒が寝不足なのは、夜遅くまでがんばって勉強してるからなんだよ」

毎晩布団の中に灯りを持ち込んで、「はじめてのボランティア」とかそんな感じの本を読み耽っているのをわたしたちは知っている。布団から透けてくる灯りは、夜遅くまで消えないのだ。

「だからあんまり怒らないでやってよ」

「奈緒は確かにがんばってるわね。たぶん、私たちの誰よりも」

日羽がわたしの言葉を裏付けるようなことを言い、

「私からもお願いします、先生」

夢が静かな声でお願いすると、浅川せんせの態度は軟化した。

「しかたないわねえ。でも、寝不足は体によくないから。ほどほどにしないね」

「ご、ごめんなさい、先生」

奈緒がおずおずと謝り、わたしたちには気弱な微笑みを投げかけてくれる。

そんな和やかな風景も、いつものものと、になりかけてくる。

二週間というのは、それくらいの時間だった。

「さつきはありがとう……沙風ちゃん」

慣れてもやっぱりおいしいお昼ご飯とき、奈緒がそう言ってきた。

「いいよ別に。大したことじゃないし」

「でも、すごく助かったから」

そう言っつてうつすらと笑う。可憐、という言葉が頭の中をよぎっていった。

「ああやって口に出して助けられるって、すごいことだと思うよ……」

わたしは照れた。

「いや、まあ。知った人しかいないからね。四人しかいないし。普通の学校みたいに三十人とかいたら、無理だったかも」

「いいんじゃないかしら。こういうのは結果が大事ななのよ。沙風は奈緒を助けた。それで十分だと思うわ」

夢が追い討ちをかける。ああ顔赤くなってるのかなあ。

「そうそう。沙風は格好いいわ」

日羽め。何ですかそのにやにや笑いは。

「そこ、面白がらない」

「ごめんなさいね」

にやにや笑いが止まらない。こいつめ、反省の色なしだ。でも、突っ込みを入れてちょっと落ち着いたのは確かだ。

「あ、天使さまが出てる」

そう言う夢の視線の先には、食堂備え付けの大画面テレビ。画質もきれいでめちゃくちゃ高そうなやつだ。こんなところまで至れり尽くせりなのだ。ただし番組の選択権は、なかったりする（国営放送《NHK》固定）。

街角の花壇に、水をあげる天使さまたちの姿が映っている。花の名前は分らないけど、天使さまにちなんているのか、ぜんぶ真っ白だった。今映っている天使さまが、すぐそこでご飯を食べていたりする。どうやら今回は録画の様子。……特に目立った反応もないのは、もう慣れてるせいだろうか。

しばしお喋りをやめて、みんなでテレビに見入った。

「何ていうかさ……」

最近天使さまを見ると、思うことがある。

「実際これから天使さまになるんですよって言われると、見る目が



変わるっていうか」

遠い存在、自分とはぜんぜん関係ないと思ってた天使さま。けど今、わたしたちは天使さま予備軍になった、というか、なってしまったというか。前に比べると、注目度が全然変わったのだ。例えば、実際天使さまってどんなことしてるの？って気にするようになったとか。

「そうね。見てるだけじゃなくて、これから天使として活動する立場になると、やっぱり心構えというか、見方も変わってくるわよね」「私は自分に置き換えて想像してしまうわ。今だったら、お水上手にあげられるかなあとか」

「あー、それはあるね」流石に水くらい、ふつうにあげられるだろうけど……。

奈緒はどう、と聞こうとしたら、彼女は相変わらず、じいっとテレビを凝視していた。

この子はほんとうに、天使さまが好きなんだなあ……。

「奈緒？」

ちいさく名前を呼ぶと、大げさにびくっとしてこっちを振り向いた。

「えっ、あつ？」掬いつ放しのまま放置されてたシチューがぼりとこぼれ落ちた。

奈緒、真っ赤。わたしたち、苦笑い。

「奈緒って本当、天使さま好きだよね」

「う、うん……ごめんなさい」

いやいや、謝らなくても。

「何かわけとかあるの？ 夢みたいに、前に天使さまと話したことあるとか」

「うっん、お話ししたことはないんだ」

「あ、そうなんだ」

そこで言葉が途切れた。俯いて、上目遣いでわたしたち三人をちらちら見ている。

言つのが恥ずかしいのかな。でもちよつと面白いのでそのまま見ていようとか思つてしまふ、意地悪なわたし。

日羽も当然のように放置で、僕だけがその場の雰囲気はどうしたものかと迷っているようだった。

「あ、あの奈緒」「て、天使さまつてかつこいいからっ」

結局二人でほぼ同時発言。

奈緒は勢いつけて喋ったせいで、止まらなかった模様。「あ……」と言ったきり俯いてしまった。

「かつこいいって、なんだか珍しい意見だね」

「そ、そうかな」

「ふつうは、きれいとかかわいいとか、そんな感じよね」

日羽の言葉にみんなで頷く。

「あ、男の天使さまの話？」

男の子あるいは男の人の天使さまも、いるにはいるのだ。少数だけれど。

「うっん、天使さま全部」

「へえ……」

「かつこいいか……」

「どういうところが？」

「うっんと……」

上目線で考え中、のポーズ。うまく言えない風だ。

「天使さまつて、病気……だよな」

「うん」

「それなのに、立派で……わたしとぜんぜん、違つてて……」

ええと、それはつまり……。

「働くおとうさんみたいなイメージ？」

我ながらどうかと思つたとえだ。それを聞いた僕がショックを受けたような顔をして、それを見たわたし自身もショックを受けた。

「え、えっ？……うん……え？」

奈緒までショックを受けてる。なにこのショックスパイラル。…

…わたしのせいだけど。

「病気というハンデを背負ってるのに、立派に社会の役に立ってるから格好いいということかしら？」

「あ、うん……そんなかんじ」

密かにへこむわたしを尻目に、日羽が奈緒の信頼を勝ち得ている。なんか悔しい。

「わたしはぜんぜん、だめだから……」

そう言って自嘲する奈緒。夜更かしして頑張ってる姿を知るわたしたちとしては、そうとも思えないんだけどな。

「奈緒はいちばん頑張ってるじゃない？ だからだめってことはないと思うけどな」

「でも……」

「私もそう思うわ。奈緒ちゃんはいじゅうぶん立派よ」

「努力は、報われるものよ」

みんなそれぞれの励ましを受けて、奈緒の顔がうれしそうにほころんだ。

「あ、ありがと……」

えへへと照れ笑い。素直でいい子だ。

「ところで、今日はみんなどうするの？」

午後は自由時間。ちなみに点滴は午前中に落ち切るので、自由時間には体も自由だ。

「私は今日も、本を」

「わたしも読みかけのがあるから、続きを読もうかなって」

日羽と儂はいつも通りの様子。どうも敷地内の図書館には相当な数の本があるらしく、初日に見に行ってきた後の二人の興奮ぶりはちよつとすごかった（と言っても日羽はやっぱクールだったけど）。

「奈緒は？」

「わたしは、絵を描こうかなって」

そう、奈緒には絵心があったのだ。希望すればだいたい何でも叶えてもらえる天使病院、奈緒は自由時間のお供に画材一式を所望したのだった。まだ下書き段階のようだけど、どうも儚を描いてるみたい。

「結局みんな、いつも通りかあ」

「沙凪はどうするの？」

「うーん……」

外は晴れてて、いい天気だ。

「散歩しようかな」

「私も、本が読み終わったら一緒に行くわ」

それはうれしいかも。

「うん、一人でうろろするよりそのほうがいいな。広いし、見たことないきれいな花とか咲いてて結構面白いよ」

「私もたまには外に出ようかしら……」

日羽が外を見ながらそう呟いた。このひとは常に家の中に籠ってそつなイメージがある。実際、ここに来てからはずっと病室で本を読んでいる。

「植物図鑑でも持って行ったら？」

「冗談交じりでそう言っと、」

「それはいい考えね」

と普通に返されてしまった。

「奈緒も、そのうち外で写生とかどう？」

「う、うん。行きたいな」

誘ってあげると、とても嬉しそうな顔をするんだ、この子は。いざ外でお絵かきとなったら、わたしも一緒にやってみてもいいかも絵心ないけど。むしろ壊滅的だけど。

「じゃ、今日もいつも通り、ということで」

## 2章、3

さて、今日はどっちに行こうかな。

今日は天気もいいし、屋根のないところに行ってみようか。そう  
思っ、わたしは舗装された渡り廊下から、その外へと、歩き出し  
た。

病院の敷地内は、外では有り得ないくらいの緑溢れる庭園になっ  
ている。ちいさい頃に遠足で行った森林公園にさえ、こんなにすて  
きな自然はなかった。

草の生えた地面を踏みしめる。足裏に、感じたことがないほどの  
弾力が返ってくる。生命力溢れるというか……。

本当に、きれいなところだ。

風も何だか、いい匂いがする。草花の香りなんだろうか。体全体  
をやさしく包んでくれるような、いい気分になれる匂いだった。ち  
よっとだけ冷たいけど。

ここはまるで楽園みたいだ。ご飯はおいしいし、授業はあるには  
あるけど余裕があるし、望めばだいたい何でも貰えるし。毎日のよ  
うに点滴してお薬を飲まなければならぬのは嫌だけど、それでも  
十分過ぎるくらいお釣りの来る生活だった。

外よりも、いいところ。

でも。

わたしたち本当に病気なのかな、とは、もう思えなくなっしま  
った。

体は今のところ、あんまり問題ない。ときどき少しだるいかなと  
思うことはある。でも痛かったりとか、そういうことはない。わた  
しだけじゃなくてみんながそうだ。みんな、それなりに元気だ。そ  
れなりに。

だけど、わたしたちは確かに天使病なのだ。

その証明は、鏡を見れば目に入る。

少しずつ、髪の毛の色が抜けて来ているのだ。

まだ、どちらかといえば、黒い。白髪みたいに一本ずつ白くなるんじゃないくて、頭全体から少しずつ色が抜けていくかんじ。だからわたしたちの髪は、今はもう、黒というよりは灰色だった。わたしたちの中では、特に儚の髪の毛が白くなっている。ときどきだるそうにしていることもあって、ちよつと心配だ。

点滴して薬飲んでても、やっぱり病状は進んでしまっただなあ……、と分かってしまつてちよつとブルー。だけど、病院がいいところだから、何となく救われているような気になれる。ああ、こんなにいい環境なのは、このためにあつただな、と理解してしまつた。うまい話にはやっぱり裏がある。

……ひとりになると、そういうちよつと沈んだ考えが浮かんできってしまう。だから誰かと一緒に散歩に行きたいなあと思うのだ。今度ちよつと、無理にでも誘おうかな。わたしのことは別としても、病院の庭がきれいなのは間違いないだし。これ、体験しなきゃちよつと損だ。

外とは大違いの、色とりどりの花畑。天然色の自然絨毯。

そういえば、なんで外にはきれいな花が生えないんだろ。

ちよつと考えて、思い当たつた。

黒雨のせいかな。

黒雨も、黒塵のせいらしい。塵が雨に混じつて降ってくるんだそう。これが病気を引き起こすんだそうで、随分多くの被害者が出たらしい（そういえば美加子もそんなことを言っていた）。

今は塵が薄くなったから、それほど深刻ではなくなったみたいだけ。

で、人間が病気になるなら、植物も病気になったっておかしくはないんじゃないかなあと、そう思うわけなのだ。

もちろん、ここにだって黒雨は降る。けどたぶん、誰かが頑張つて手入れなりしているんだと思う。広いので相当な労力がかかつてそうだけ。

たぶん、わたしたちのために。

そんなことを思いつつ、ぽてぽてと歩いていると、ふいに目の前に高い壁が立ちふさがった。周囲は木々に囲まれて薄暗くなっている。いつのまにかずいぶんへんぴなところ、つまり、敷地の端まで来てしまったみたいだ。

壁は、殺風景だった。コンクリで出来た、見上げるくらい高い、垂直の壁。真下から見上げると空しか見えない。てっぺんには、侵入者防止用なんかでよく見かける有刺鉄線つきの返しがついていた。（ていうか……）なぜあれば、こちら側に反ってますか？ 普通逆じゃ。

なんだこれと思いつつも、わたしはすぐその場を後にした。ここはいまいち、好きになれない。壁の近くはあんまり手入れがされてなくて、荒れた感じが寂しいのだ。暗いし。

「あれ？ 沙風くんだ」

「あ」

壁の側、木々の暗がりから庭園のような病院敷地内に戻ると、ぱったりと歌撫さまその他の天使さまたちに出くわした。

「……そんなところで、何してるの？」

へんな目で見られてしまった。

「い、いや。ちょっとぼーっと歩いてたら突っ込んでっちゃったみたいで」

「うっかりさんだね、きみは」

「は、はあ」

ちょっと恥ずかしい。

「歌撫さまは、今日も散歩ですか？」

このひとはよく散歩しているみたいで、病院内で知らないことはないと言われている……らしい。伊達に五年目、最年長天使さまをやってるわけじゃないみたい。

「うん。今日天気いいし、みんなで外歩こうってなってね。きみも来るかい？」

お誘いは嬉しかったけど、歌撫さま以外はろくに話したこともない先輩天使さまたちだったので、ちょっと気後れした。

「ああ、一人で歩きたいなら無理しなくていいよ。気、遣うと思うしね」

心が読めるのかこのひとは。

「そういえば、あっちのほう、行ったことある？」

そうやって歌撫さまが指す方向には、ちょっとした森みたいになった場所があった。

「いえ、まだです、たしか」

歌撫さまがにやりと笑った。いたずら少年みたいな感じ。

「じゃ、森の中。ちょっと見てみるといいかもね」

「何かあるんですか？」

「それはきみ、行ってみてのお楽しみだよ」

「はあ」

どうせ目的地なんかないし、行ってみるのはぜんぜん、やぶさかじゃなかった。

「じゃあ、またね」

行ってしまった。

「さて」

じゃあ、行ってみようかな。

歌撫さまが指した森へ行く途中に、部室棟と呼ばれる建物の近くを通った。中からはクラシックなアンサンブルの演奏する音だとか、人の声、多分演劇、なんかが聞こえてくる。いわゆる部活というやつが行われている棟なのだ。その方面の才ある天使さまたちが集まって、こうして練習しては天使楽団とか天使劇団といってチャリティ公演を行っている。ちなみにわたしたち四人は、今のところ、誰も参加していない。

そんなどこか遠くて懐かしい音をBGMに、森の中に突入。落ち葉の積もった柔らかな地面を、しゃくしゃく踏みしめて歩いていく。木は結構生えてるけど適度に間隔が空いていて、そんなに歩きづら



くはなかった。

やがて、向こう側に、ちょっとした空き地が見えてくる。

森を抜けて、その先にあるものを見たわたしは、思わず足を止めた。

\*

おあつらえ向きなことに、次の日は快晴だった。

「ね、みんな、外に散歩しに行かない？」

わたしはそう言ってみんなを誘った。他でもない、昨日歌撫さまに言われ、わたしが森の中で見つけたあるものを、みんなにも見せたかったからだ。

「そうね」日羽は外に目を向けると、ぱたりと本を閉じた。「珍しい天気だし、こんな日くらいは外に出ようかしら」

「確かに、今日外を歩かないと損かもしれないわね」儂も同意。

「あ、じゃあ、わたしも」奈緒も一緒に行くと言ってくれて、これで全員が揃った。

わたしはなんだか、ほっとした。

そしてみんなと一緒に、昨日と同じ場所に立ったわたしの目の前には、大きな石造りの建物がそびえている。

一年の内でもいちばん日が長くなる季節、その昼間にだけ、たまあに今日みたいな澄んだ青い空が見える。雲ひとつない青一色を背景に、周りを緑の木々に囲まれて、その建物は強烈な存在感でもってわたしたちの前に佇んでいた。

見上げるほどに大きな四角い柱、その中央から少しだけ上寄りから、左右両側に向けて四角い梁が出っ張っている。

それは巨大な、十字架だった。

つまりそれは、天使さまたちの、墓地だつた。セメタリ

長い間風雨に曝されたせいか、ところどころが黒ずんで汚れている。直視できない陽光が、その威容をはつきりと照らしている。

わたしたちの誰もが、口を開かなかつた。

たぶん、わたしたちの誰もが、厳粛な気持ちで、それを見上げていた。

「ね、これ見て」

わたしは十字架の根元に歩み寄ると、そこにある石板、すなわち墓碑銘を指し示してそう言った。

みんながそれを見る。

そこにはこう書いてあつた。

+

黒き濁世にて、浄潔の御手、無垢なる翼以て

誇り高く、儚き命を全うした

白き癒し手達 此処に眠る。

汝等の御霊は黄昏から解き放たれ

永久の光の中に還るだろう

+

そして少し離れたところに、違った字体で、

救い在此かし

と書いてあつた。

「救い、あれかし……ね」

日羽がちいさく呟く。そのとき声を出したのは日羽だけだった。だけどたぶん、心の中には、みんなそれぞれに思うところがあつた

んだと思う。

わたしの視線は、日羽とは違うところに向いていた。

儚き命。

わたしはまた、巨大な十字架、天使さまたちの墓標を見上げた。

これは、わたしたちの未来の姿なのだ。しかも、そう遠くない未来の。

いま目の前に、厳然として在る、死。まわりの皆はわたしが天使さまになったと知って、元気に騒いでいた。ここに来て初めて見た天使さまたちは、みんな明るかった。病院は樂園みたいに、いいところだった。だからわたしは、忘れていられた。

天使病が、不治の死病だということを。

わたしはこれから、そう遠くないうちに、この大きなお墓の下に入る運命なのだ。わたしはその事実の存在感、あまりの大きさに圧倒されて、何だかとても、怖くなってしまった。

みんなは、どうなんだろう。

怖く、ないんだろうか？

儚と奈緒は、強い目つきで、巨大な墓標、死、を見据えている。

まるで強大な敵に挑む戦士か勇者か、そんな雰囲気滲んでいた。

そう死とは敵なのだ。彼女たちはその手ごわい敵に対し、天使さまとして精一杯がんばる、そんな決意を武器として立ち向かおうとしている。この強い視線は、まさにその意志の表れなのだ。

ではわたしはどうだろう、わたしの武器は何？

分からない。わたしは天使さまになろうと授業を受けているけど、それはわたし自身が決めたというよりみんなに流されたからだ。わたしの意思は、この強大な敵に対抗するための武器とするには、あまりにも、頼りなかった。

日羽はどうだろうと視線をやれば、この人はそもそも死が敵だとか、そういうのとは別のことを考えているようだった。何やら疑わしげな様子で眉を顰め、墓碑銘を凝視している。その様子は、わたしや儚、奈緒とは異質な感じで、正直言って何を考えているのか分

からない。

やがて、唐突に、日羽は踵を返した。

「……私は、部屋に戻るわ」

そう言つてさっさと立ち去つてしまふ。

わたしたちは顔を見合わせた。

「……ちよつとナーバスになっているのかしら」

と、儂が言つた。

確かにそうかもしれない。げんにわたしはナーバスになっている。でも、ほんとうにそれだけなのかな、と思う。妙な胸騒ぎがする。

そのときはそれをきっかけとして、みんな部屋に戻つた。

その日から、少しだけ、日羽の元気がなくなつた。

## 2章、4

二週間が過ぎた。わたしたちが入院してから、だいたい一ヶ月が経過したことになる。

「うーん……」

この日、わたしたちは鏡の前に陣取って、自分たちの姿をじっくりと眺めていた。

前髪をちよつとつまんで、よりわけ、一本一本丁寧にチェックしていく。儚と奈緒と、三人で並んで髪の毛を凝視。ちよつとおかしな光景かもしれない。日羽だけは興味がないのか、ベッドに腰掛けて黙々と読書している。

枝毛が気になるとかキューティクルのチェックだとか、そういうんじゃない。

「やっぱり、もう……」

「そうね……」

じっくり見続け、早や十五分。いい加減認めねばなるまい。

「もうすっかり、真っ白だ」

天使病第一段階、白化。

全身から色素が抜けて、髪は白く、肌も白く、血管とかが透けて見えるようになる症状。入院約一ヶ月目のこの日、わたしたちは、ついにその状態に達してしまったようだ。

「天使さまに向けて、大きな一歩を踏み出しちゃったってかんじ……」

「あとは羽根が生えれば、もうすっかり天使さまよね」

「み、見た目はね」中身に関してはまだまだ不安でいっぱいだ。

「早く天使さまになりたいわ。ね、奈緒」

「うん……」

病状の進行とほとんどイコールな、天使さま就任。その他諸々思うところを含めて、わたしとしては複雑な気分。

ちなみに、病状の進行はやっぱり夢が一番速い。最近はこのまめに髪の色をチェックしていたけど、わたしたちがまだ少し灰色だった頃には、すでに夢は真っ白になっていた。

そのことが、少し、気になっている。

浅川せんせは白くなつたわたしたちを見ると、いつもの生き生きとした表情から一転、寂しげに微笑んで、

「もうすっかり白くなっちゃったわね……」

と呟いた。

でも、白くならなかったら、というか病気が治れば、天使さまにはならないわけで。そうなるとせんせのしていることって無駄になるんじゃないだろうか。

そう言ってみると、

「もちろん、治ったほうがいいに決まってるじゃない」  
だそうだ。

「私のやつてることなんて、無駄になるのが一番なのよ。病気なんか治るに越したことはないわ」

自分のやつていることが無駄になるのが一番いいなんて、すごいことを言うひとだ。

「じゃあなんでせんせはこの仕事してるんですか？」

すると浅川せんせは実にさばさばした表情で、

「だって、現実問題として、病気に罹ってしまった子たちがいるわけじゃない。そういう子たちのためになりたいと思ってこの仕事をしているのよ、私は」

なるほど、無駄になるのが一番だけど、でも実際そうはならないからこの仕事をしている、というわけですか。

しかしやっぱりちゃんと考えているのだなあ。オトナって実はす

「ごいんだらうか。」

「年食つたら大人かつて言うのと、それは違うわね。……」

その後にも何か続きそうな気がしたので黙っていたんだけど、話はそれで終わりのようだった。ちよつと不自然だったなあ、と思つたけれどその理由は何となく分かる。

わたしたちは、大人になれないので。

「まあ、みんなが立派な天使さまになれるよう、私も頑張るからみんなも頑張れ」

せんせは笑顔でそう言った。決意の笑顔だ。どうやってたらこんな顔ができるんだらう。ちよつとまぶしい。

\*

白化が完全に進行したことを受けて、わたしたちの治療状況にすこし、変化が生じた。

薬の種類と数が増え、点滴の色が変わって、回数が一日一回から二日に一度に減った。そして手首のバンドが、淡い桃色から、ちよつときつい赤色に変わった。

天使に一步近付いちゃったねえ、とは歌撫さまの談。いつも気楽な顔をしているひとの真顔は、ちよつとこわい。

\*

それから数日後のこと、散歩から戻ると、部屋には日羽が一人だった。

「あれ、日羽一人？」

ええ、と頷く日羽。

「奈緒と僕は、二人でお墓参りに行ってるわ」

「へえ、そうなんだ」

「あの二人、あれから結構連れ立って墓地<sup>セメタリ</sup>へ行ってるわよ」

あれ、というのは初めて墓地に行ったときのことだ。

「そっか」

わたしはあのおとき以来アンニュイな気分が抜けなかったの、一人でいることが多くなっていた。だから、二人がそんなことをしているとは知らなかった。

「あの二人は、天使さまにずいぶん思い入れがあるみたいだしね…

…」

何となく寂しいものを感じつつ、わたしは呟く。

「……そうね」

日羽もどことなく、元氣のない様子で返事する。相変わらずだ。みんなでいるときもぼうつとしていたり、何か考えごとをしているようだった。わたしと同じく、みんなで墓地に行つて以来。あのおときの日羽のおかしな様子が、ずっと気になっている。

「つて、どうしたの、その包帯」

病衣の袖から覗く日羽の左腕、その手首辺りに包帯が巻かれていた。

「ああ、ちょっと切っちゃって」

日羽は特に隠すでもなく、問題ないことを示すように左手を左右に振った。

「大丈夫なの？」

「ええ、大丈夫よ。ここは病院だし」

微笑んで言うけど、いかにも頼りない様子。まさか自分で切ったとかじゃないよね、とかそんな心配までしてしまいそうなほど、日羽の佇まいは力無い。顔色も悪く、白いを通り越して蒼かった。

やっぱり、心配だ。

今は部屋に二人だけだし、話を聞くにはちょうどいいかもしれない。

「ね、日羽」

「なに？」

「最近元氣ないよね」



日羽、わずかに苦笑い。

「……やっぱり分かつちゃう、わよね」  
「まあね」

少しの間、沈黙。やっぱり、ちよつと緊張するなあ。でも、聞かないといけない。

「なんか、悩みでもある？」

他人の領域に踏み込むのは、勇気が要る。できるだけ軽い調子に聞こえるように、でも軽くなりすぎないように、気を遣いすぎかなあと思つてもそうせずにはいられない。

日羽はかなり長いあいだ、黙っていた。長いと感じただけだったかもしれないけど。

「……天使さまって」

果たして日羽の口からは、意外な言葉が飛び出してきた。日羽は天使さま関連の話題になると口数が減っていたので、てつきり興味ないものとはかり思っていたんだけど。

いったいどう続くのか、と思っていたわたしは、次の言葉を聞いて更に驚く羽目になった。

「みんな、驚くほど美形よね」

「はあ？」

すつとんきょうな声、を上げてしまつてから失礼だと思つて謝る。「ご、ごめん」でも日羽は気にしたふうもなく、というか聞こえてもいなかったようで、何事もなく次の言葉を口にした。

「なんでかしらね」

「なんで、って。」

「偶然？」

しかないんじゃないかな。でもそれにしてみんな美人すぎか。「天使病は美人にしか発病しない？」

自分で言つておいて何だけど、苦しい。そんな病気あるのか？

「確かに」意外にも日羽は同意した。「発病者が揃つて美形という病気は、他にもあるらしいわね」

美人病かあ。ロマンチックな病気だ。いや、実際罹ってるひとからするとロマンどころじゃないだろうけども。

「わたしたちって、みんな、ホームシックとは無縁だったわよね」

「え？」ずいぶん話が飛んだ。日羽らしくない。いつもは理路整然と話すのに。

「まあ、……そうだったね」

わたしは入院初日の夜を思い出した。その後も、わたしたちの会話に家庭の話題が上ったことは一度もない。

「偶然かしら、ね」

「そりゃあ……そうじゃない？」

何かの原因で親がいない子どもは結構、いる。ここに来てから知ったことだけど、黒雨もその理由のひとつなのは間違い無さそうだな。なみにわたしが親を亡くしたのは、食糧配給問題に関わるテロに巻き込まれたからだ、と聞いている。物心つく前の話だから、実感がないけど。

黙る日羽。何が言いたいのか、全く分からなかった。

「ええと、最近考えてたのってそのこと？」

「じゃあ、」

む、むう、何なのだ。

「わたしたちの白化が、ほとんど同じ時期に始まったのは、なんですかしら」

「それも……たまたま？」

言われてみると、随分「たまたま」が多いような気がした。

何となく、日羽が何を言いたいのか分かった、ような。

「天使病が偶然じゃない、って言いたい？」

いや、でもねえ……。

「変だと思わない？」

「確かに言われてみれば、そんな気はするけど。でも、偶然じゃないとしたら、どうということだと思うの？」

また黙る日羽。

わたしは、そんな日羽を見て、自分の言葉とは裏腹に、気味の悪いものを感じ始めた。

日羽はたぶん、とかきつと、とか、そういう曖昧な言葉をほとんど使わないのだ。憶測でものを語らない、というやつ。いつだって彼女の言葉には、裏付けがあった。

今までは。

ならば、この話にも、日羽なりの根拠があるんじゃないか。わたしに否定されたくらいでは揺るがない何かを、彼女は掴んでいるんじゃないか。

そんなことを考えていたせいか、次の日羽の言葉は、わたしの中で殊更に強い印象を持つことになった。

「私たちの血、黒いと思わない？」

「まあ、……ね」

わたしたちは数日置きに採血を受けるので、自分の血は見慣れている。いや、奈緒はいつも血を採られるとき目を逸らしているから、全員がそうだというわけじゃないけれど。でもわたしは、見慣れている。

入院前、最後に自分の血を見たのはいつだったか。記憶にあるその色に比べれば、今の血の色は確かに黒ずんでいるような気はした。でもそれは、天使病だから。

「天使の体には、黒い血が流れている……か」

そう言って日羽は、薄く笑った。

「なんだかひどく、シニカルよね」

目が、笑っていないかった。おそろしい笑みだった。

病室の入口から、影が伸びた。

「奈緒」

奈緒が立っていた。わたしは何だか安心して、彼女の名を呼んだ。「僕と一緒にじゃなかったの？」

「う、うん。ちょっと外でスケッチしようかな、と思って」

奈緒は入口に立ったままで言った。

「絵を描く道具を、取りに」

「外で絵かぁ。いいなぁ」

「今日も天気、いいものね」

日羽が言う。もうすでに、おそろしい笑みはきれいさっぱり消えてなくなり、やわらかい雰囲気の声に変わっていた。

「う、うん」

ようやく奈緒が部屋に入ってくる。そそくさと画材をまとめ、

「そ、それじゃ、また後でね」

と、真っ白な髪を揺らして出て行った。

しばらくの間、わたしは言った。

「……聞こえてた、んだろぅなぁ」

「そうね」

「もしかして気付いてた？」

「いいえ」

日羽はゆっくりと首を振った。奈緒にはあまり聞かせたくない話だった。

## 2章、5

わたしの趣味は、相変わらず散歩だ。……というところとじじむさい感じがするけど。

年少病棟の側を歩いていると、中学生と思しき真っ白な子たちが何人か、授業を受けている風景が見えた。十人くらいの少人数がノートを取ったり船をこいだりしている。黒板に描かれている、複雑な形の図形。すこし前に習ったような覚えがある、どうやら数学の授業中らしい。

授業を受ける子たちの肩からは、すでに天使の羽根が生えている。普通に生活してれば高校生だったはずの天使病患者さんは、天使さまになると、終日自由時間ということになる。だけどこの子たちのように中学生以下だった場合は、義務教育が終わるまでは授業が続けられるのだ。

ちよつとかawaiiそう。

そう思いながらわたしは、その部屋の横を通り過ぎる。

病院の敷地内には、ところで、たくさん建物がある。わたしたちが生活している病棟を初め、治療や検査を行うための医療棟、医者や看護師さんたちが住む職員寮、あとはわたしたちの生活を補助する部室棟とか図書館棟、さらには天使ヘリの管制棟、なんていうのもある。

いまわたしが中を覗いていた年少病棟というもの、これは読んで字の如く、まだ幼い。具体的には中学生以下の子たちのための、天使病棟だ。上は中学三年生から、下は幼稚園に上がるか上がらないかくらいまで……数は多くないけれど、それくらいのちいさな子どもたちの中にも、天使病が発症してしまったケースは存在しているのだ。

その中を覗きつつ歩いていたわたしは、ある部屋の横で足を止めた。中にはぱらぱらと、お布団を敷いて寝転がっている、ちいさい

子たちの姿。幼稚園児くらいの子たちの部屋、今はどうやら「お昼寝の時間」のようだ。

その中に、見知った姿があった。

奈緒がいる。

子どもを寝かしつけているようだった。こちらに背を向けていて、わたしが見ているのには気付いていない様子。

そういえば今までこの中入ったことなかったな、と思い出したわたしは、奈緒がいるところに行ってみることにした。

「あ、沙凧ちゃん」

「や、奈緒」

お昼寝部屋なので、小声で挨拶。

「散歩したら奈緒がいたから、来ちゃった」

「そうなんだ。沙凧ちゃんがここに来るのって珍しいな、って思った」

そう言つてゆるゆると微笑む。

「実は初めて。奈緒はよく来てるの？」

「うん。年少組の子たちと、たまにあそんでるの」

「へえ……」

そこまで話したとき、奈緒が寝かしつけようとしていた女の子と目があつた。きょとんとした目付きでわたしを凝視している。もうすでに羽根まで生えてしまった、四、五歳くらいのちいさな天使さまだ（見た目だけは）。

「はじめまして」

にっこり笑つて挨拶してみる。

「……」

女の子、ぼーっとわたしの顔を見てる。聞こえてないのかな……と、笑顔でありつつ不安になるわたし。

奈緒に助けを求めようと思ひ始めた頃に、ようやく口を開いてく

れた。

「お姉ちゃんも、あそんでくれるの？」

「う、うん」何して遊べばいいのかよくわからないけど。  
すると女の子はとっても嬉しそうな顔で、わらった。

「じゃ、なおとかなと三人であそぼ！」

「だつ、だめだよ架那ちゃん。今はお昼寝の時間だから」

奈緒はちよつと慌てたようにそう言つて、次にわたしを見て、  
「沙凪ちゃんも……。今はお昼寝の時間だから、寝かしつけないとだめなんだ」

「あ、ああ、そうなんだ……。ごめん」

普段と違つて、しっかりしたお姉さんみたいな雰囲気奈緒だ。  
意外な一面。

「なお……。やっぱりぜんぜん、ねむくないよお」

「だめよ架那ちゃん、ちゃんとお昼寝しないと」

えー、とかぶつたれながら、かなちゃんわたしと奈緒の顔を見ている。そ、そんな縋るような目で見られても、困る。

「今おやすみしたら、晩ご飯がもつとおいしくなるよ。だからね、おやすみしよ？」

奈緒は辛抱強く、かなちゃんを寝かしつけようと頑張っている。  
うーん、立派だ。

「な、なに？ 沙凪ちゃん」

その柔和ながらもしつかりとした横顔をじつと見ていると、奈緒は照れたような困ったような顔で、わたしを見た。

「いや、しっかり子どもの相手してるし、すごいなあと思って」

「そ、そんなことないよ、わたしなんか……」

「いやいや、立派だよ。わたしにはちよつと無理だなあ……」

「それは慣れれば……」

「なおお」

かなちゃんが奈緒の袖を引っ張った。ずいぶん懷かれてるような気がする。

「やだー、なおとあそぶう」

今度はお布団の上ではたばたと暴れ出した。お転婆な子だ。

「だっ、だめだよ暴れちゃ。他の子が起きちゃうでしょ」

奈緒が慌ててかなちゃんを制止しようとした。

その拍子に、かなちゃんの病衣がめくれて、その下の素肌が見えた。

一瞬だけ。でも、はっきりと見えてしまった。

凍りつくわたし。奈緒は素早く乱れた病衣を正すと、すこし強い調子でかなちゃんを寝かしつけた。

奈緒の奮闘の甲斐あって、やがてかなちゃんも、安らかにおねむとなった。

「……ね、奈緒」

奈緒も当然のように、わたしが気付いた、ということに気が付いていたようで、どこか沈んだ雰囲気を漂わせつつ頷いた。

「……うん」

「さっきの、かなちゃんの、お腹……」

「……うん」

「あれってさ……」

奈緒はゆるく首を振った。その先は言わないで、というように。わたしだってそんな言葉は口にしたくなかった。だから何も言わなかった。

かなちゃんの下に見えたのは。

真っ白で、きれいなはずの、肌の上に散らばっていたのは。

傷。青痣。火傷みたいな、引き皸れた皮膚。

お腹いっぱい……。

口が、からからだった。動悸がする。

奈緒がぼつりと、衝撃の事実を口にする。

「こっいう子、結構、たくさんいるんだ……」

「……本当に？」

思わずそんな言葉が口をついて出る。奈緒は頷く。顔がすこし、



蒼い。

「なんで？ まさかここで、……？」

「うっん、違うよ」

わたしは一瞬、天使病棟で酷いことが行われているのかと思ったけど、奈緒ははっきりと否定した。

「ここに来る前。家に居た頃のこと」

安心した。ここでそんなことが行われているなんてことになったら、わたしはどうしていいか分からない。

「じゃ、とりあえずは大丈夫、か」

「うん」

それはそれとして、別の疑問が湧いてくる。

「結構いるって、世間ではそんなに……流行ってるの？ その……」  
虐待、という言葉の口にしたくなかったから、どうしても口ごもってしまう。荒んだ世の中だから、これさえも「よくある話」なんだろうか。親がいないのと同じように。でもわたし自身はそんな子を、一人も知らない。

「……分からない、けど」

「けど？」

それは奈緒の、不意打ちの告白。

ほとんど聞き取れない、か細くて消えてしまいそうな弱々しい声で、彼女は言った。

「わたしも、同じだった……よ」

「同じって……」

でも、奈緒の体に傷はない。一緒にお風呂に入っているから、それは確かだ。

「ご飯が、貰えなかったの」

不意に、わたしは思い出した。

病院に来て初めてご飯を食べたとき、奈緒がとつぜん泣き出したことを。

「わたしの体、すごく痩せてるよね。お父さんが、ぜんぜんご飯く

れなかったんだ……」

奈緒は、右手でかなちゃんの頭を、左手で自分のお腹をゆるゆると撫でながら、哀しそうに微笑みつつ、淡々と、喋っている。

「お腹空いたっていうと、怒るから……」

「奈緒」

たまらなくなつて、わたしは奈緒の話を遮った。

「あ、ごめん……沙風ちゃん」

「うっん。いいよ。……でも、わたし」何を言っているかわからない。

「今は、大丈夫だよ。ご飯はお腹一杯食べられるし、みんな優しいし……」

奈緒はちよつと涙ぐんでいた。

「それに、天使さまになれるから。だから大丈夫……」

天使さま。奈緒はずつと懂れていた、と言っていた。天使さまになる、ということに対して一番頑張っているのも奈緒だった。

「……お腹が減ったとき、テレビをつけると、天使さまが映ってるの」

「……うん」

「天使さまは病気なのに、いつぱいの笑顔で、天使さまと話したひとも笑ってた」

「……うん」

「病気でつらいはずなのに……死んじゃうかもしれないのに、どうしてこんなに笑えるのかなって、思ってた」

「……うん」

「天使さまのお姿を見て、お腹減ったくらいでへこたれてちゃ、だめだなんて、そう思ってたの……」

「……うん」

「天使さまになれば、わたしも強くなれるかなって、そう思ったから……」

「……そっか」

奈緒が天使さまに憧れる理由。一生懸命な理由。つらかったんだと思う。完全には理解できないけど、でも想像することくらいはできる。奈緒はきつと、天使さまに自分の姿を重ねて、ようやく今まで生きてきたんだ。

ちいさくてかわいらしい姿の中に詰まっている、酷い過去。

わたしはとつぜん、奈緒の頭を抱きしめたくなった。

実際、その通りにした。

「さ、沙風ちゃん？」

「……奈緒」

腕の中ですよこし動く、あたたかい、奈緒の体。

「な、なに？」

「奈緒はきつと、いい天使さまになれるよ」

「……う、うん」

「だから、大丈夫」

「……沙風ちゃんも」

「えっ？」とつぜん自分に話を振られて、わたしは大いに戸惑った。

「沙風ちゃんも、一緒に……」

「わたしも？」

「沙風ちゃんとか、夢ちゃんとか、日羽ちゃんも一緒じゃないと、

わたし……」

すこし、奈緒の体が震える。腕ごしに伝わってくる。

不安なんだ。

「わたしも……不安だよ」

天使さまになることも。病気のことも。

生きてる限り、不安だらけだ。

「でも、奈緒たちと一緒になら、頑張れると思う」

「……うん」

「一緒なら」

みんなと一緒になら、不安だけど、何とか、やっていける。

「……何してるの？ あなたたち」

「わっ」

びっくりして奈緒から離れた。

声のしたほうを見ると、怪訝そうな目付きでわたしたちを見ている、知らない大人のひとが一人。

恥ずかしいところを見られてしまった。顔が赤くなってるのが分かる。あ、奈緒も真っ赤だ……天使さまに近付いて肌が真っ白になってるので、ものすごく、目立つ。天使さまになるのもいいことばかりじゃない。

ところで、この人は誰？

「せ、先生、ごめんなさい」

奈緒が謝る。せんせか。

「いえ、いいけれど……子どもたちはみんな、寝た？」

「はい」

奈緒がそう答えると、せんせらしき大人のひとは、にっこりと笑った。

「そう、ありがとうね。いつも助かるわ」

どうやら保母さんらしい。奈緒はよく来てるせいかな、すでに顔なじみになってる様子。

「そっちの子は？」

保母さんはわたしを見てる。そういえば、勝手に入ってきたんだっつた。

「あ、名霧沙風っていいいます。ごめんなさい、奈緒がいるの見て、つい」

「ああ、今年来た子ね。あなたも手伝ってくれたの？」

「は、はあ」そういうつもりでもなかったけど、はつきり否定するのも何なので、曖昧な返事になってしまった。

「ありがとうね。あなたたちが来てくれると、子どもたちも喜ぶのよ」

保母さんの笑顔がわたしにも向けられる。

それを見た瞬間、わたしの胸が、ひとつどくと波打った。不思議な気持ち、じわりと広がる。欲求のような、曖昧な何か。

「子どもたちと遊んであげるくらいなら、いつ来てもいいから。またお願いするわ」

保母さんは子どもたちがみんなすやすやと寝ているのを確認すると、どこかに行ってしまった。

「天使さまも、ここに来てるの？」

わたしは奈緒にそう聞いた。さっき保母さんが「あなたたち」と言っていた意味は、そういうことなんだろうと思ったから。

「うん、ときどき来てるよ」

「そっか」

子どもたちの相手をする。そして、保母さんに感謝されたりすること。

「ね、奈緒」

「なに？」

「天使さまのお仕事ってさ、こんな感じなのかな？」

「うん……よく分からないけど、多分そうなんじゃないかな……」

天使さまは、お仕事で、児童養護施設に行ったりもするらしい。さっきみたいに子どもを寝かしつけたり、一緒になって遊んだり。

「そっか……」

不思議な気持ち。保母さんの笑顔、子どもたちが喜ぶという言葉。今日わたしは、ただ奈緒がいたからと理由でここに来て、結局何もできなかった。だから保母さんの笑顔、感謝の気持ちは、わたしには受け取れない。

だから……と、少しだけ、思う。

その気持ちを受け取れたら、満たされた気持ちに……わたしも、嬉しくなれるのかもしれないな、と。

こういう気持ちのやり取りが、天使さまであるということなのかも、しれない。

またここに来てみようかな、と思った。今度はちゃんと話を聞い

て。  
お手伝いとして。

## 2章、6

完全に白くなってからこっち、どうも体がだるい。といっても、のたうち回るほどでもないけど。夜になると特に痛むので、ちょっと寝苦しいのが一番の悩みごとだ。

わたしだけじゃない。みんな同じ。

これに伴う変化としては、授業が一時的にお休みになったことがある。確かにだるくって授業どころじゃないから、素直に嬉しい。

「大丈夫かね、きみたち」

ふつうの病人（おかしい言い方だ）みたいにベッドの住人と化したわたしたちの元に、歌撫さまがお見舞いに来てくれた。

「それなりです……」

「それなりか。まあ、誰もが経験する道のりだよ。そのうち楽になるから、今はひたすら我慢だね」

誰もが通る道、そうこの痛みはすなわち、生翼の前兆なのだった。

天使病第二段階、生翼。

肩の辺りから小さな羽根、正式名称で言うところの「翼状畸形」が生えてくる症状。

これが完了するまでしばらくの間、今わたしたちが感じてるような、鈍い痛みが続くんだそう。今からちよつと不安。

「もうすぐきみたちも、ぼくらの仲間入りだね」

どこから取り出したのか、ポツキーをもふもふしながら歌撫さまはそう呟いた。

「羽根が生えたら、もう身体的には天使さまと同じですね」

儂の言葉で、その事実を意識する。どんどん近付いてくる、天使さまのとき。容赦なく迫ってくる、その刻限。

「そうだね。きみたちとお仕事する日も近い」

なんだか、余り面白くなさそうな声。

「歓迎するよ。本当は歓迎したくないんだけど」

歌撫さまは、齒に衣着せない。その真つ白な齒はまさしく全裸、素っ裸だ。ちなみに今は、「お仕事一緒にやるのは大歓迎だけど、天使病が進行するのは冗談じゃない」という意味だ、多分。このお方の言葉を完全に理解するには、すこし慣れが要る。

無垢なる御歯をお持ちの歌撫さまは、奈緒のベッドに腰かけると、やおら奈緒の頭を抱え込むように撫で回し始めた。奈緒はくすぐったそうでどこか困ったような、あるいは照れたような複雑な表情でされるがまま。

「ぐるぐるうにうにー」歌撫さまはときどき得体の知れないことを言う。

一通りいじり回された後、奈緒はぼつりと言った。

「……ひやく《早く》く天使さまになりたいです」台詞かんだのは回されすぎた後遺症に違いない。

「だとすれば」歌撫さまは異様に満足げだ。「もう少しの辛抱、だね。羽根が生えたなら、残りは最後の締め……誓約の儀式をするだけだよ」

「誓約の儀式？」

何だか宗教ちつくな響きだ。

「そう、誓約の儀式」

歌撫さまは何だか楽しげに口元を緩めて、そう繰り返した。

「あれはなかなか、いいイベントだと思うよ。楽しみにしてるというさ」

わたしと夢と奈緒は、三人して顔を見合わせた。何だろ。ちなみに日羽は、本から顔を上げていなかった。

「でも、不思議ね」

ちいさくあくびしながら夢が言った。

「何が？」

「うん、もうちょっと早く外に出してもらえても、いいと思うんだけれど……なんだか姿が天使さまになるのを待ってるみたいで」

「ふむう……」言われてみれば、そうかも。授業とかスケジュール



すかすかだしね。

これに対して歌撫さま曰く、

「生翼が終わるまではあんまり体調が安定しないからね。病院側としてもやっぱり、そんな状態の患者を外に出すわけにはいかないでしょうよ」

「なるほど」

「……というのもあるけど、僕くんの意見も実は結構、的を射てる」  
「え？」

「天使の姿になるのを待ってるって話ね。ほら、ぼくたちの人気って、見た目に支えられてるところ、かなりあると思うし」

「ここまでではつきりと、自分の容姿を誇るとは。本当に遠慮のない人だ。」

「そもそも病人のぼくたちが外に出られるようになってこの制度自体、なんか変だもんね。そこは浅川先生とかが頑張ったみたいだけど」

「へえ、そうなんですか」

浅川せんせつて色々やってるなあ、本当。

「十年くらい前、当時寮母として着任直後だった浅川先生と、何人かの患者が協力して病院側を説得、この制度を作り上げたって話。まあぼくは直接その現場を見たわけじゃないから詳しくは知らないんだけど、説得材料の中には天使の見た目も入ってたって噂。……まあその真偽はともかく、現状、この見た目が天使の存在を支えているのは間違いないね」

なるほどなあ。

「ドラマですねえ……」

何だか遠い世界の話みたいだ。

「そりゃ、ドラマチックですよ」

歌撫さまは大げさに頷いた。

「誓約の儀式もそのときからだね。あれはすごい、ドラマチックでロマンチックですよ。ぼくたちは偉大な先輩を称えなければなら

ないね」

ドラマでロマンですか……。何だかよく分からないけどすごいそう  
だ。

「まあ、楽しみにしていたまえよ」

と、歌撫さまは悪戯っ子の笑顔で言った。

\*

それから一ヶ月近くの間、段々と強まる倦怠感と、肩の疼痛にわたしたちはひたすら耐えた。

一日の間でも痛みがピークに達する夜中、背中が痛くて眠れず、うめきながら朝を迎えたこともあった。

あるとき夢が言い出して、わたしたち四人のベッドをくつつけた。背中が痛いときは手を取り合って、耐えようと。

繋がる手と手、痛みがそこを伝って、どこかに溶けて消えていくような気がした。

あたたかくて柔らかい手を通して、安らぎに満たされるような気がした。

そうやってわたしたちは、四人でつらい時期を乗り越えた。

\*

「天使さまに、なっちゃったね。わたしたち」

白い髪。白い肌。そして肩からちいさな羽根が生えて。

専用の服 「天使<sup>エンジェル</sup>服」 という、背中に羽根を通すための穴

が開いた天使さま用の制服、というか病衣を着て。手首のバンドが、白に変わって。

わたしたち四人は、もうすっかり、天使さまの出で立ちになった。さて、わたしたちの中では奈緒がいちばん、天使さまになることを待ち望んでいたわけなので。

「うふふ」

今いちばん様子がおかしいのも、当然、奈緒なのだった。

「もう、一時間くらい経たない……？」

「え、ええ……」

「よっぽど嬉しいのね……」

鏡の前でくるくる回り続ける奈緒を遠巻きに眺め、儂は心配そうに、日羽は呆れた様子で、言葉を交わす。奈緒は自分の姿を確認するのに忙しい。頬は緩みっぱなしで、えへへとかうふふとか奇声を発しつつ自分の顔をぺたぺた触ったり、髪を撫でたり、羽根を引っ張ったり。最初は微笑ましかったけど、さすがに一時間も経つとそろそろ止めるべきかという気になってくる。

わたしはふと、自分の肩から生えてきた新しい自分、「天使の羽根」に触れてみる。

感覚は、薄い。耳たぶみたいにわずかな感触があるだけだ。それはやわらかくて、ふさふさした白い羽毛に包まれていて、まるで本物の羽根みたい。

羽根にもそれなりに個性があるようで、例えばわたしの羽根よりも日羽のほうがすこし大きいし、儂のはさらさらした感じだけどわたしのはちよつとぼさばさだ。髪質ならぬ羽根質とでもいうんだろうか。

わざわざお手入れすべきかどうかは、悩みどころだけど。

「あ、ちよつと動く」頑張ると羽根が動かせた。

「あら、本当」

儂もぴこぴこ羽根を動かしてみてる。あ、わたしより大きく動いてる。

「儂、かわいい」

一生懸命はばたく小鳥みたい。

そうやってひとしきり遊んだ後。

「いよいよ天使さまとして外に出る時間が、近付いてきたわね」  
「うん」

夢の言葉に、奈緒が嬉しそうな声で振り向いた。いつもはもっと控えめなのに。今日は本当にご機嫌だ。

「ようやく、ね……」

夢は感慨深げな様子で呟く。

わたしはわたしで、天使さまをやるということに対して少しずつポジティブな気持ちになれていたので、前ほど二人のやりとりに距離を感じることはない。

でもわたしは二人と違って、手放しでは喜べない。

体の様子が変化したという事実が示す別の側面、すなわち、天使病が進行しているということ。それを思うと、わたしはどうしても気分が沈んでしまうのだ。

肌の白さ、肩の羽根は、消えゆくいのちを表しているようで。

しかもそれは、……偶然じゃないかも、しれないわけで。

そう、あの日の日羽の言葉が、わたしの中にはずっと、消えない棘として残っている。

天使病は偶然じゃないかもしれないという話。

その話をした人、日野日羽は、相変わらずどこか冴えない表情で日々を過ごしている。表面的にはふつうに話しているし、何も問題なく生活してるんだけど、あの話を聞いてしまったわたしとしては、どこか引つかかるような気持ちが抜けきらない。

このひとは天使さまをやることについて、どう思っているのか。

とりあえず、外に出ていく気はあるみたいだけど……。

ともかく、そんな心配事未満の引っかかりのせいで、わたしは夢や奈緒みたいにはしゃぎ切れないのだった。

「でもやつぱり、不安だなあ……」

ようやく鏡の前から離れた奈緒がふと、小さな声で呟いた。たった今考えていたこととおかしな具合にシンクロしてしまい、どきつとしたけど、奈緒が言ってるのはもちろんそういう意味じゃない。

「大丈夫よ。奈緒は一生懸命だから」

夢がやさしく笑ってフオローする。

「一生懸命さは相手にちゃんと、伝わるものよ。いろんなことをして、みんなに元気を出してもらうのが天使さまのお仕事なんだから、一生懸命さって一番大事なことなんじゃないかしら」

「そうかなあ……」

そう言いつつもちょっと安心したような表情の奈緒。なごやかなやりとりだ。

……それはいいけど、一生懸命とか言われると、今度はわたしが不安になるなあ。

「ふふ、沙風は大丈夫よ。相手の気持ちが分かるひとだもの」

儂はそう言うけれど、わたしにはいまひとつ自覚がない。

「私もそう思うわ。沙風とはとても話しやすいのよね」

日羽がそんなふうに思ってたなんて初耳だ。

「無意識の内にフオローしているというか。空気が読めるっていうのかしら？ いい意味で気を遣えるひとよね」

儂の言葉に深く頷く日羽。

「沙風ちゃんはすごいと思うよ……」

奈緒まで。ちょっと、やめてください、くすぐったいですから。

「儂こそ、天使さまに向いてるって。やわらかい雰囲気でどんな機嫌の悪い人も一瞬で天にも昇る気持ちになるよ」

なんだこの褒め合戦。

「そうかしら」儂は気弱そうに微笑んで、「天使さまになってひとのためになれるのは嬉しいんだけど、うまくできるかどうかはそれとは別問題だから……」

「大丈夫だって。わたしが保証するよ」

儂に話しかけられて嫌な気分になる人なんかそうそういないだろう。

「自分で言っただけじゃない、一生懸命が大事だって。ひとのためになれるのが嬉しいって思うなら、その辺りはオーケーなんじゃない？」

「そうね」

儂はちよつとだけ、元気の出た顔で笑った。

## 2章、7

そして順調に、わたしたちの症状安定化宣言がなされ。

「みんな、今までお疲れ様。これで全課程修了よ」

点滴スタンドの消えた教室に、浅川せんせの声がこだまして。

ついに、わたしたちが天使さまになる準備が、整ったというわけだ。

「あなたたちは、立派な天使さまになれると思う。自信を持って外に出て行きなさい」

せんせが力強い笑みで激励してくれる。こういうときには定番の台詞なんだけれど、やっぱり定番になるにはそれなりの理由があるんだなと思った。

何とかなるような気持ちに、少しだけなれた気がしたから。

……言う人や状況によっても、変わるものかもしれないけど。

「まあ、まだ最後のしめがあるから。それとも最初のしめと言うべきかしら？」

「宣誓の儀式……ですよね」という夢の言葉に、頷くせんせ。

歌撫さまが言っていた、宣誓の儀式。要するに、天使さまの入学式（学じゃないと思うけど）のようなものなんだろう。詳細不明。特に予行演習なんかはないらしい。

「そう。それを以ってあなたたちは正式に天使になり、外へ出て社会貢献するようになる」

場の雰囲気がぴしつと張り詰めたような気がした。

「明後日やるわよ。楽しみにね」

その日の晩から次の日一日は、その話題で持ちきりだ。

「結局何するんだろうねえ、宣誓の儀式って」

「予行演習がないことだし、そう複雑なことはいないでしょうね」

日羽はいつも通り、落ち着いている。

「でっ、でも、き、緊張するなあ……」

対して、どう見ても緊張しすぎな奈緒。いや、気持ちは分かるんだけど、前の日からそんなになっちゃって大丈夫なんだろうか。

「私たちの記念すべき第一歩ね」

そう言って笑う儂は、適度な緊張感を持っているかんじ。

儂自身は楽しそうだったけど、それを聞いた奈緒は更にがちがちになってしまった。記念すべき、という辺りが緊張を催す、のかなあ。

「みんな無事に天使さまになれて、良かったわよね」

「うん……」

儂と奈緒は和やかに話しているが、わたしと、あとたぶん日羽にも、何か違った意味に聞こえてしまった。

確かに無事は、無事なだけけれど。

儀式前日の夜は、何だか寝付けなかった。わたしがベッドを抜け出してベランダで一人、ぼうっと真っ黒な夜空を眺めていると、誰かが隣にやってきた。

「眠れない？」

儂だった。

「何だか、ね」

外は寒いので、頭を冷やすにはちょうど良かったのだ。

「日羽と奈緒は？」

「奈緒は緊張しすぎじゃないかしら？ 疲れて眠っちゃったみたい」  
ふふ、と優しく笑う。

「日羽は逆に、緊張とは無縁かしらね。いつも通りという感じ」

「そうだねえ……」ここに来ていきなり緊張されたら、違う意味で心配してしまう。

「ようやく、天使さまになるのよね、私たち」

「うん」

「待ち遠しかったな……」

わたしはおや、と思った。ちょっとニュアンスが、いつもと違うように思えたのだ。なんだかもっと前、天使病に罹る前から、ずっとそう思っていた、みたいな。

「うん。……私、ずっと『何か』になりたいなって、思ってたの」  
何かに、なりたいたい。

何となく、分かるような気がした。それはたぶん、何のために生きるのか、とかそういうことなんだろう。

「前にも言っただと思うんだけど、私、ずっと入院してたの」  
「うん」

重い症状ではなかったけれど、病院から離れられるわけでもなかった、という話。

「ただ単に入院してるだけって、ほんとうに退屈なのよ」寂しげに笑う。「ここは違ったけれどね。授業とかがあって、それが未来に繋がっていると思えたから」

わたしは小さく、本当に小さく溜息をついた。儚は、気付かなかったと思う。

未来に繋がっている、という言葉。どうなんだろう。

天使さまたちの墓地<sup>セメタリ</sup>を思ひ出す。わたしたちの、未来の姿。

「あの頃の私は、何のために生きているんだろう、って思ってた。他の子たちは学校に行って授業を受けている。その先で社会に出て、誰かのために、働く。でも病院で何もせず、ただ治療だけ受けている私は」

儚の声が、少しずつ硬くなってきたような気がする。

「私はただ、他のひとに迷惑をかけて生きているだけなんじゃないか、って、そう思ってた」

「儚」

その様子があまりに寂しそうなので、思わず名を呼んだわたしに、儚はごめんねと笑って続けた。



「だから天使病だつて言われたときは、嬉しかったわ。天使さまになれる、そうすればみんなのために生きていける。ずっと何の役にも立たなかった私に、居場所ができる」

居場所。でも、それは……。

「天使病は」

きゆうに背後から声が聞こえて、わたしたちはびっくりして振り返った。

日羽がいた。

「日羽……起きてたんだ」

おどかさないでよ、と続けようとしたわたしは、しかし、その声を飲み込んだ。

日羽はすいぶん怖い顔で、儂を見詰めていた。

「天使病は、ただの病気。だから天使になるのは、自分の力で切り開いたわけじゃない、ただの結果論」

まるで責めるような硬い声で、日羽は囁く。

「儂は、そんな風にして得られた居場所でも、構わないというの？」

止めるべきか、と思った。日羽が何故そんなことを聞くのか、わたしには分かる。分かるけれど、これは、儂には余りにもつらい問いかけのはずだ。

そんな、わたしの想いに反して。

儂は、ふわりと笑って、それに答えた。

「偶然でも、構わないわ」

きつぱりとした声だった。

「要するに、私が誰かのために何かをできる、という事実があればいいの。私にとっては、天使病に罹ったというのは、幸運なことだったの。私はその幸運を、めいっぱい活かすつもりよ」

わたしは儂の言葉に、愕然とした。

天使病に罹ったという、幸運……。

……何てことを言うんだろう。

「……そう」

日羽の顔は、相変わらず険しかった。だけど声からは、厳しさが抜けている。肯定でもない、納得でもない、それはまるで、諦めみたいな声音だった。

「儚の気持ちは、分かったわ……あなたは、強いよね」

「……ありがとう。日羽」

日羽は背を向けた。なんだかその背が、ちいさくみえた。

「邪魔したわ。明日、儀式でみつともない姿をさらさないようにしなきゃね」

日羽はおやすみ、といって病室に戻っていった。

「私たちも、そろそろ寝なきゃ」

「あ、うん」

儚は長い髪、細い手足を軽やかに揺らして、日羽に続き病室に戻って行った。

わたしは少しだけその場に止まって、真っ暗な空を一瞥した。

「……原因はどうあれ、か」

儚はすごいな、と思った。彼女は見つけたのだ、自分なりの答えを。迷いない眼で自分と、自分の行く先を見詰めている。

うらやましいなあと思う。わたしにもいつか、自分の答えを見つけられるだろうか。

\*

## 宣誓の儀式。

出席者はわたしたちと、浅川せんせと、現役天使さまたち。

会場は墓地<sup>セメタリ</sup>の中。巨大な石の十字架の中にある、教会のような雰囲気の小部屋だった。墓地に扉があるのは知ってたけど、施錠されてたから入ったことはなかった。

中央に通路、両脇に十列ほどの長椅子が並んでいる。いちばん奥は壇になっており、壁のくぼみには、純白の天使像が収められていた。

室内の灯りは蠟燭の炎だけで、薄暗いけれどもとても厳肅、かつ幻想的な雰囲気になっている。お香が焚かれているらしく、不思議な香りが満ちていた。

わたしたち四人は、最後列にちょこんと座っている。前のほうには現役天使さまたちの列。一番前に歌撫さまがいるのが見えた。そして壇には普段のジャージっぽい姿ではなく、黒を基調とした礼服に身を包んだ、浅川せんせの姿があった。

喋るひとは、誰もいなかった。

静謐な空気が、揺らめく炎に照らされている。

「では、今期の誓約の儀式を始めます」

浅川せんせが静かにそう告げると、ざ、と前列の天使さまたちが一斉に立ち上がった。わたしたちも慌てて立ち上がる。そうする間に天使さまたちは皆、中央の通路のほうに向き直っていた。

「白河夢」

「……はい」

まず初めに名を呼ばれた夢が、ゆっくりと天使さまたちの間を通って、壇に向かう。天使さまたちの視線はさまざまだったけど、だいたいは優しい表情で、歩む夢を眺めていた。

夢がシスターのような雰囲気をつたった浅川せんせの前まで辿り着く。

せんせは、誓句を詠み始めた。

白河夢よ。

汝は常に誇り高く、

また尽きることなき慈愛を以って、

この黒き濁世に於いて

浄潔の御手と無垢なる翼持つ

白き癒し手となり

儂き命を全うすることを誓うか？

いつか、どこかで聞いた　いや、見た言葉。

それは天使さまたちの墓碑銘と対になった、誓いの言葉だった。  
わずかだけど長い沈黙の後、

「　誓います」

と、儂は静かに、力強く、応えた。

浅川せんせはそれに頷きで返答すると、

「では、頭を下げて」  
と言った。

儂が言われた通りに、少し頭を下げると、せんせ自身の手によって、そこに白い花で作られた冠が載せられた。白い花の、天使の輪だ。

「これであなたは正式に、天使として認められました。今の気持ち  
を忘れず、尽くしなさい」

「……はい」

儂はこちらに背を向けているので表情は分からなかったが、想像  
はできた。声が少し、震えていたから。

今、また一人新しく、純白の天使さまが誕生したのだ。

果たして戻ってきた儂は、目を赤くしながらも薄く微笑んでいた。  
わたしは自分の番がまだだというのに、もらい泣きしそうになって  
しまった。

「名霧沙風」

「は、はいっ」

わたしは反射的に答えると、慌ててせんせの元へ向かった。天使  
さまたちの間を通るときはものすごく緊張した。壇の直前で歌撫さ  
まが笑いながら「もうちょっと落ち着きなよ」、壇に辿り着くとせ  
んせがやっぱり少し苦笑いで「大丈夫よ、リラックスして」と小声

で言ってくれた。そうして夢のときと同じ誓句を詠み上げた。

わたしはできるだけだけの気持ちを込めて、

「誓います」

と言い、言われるがままに頭を下げ、花の冠を載せてもらった。緊張で頭が真っ白になってしまった。顔が赤くなっているのはつきり分かってしまい、そのせいで更に恥ずかしくなる。悪循環。ほうほうの状態で元の場所に戻ったわたしは、すぐに椅子に座りたくなったけど、みんなが立っているのに一人だけ座るわけにもいかない。

「立派だったわよ」

と、一足先にやることを済ませて余裕の夢から声をかけてもらい、ようやく落ち着いた。ああ、終わったんだなあ。

わたしが後遺症に四苦八苦している間に、日羽は立派に役目を終えた。日野日羽はソツのない女だ。

そして最後に、奈緒が呼ばれる。

彼女はゆっくりと、本当にゆっくりと壇に歩み寄った。

そして問われる。誓うか？ と。

少しの間があった。

後ろから見る奈緒の顔は、しっかりと、前を向いている。

「誓います」

清冽な鈴の音のような、凜と響く誓約だった。あの奈緒が。ずっとおどおどしていた奈緒が、誰よりも立派に、誓いを約している。

最初はおどおどして、頼りなさそうな子だなと思っていた。

だけどいちばん天使さまに憧れていたのは、奈緒だった。

そしていちばん努力していたのも、奈緒だった。

天使さまをやるということに対して、わたしたちの中でいちばん真摯に向き合っていたのは、このちいさな女の子、穂ノ村奈緒だったと思う。

白い冠を載せられた奈緒が、こちらを向いた。

真っ直ぐな目。

そこには確かに、一人の立派な、天使さまの姿があった。

そして厳かに告げられる、儀式の終わり。

わたしたち四人は、こうして、天使さまになった。

## 2章、8

天使さまになったら、その次に待ち受けているのは何かということ、お仕事だ。

というわけで、今日はわたしたち新天使さま（自分のことなのに「さま」をつけるのもどうかと思うけど）の初陣。とある児童養護施設を訪問し、子どもたちのお相手をするということだ。

新天使さまの初仕事ということで、テレビの取材なんかも来るって話。ただでさえ緊張してるのに、正直ちよつと勘弁してください……という感じだ。といつてもどうしようもないんだけれど。

さて、どうやって移動するかというと、基本はヘリである。

わたしたちが初めて天使病棟に来たときに乗ってきたヘリ。あれがまさしく、天使さまの移動のために使われている。すなわち、空を飛ぶための天使の翼（ただし鋼鉄製）というわけだ。

ヘリ内部は、狭い。パイロット席を除けば、わたしたち四人プラス一人でもう一杯だった。

「ううー緊張しますよせんせー」

「天使は度胸だよ、名霧」

「慈愛じゃないんですか？」

「慈愛と度胸」

「要求厳しくないですか？」

「そんなことないわよ、みんなできてるんだし。実戦で勘を掴みなさい」

なんだかこのひと、とつぜん放任主義になったな。

ちなみにヘリ内部での会話だ。パイロットは、何を隠そう、浅川瞳先生その人である。パイロットまでこなすとは、この人一体何者だ。

「かつ、歌撫さまも最初はこんな気持ちだったんですか？」

ただ一人の「わたしたち四人以外」である歌撫さまは、流石に慣

れきった様子で、というより座席にだらーと座って……ずり落ちそう……リラックスし過ぎだこのひと。

「え？ うん」なんか眠そうだし……。 「大丈夫、すぐ慣れるよ。それより何事も初めては特別、貴重なオンラインワンだから大事にしないと、だめだよ」

ふわあああああとか大あくびしながらそんなこと言われても。にしても、会話ができてるわたしはまだ良いほうかもしれない。奈緒に至っては顔色がちょっと悪いくらいだし……。

「奈緒、大丈夫……？」

「う、うん」

「緊張するよね」

「う、うん」

「でも奈緒は子どもの扱いは慣れてるから平気かな？」

「う、うん」

「……やっぱり、だめ？」

「う、うん」

「……」テンパってる……。

「……儂、何やってるの？」

このひとはさっきから、ヘリ内部にぶらさがってる医療器具っぱいのをいじっては戻しを繰り返している。

「ええ、ちよっと落ち着かなくて……」

「そうだよね」

「この医療器具みたいなものって役に立たないのかしら……」

いえ、緊張をほぐす役には立たないと思いますよ……。

「精神安定剤とか、ないのかしら……」

薬に頼ろうとしだした！

「日羽、何とか言ってやってよ」

さっきから一言も発さず、窓からぼーっと外を眺めている日野日羽に助けを求める。

「……本を持ってくれば良かったわ」



聞いてないし。

「あー、大混乱だね。ぼくらのときも似たようなものだったな」

そんなわたしたちの様子を面白がるように、にやにや笑いの歌撫さまが口を出してきた。ただ、目は、どこか遠くを見るように……懐かしげに、細められている。

「歌撫さまのときはどうしたんですか？」

「ん？ 案ずるより、産むが易し」

「この状況じゃ何の役にも立ちませんよそれ」

「じゃあ、塞翁が馬」

「わたしは安定志向です」

「窮鼠猫を囓む」

「あなたを囓みますよ」

「ぼくは沙凼くんになら、囓まれてもいいよ……？」

「ひい」不気味にくねくねしながら近寄らないでください！

「ふふん」

なぜか勝ち誇った笑みを浮かべると、歌撫さまは黙ってしまった。誰も助けてくれない。

へりは、一旦どこかの学校の校庭らしきところに着陸した。目的地には停まるだけのスペースがないらしい。そこからはマイクロバスで移動。そのバスも真っ白だったけど、偶然なのかどうかは分からない。

目的地に着くとすでに子どもたちは準備万端スタンバイオッケーだったようだ。

「天使さまだ

！」

今まさにバスから降りようとしていた奈緒が、驚いてずり落ちそうになるくらい凄まじい音圧のお出迎え。子どもたちの怒涛が押し寄せ一瞬で包囲。手を掴まれて引きずり込まれた。

「ねーねー天使さまー」「はねさわっていいーい？」「まっしろだ！」

「きれー」

ええともつと穏やかで和やかなお遊び風景を想像してたんですけどっ！　とんでもなくパワー溢れる子どもたちだ。これって普通？　わたしたちが天使さまだから？　ていうか段取りとかないのっ？　てっ、天使さまは慈愛と度胸！　気合を入れて子どもたちの話を聞き微笑み返し手を握って頭を撫でる。入れ代わり立ち代わり現れる大勢の子どもたち。ここは戦場かつ！？

ちらと周りを見れば、儂と奈緒はさっきまでの慌てぶりが嘘みたいに落ち着いた様子で、子どもたちの相手をしている、というか彼女たちのところにいる子どもたちは、どうしてあんなに静かなんですか？

冷静な女、日野日羽は今日も慌てず騒がず、柔和な微笑みを浮かべて子どもたちに抱きつかれたりしてる。

歌撫さまは流石に慣れたもので、一瞬前まであんなに眠そうだったのにもうめちゃくちゃしゃっきりしてる。主に男の子の相手をしてるみたいだけど、それは子どもたちが歌撫さまの少年みたいな雰囲気敏感なのか、何なのか。

って、困ってそうなのわたしだけか。

うわっあれってテレビカメラ？　初めて見た。でかいなあ。というかわたしたちテレビに映ってるのか。そうだよねそう言ってたもんね……。

「うわぁこのはねあつたかい……」

二人くらいの女の子がさわさわとわたしの羽根を撫でている。ちよつとくすぐりたい。

「ね、なんで天使さまにははねがはえてるの？」

「なんでかみの毛、しろいの？」

純粹な瞳をきらきらさせて、無邪気な質問をしてくれる子どもたち。

ええと病気だからです。

なんて言えるわけない。

「え、えーとね……」

何かいい答えはないかと脳内検索。

……。

「天使さまの体はね、お砂糖でできてるの。だから白いんだよ」  
子どもたちはお口半開きで、わたしの言葉を聞いている。

「……ちなみに、黒蜜入り」

何も言わない子どもたち。

外したかなあ……ていうかわたしは何を。

「……うわあ……」

子どもたちの一人がちいさく声をあげる。そっちを見る。

一人の女の子がいて、

……めちゃくちゃ目が輝いていた。

「すごい、天使さまのからだってお砂糖でできてるんだ！」

予想外の大ヒット！？

「うわあー」

「あまいの？」

「たべてもいい？」

子どもたちがものすごい勢いで迫ってきた。ぺたぺたと。ぺたぺたと。ぺたぺたと。

だ、だれだっわたしの羽根を引っ張ってるのは！

ああ、でっかい声でわたしの言ったことを言いふらさないでっ。

恥ずかしい。

子どもたちの波に飲まれて、わたしは意識が遠のくような気分を味わった。

薄れゆく意識の中で思う、

わが無二の親友湯葉美加子め、おかしなことをわたしに吹き込んだ恨み、晴らさでおくべきか、と。

で、ようやく子どもたちから解放されたわたしたち新天使さま四

人は、まとめてインタビューを受けることになった。わたし以外は涼しい顔をしているのが、どうも納得いかない。

「さて、今日から新しく四人の天使さまが加わりました！ 一人ずつインタビューしていききたいと思います」

どこかで見たようなレポーターの女の人が、無闇に明るいい声でそう言った。まずは名前を聞かれたので普通に答える。

「今日は初めてのお仕事なんですよ。どうでした？」

と聞かれてマイクを向けられたので、わたしは正直なところを述べた。

「っ、疲れましたあ……」

するとレポーターの人は一瞬きよとした後、大笑いした。何か変なこと言ったかな？

「ずいぶん人間味のある天使さまですね！」 いや人間ですから。

その後順々に皆の今日の感想が述べられるにつき、わたしの言ったことがどうやら標準外らしいことが分かってきた。

奈緒曰く。

「わたしは、ずっと天使さまになれたらいいなって思っていましたから…… 今日初めて天使さまとしてお仕事できて、とても、何ていうか…… 感動してます」

日羽曰く。

「尊い仕事だと思っています。これからも皆さんのお役に立てるよう頑張りたいと思います」

夢曰く。

「私にもできることがあるんだなっていう実感が持てました。生き甲斐…… ですね」

みんな立派すぎ。これじゃわたしの立場は壊滅的だ。後に日羽にそんなことを言ったところ、

「あんなもの、適当に良いこと言っておけばいいのよ」

というクールな答えが返ってきた。奈緒や夢はかなりの部分本音だったんだろうけど、彼女はじつにドライである。

「病気の体を押して私たちのために社会貢献してくださっている天使さま。彼女たちの献身に深く感謝しつつ、彼女たちが少しでも長く生きられるよう祈りましょう！」

そんなふうインタビューは締め括られた。天使さまになる前にニュースの中で散々聞いた言葉だ。この点については、天使さまになろうがわたしの感想は変わっていない。

盛り上がり過ぎじゃないかなあ。

対外的にはともかく、実際はどうだったの？ という話になる。

「やっぱりちよっと、気持ちが変わったっていうことはある、かな

……」

奈緒はベッドにちよこんと腰かけ、足をぶらぶらさせながらそう言った。体はちいさいままでも、なんだか貫禄が出てきたような気がする。

「前はレポーターの人の言ってること、へんだなとは思わなかったけど。ううん、何というか……」

儚がちよっとだけ苦笑いしつつ、その先を継いだ。

「ちよっと、大げさな感じはするわよね」

「そ、そうだね。そんな感じ」

「天使と人間は別のも……っていう印象よね」

日羽が淡々と言う。

「ま、確かに大げさだけど、あれが天使の存在意義でもあるわけだからねえ」

初仕事を終えたわたしたちに、歌撫さまは、そんなことを言う。

「あの盛り上がりがあるからこそ、ぼくたちの仕事の重要性が増してるのさ」

天使さまは人気者、みんなの心の拠り所、か。

「そうですね」儚は相変わらず柔らかい雰囲気だけど、目付きには強い意志を感じる。

「もつとがんばらなくちゃ」

奈緒がうんうんと頷いた。

「それにしても、子どもたちと話せたのは良かったわ。すごく喜んでくれていたみたいだもの」

「そうだね」奈緒もとても嬉しそうな微笑になる。「かわいかったなあ」

「悪いものじゃ、なかったわね」日羽までそんなことを言う。

「わたしは疲れた……」

「沙凼ちゃん、大人気だったね」

「子どもたちも、人見てるんじゃないかしらね」

日羽のへんな笑顔が気になるけど、ううむ。子どもたちも侮れない。

「ちょっと……珍しいタイプの天使さまっていう感じはするわね」

夢が興味深そうな目でわたしを見ている。妙な間があったけど何言おうとしたのやら。

「ああ、インタビュー見たよ。面白かったね、あれは」

歌撫さま、からかわないでください。

「みんな立派なこと言ってたね。ずるい」

「ずるい、というか……」

ジト目のわたしを見てちょっと申し訳なくなったのか、困ったような表情の夢。

「何だかカメラ向けられると、あんな感じのこと言わなきゃいけないような気がして」

「う、うん……」

奈緒が同意。そんなものかな。

「いいんじゃないかしら。歯に衣着せないのが沙凼の魅力でもあるのよ」

そうかな？

「そうそう」歌撫さまには言われたくないです。

ともかく、……「でもある」ってのが気になるけど、褒められて  
いるんだと思っておこう。

「沙凪は、どうだったの？」

夢がどこか遠慮がちにそう聞いてきた。ああ、そう言えば疲れた  
としか言っただけだったなあ。

「うん、子どもたちは可愛かったね。いつもどうなのか知らないけ  
ど、すごく元気だったし」

わたしはあの子どものたちの様子を思い出しつつ、

「笑顔が見れるお仕事って、貴重だなあと思った」

それは本心だった。夢の言った「天使病に罹った幸運」という言  
葉の意味が、ほんの少しだけ、理解できたような気がする。

「わたしが笑顔を、ねえ……」

ぼそっと呟いただけだったんだけど、皆に聞こえていたようだ。  
顔を上げると、みんな優しく微笑んでいた。

恥ずかしかったけど、不快じゃない。

このとき確かにわたしは、天使さまのお仕事を、すてきなものだ  
と思えていたから。

\*

そうして天使さまとしての生活が始まって、わたしたちは、いろ  
んなところでお仕事をしていった

身寄りのない子どもたちやお年寄り、障害者のひとたちと語らっ  
たり。

街角の美観のために、ゴミ拾いをしたり、緑を植えたり。

人形劇のチャリティ公演のため、お人形をせつせと作ったり。

あるいは、単にわたしたちを写すためだけの取材に答えたり。

楽しいことばかりじゃなかったけど、みんなで手を取り合って、  
わたしたちは頑張った。

わたし自身としては、ひとつお仕事をするごとに、こころが一步

天使さまに近付くような感じを覚えていた。

それは意外なくらい、気持ちのいい感覚で。

緩やかに穏やかに、そのすてきな時間は過ぎていった。

ずっとそんな生活が続けばいいなと、どこかでわたしは思っていた。

だけど、そんなわけはなくて。

髪の毛が抜け落ちるように、伸びた爪が切られるように、ごく自然な結論として、永遠なんか、どこにも無いのだ。

時間が止まって欲しいなんて、そんなわがままは、通らない。

そう、わたしたちは天使さま。

不治の病の、犠牲者なのだ。



### 3章、1

三 天使さまの体には、黒い血が流れている

褪めた月の光が、眩い夜だった。

音が聞こえる。

ちいさく、かすかな、軋む音。

夢うつつのちいさな吐息。

ぼんやり目を開けば、そこは灯りの落ちたいつもの部屋。月の光がカーテンの隙間から細く射し込み、わたしたちのベッドを蒼白く照らしていた。

何の音……？

誰の声？

きちきち、きちきちと、硬いものが、擦れ合うような音。

不安を誘う音……、

時折響く、押し殺した声が誰のものなのか、その意味するところが何であるのか、理解したわたしは、飛び起きた。

「夢！？」

お腹の底がひっくり返るような、嫌な感覚がする。

「は、う、うつ……」

目覚めた意識にくつきりと刻まれる、苦しそうな喘ぎ声。

外からの仄かな光に照らされ、かすかに浮かぶ夢のベッド。その上に、何か大きなものが、のし掛かっているのが見えた。

なに……あれ……。

暗闇に同化する黒いもの。うつぶせの夢の背中にとりつく、いび

つな形の大きな何か。そこから聞こえてくる、異様なくらい耳につく、枯木が折れるような不吉な音色。

「どうしました？」

部屋の入口から、場違いに間延びした声が聞こえてきた。

少し遅れて、灯りが点く。一気に緊張する、入口の気配。

夢の背にあるものが、蛍光灯に照らされた。それはまるで、奇妙にねじれた異形の彫刻。でもどこか生物的な質感を持っていて、そしてそれは濡れていて、黒い雫を、シーツの上に、ぽた、ぽた、と垂らしていた。

それは、夢の肩の辺りから生えていた。

天使の羽根の替わりに、生えていた。

黒くて大きい、いびつな翼。

そこから時折、割れるような音が聞こえては小さく揺れ、黒い飛沫を散らしながら、きちきち、ぱきぱきと、細く枝分かれしていく。夢の肌は、いつもと変わらない白……だけど羽から散った黒い何かで汚れ、無残な斑に染まっていた。

「は、あ、うつ、ぐうつ……！」

一際大きな苦鳴が漏れると、それにもない翼が揺れる。

ベッドはすでに、真っ黒だった。

「あああう、うああっ！」

ずる、と、片側の羽が傾いた。そのまま肩から剥がれて床に落ちる。ごりごりという音が聞こえて折れた羽が生え変わっていく。

泣きながら駆け寄ろうとした奈緒が、いつのまにか増えていた看護師さんに取り押さえられる。泣き叫ぶ声が、わたしの鼓膜を震わせる。

わたしは無意識のうちに、自分の体を抱き締めた。

担架に移され、運ばれていく、夢の体。

顔は苦痛一色で、汗と涙に塗れていた。

儂は、戻ってこなかった。

儂の血で汚れた一切はすでに清められて、元の通り、真っ白になっている。看護師さんたちが、掃除していった。ゴム手袋つけて。汚いものでも扱うように。こんなに激しく、急なのは初めてだ、とか、言っていたけど、そんなのは知ったことじゃない。儂の血は汚くなんかない。でも怒る気力はからっぽだった。

持ち主の居なくなった、ベッド、机、クローゼット、本棚、その他諸々。何もかもそのままなのに、一番肝心なものだけがなくなってしまった、生活の抜けがら。

日羽も、奈緒も、ずっと無表情で黙っている。そしてわたしも。食事も喉を通らない。

最低限の反射だけで進める、反復行動としての日常生活。

停滞した空気が、重さを持ったように、わたしたちの上にわだかまっている。

とても大切なものが、欠けてしまった。

分かっていたはずだった。

はずなのに。

わたしたちは天使病。

いずれ死に至る、不治の病の犠牲者なのだ。

けして目を逸らしていたわけじゃない。だけど、現実には想像していたよりも、もっとずっと、酷かった。

こんなにすぐに。

あんなにも、辛そうな。

儂の姿。お人形さんのようにきれいな彼女に、あんな、怖ろしい形の何かが生えるなんて。

痛がってた。苦しんでいた。目を閉じ、歯を食いしばって、耐えていた。

どうして。

どうして夢が、あんな目に遭わないといけないんだ。

子どもの頃から入院していて、天使さまになれると分かって喜んでいた夢。

天使さまになって、ようやくみんなのためになれると、張り切っていた夢。

いつでも優しく笑って、空気を和らげてくれた、わたしたちの大切なともだち。

夢が何か、悪いことをしたのか？

病気だから仕方ない？

天使病に罹ってしまった現実を、嘆くしかない？

いつかこうなる運命だったと、受け入れるしかない？

いや、そもそも。

天使病に罹ったことは本当に偶然だったのかと、そう言ったひとが居た。

### 3章、2

「日羽」

わたしはあのことについて問い質すことを決心した。自分でも驚くほど、無感情な声が出た。

日羽は声に出しては返事せず、視線だけでわたしの言葉に反応した。そしてちら、と奈緒のほうを見る。彼女はベッドの上で、膝を抱えて塞ぎ込んでいた。このところずっとそうだった。

だけど、この話は、奈緒にとっても無関係じゃない。

「前に言っていた話」

日羽は何も言わない。

「天使病が」

決心したはずなのに、それを実際に口に出すのには抵抗があった。苦勞して喉の奥から、言葉を引きずりだす。

「偶然じゃないかもしれないって話」

奈緒がはっとして顔をあげた。怯えるような表情。

ずいぶん長い間、日羽は黙っていた。その間、わたしは日羽の目を見詰め続けた。

やがて、根負けしたように、日羽は目を逸らした。

彼女が口を開く。

「天使病なんて病気は、無いわ」

「証拠は？」

わたしは言う。疑っているわけじゃなかった。単にそれは、日羽が掴んでいるであろう証拠の提示を、求めただけだ。

それを聞くと、日羽は机の中からカッターナイフを取り出した。

そして自分のマグカップの上に、手首とカッターをかざす。

ぎち、と音を響かせて、日羽はカッターの刃を出した。

不吉な空気が、場に満ちる。

「……日羽。何するつもり」

わたしの言葉も半ばに、日羽はその手にもったカッターで、自分の左手首を、ざっくりと切り裂いた。

血の気が引くのを自覚する。奈緒が隣で悲鳴をあげる。

「何、してるんだっ」

手当てしようとしたわたしを、日羽は蒼白な、だけど強い視線で睨みすえて制止する。

「黙って、見ていて」

確かな意志の光に中てられて、わたしは動けなくなった。

黒い　真っ黒い血が、日羽の左手を伝い、ぽたぽたとマグカップの中に落下していく。雫、雫、黒い血の珠……。

長い、長い間そのままだった日羽は、ふいに傍らのタオルで手首を押さえると、手際よく止血して包帯を巻いた。

そして病室の隅に歩いていき、花瓶から一輪、緋色の薔薇を抜き取った。

日羽の手から薔薇が放たれ、マグカップの中に、落ちる。

日羽の　いや、わたしたち天使さまの血に、薔薇が触れる。

少しの間、変化はなかった。

始めに起きた変化は、音。

きちきち、

きちきちと、

何かが擦れるような音がする。

小さい音だった。誰かがお喋りしていたら聞き取れないだろう、

そんなかすかな　薔薇の悲鳴。

日羽の白い指が、マグカップの中の薔薇をつまみあげる。

姿を現した薔薇は……真っ黒に濡れて、雫を垂らすそれは……、もう、薔薇とは似ても似つかないかたちになっていた。

枯木が折れるような不吉な音色を撒き散らしながら、歪にねじれ、ささくれ立ち、割れて枝分かれては一部が剥がれて落ちて行く……、そしてまた、生え変わる。

見たことのある変化。

これは、まるで……、

まるで夢の羽根と、同じ様子だった。

やがて変化は落ち着き、後には枯れた、一輪の薔薇が……。

「見たことないかしら。この、花の様子」

言われてわたしは思い当たる。確かに、見たことがある。

「道端の……」

日羽が小さく頷く。

「道端の、草の姿」

そう、その薔薇の、黒く干乾びたような姿は、雨晒しの草の、成れの果てにそっくりなのだった。日羽が手を放し、黒く枯れた薔薇は落ちていく。着地したそれは、粉々に壊れてばらばらになった。天使さまの血に浸された薔薇の花が、夢と同じような変化を経て、雨晒しの草のような姿になった。

つまり……。

「私たちの血は、黒塵と同じ反応を示す」

日羽は淡々とした口調で、しかし厳然と宣言した。

「同じ畸形を、生命にもたらず……」

念を押すように、同じ内容の言葉を繰り返す。

もう、分かっている。日羽が何を言いたいのか。そして日羽は間違ったことを言っていないことを。目の前に、紛れも無い証拠が示されていると。

でも。反論しなければならぬ。でない。

「黒塵が、わたしたちの血の中に溶けてるって言いたいんだよね」

日羽は頷く。

「でもそれは、天使病がそういう病気だっていうだけの話じゃないの？ たまたま、血が黒塵みたくになる病気」

「自然発生した病気が、偶然黒塵と同じ反応を示すなんて、有り得ないと思うわ」

「じゃあ、……今でも黒塵は大気中に散ってるんでしょ？ それが取り込まれただけなんじゃ」

「それも違うわ。天使病が確認され始めたのが約十年前、その頃は黒塵の濃度は落ちていて、それによる病気の報告も殆どなされなくなっていたもの。今に至るまで、新たな天使病発症者が出ていることが説明できない」

「……体に入った黒塵が、勝手に増殖したとか」

「黒塵はウイルスじゃないわ……自己増殖したりしないの。そうでなければ、濃度が薄まって、被害は収束しないはずだもの」

「……」

反論は、ことごとく潰されてしまう。

「それに」

日羽は、望んでもいない駄目押しを呟く。

「天使病が偶然だとしたら……天使の持つ共通性、例えば誰もが身寄りがいないか家庭に問題があったり、おかしなくらい美形だったりすることの説明がつかない。初めから、そういう人間を選んで連れてきていると考えるのが自然だわ」

何か反論したい。日羽の言うことを認めたくない。

それなのに、わたしの中からは何も出てこない。

「私の父は、黒塵の研究者だったの。ちいさい頃の私は父の研究室によく出入りしていた。その頃に父は死んでしまったから、それが私に残る、父の唯一の記憶。だからよく覚えてる。この……黒塵の反応のことは」

そして、黙りこもわたしの気を知ってか知らずか、日羽は、言葉を継いでいく。

ため息を、つきながら。

「……もう、分かるわよね」  
「……分かりたくない。」

「……自然に発生したものではない、体内で増えもしないとすれば、その先は聞きたくない。でも……」

「外から入れられるしかない　つまり」



……日野日羽は、残酷な女だ。

「私たちが毎日受けていた、点滴。あれに、塵の成分が入っていたんでしょうね」

だとしたら。

「儚、は」

口の中がからからだ。舌がうまく回らない。

「儚は……病院に、病院のせいで、あんな目に遭った、ってこと？」

「儚だけじゃないわ」

日羽はあくまで淡々と、言う。どうしてこんなに冷静なんだ。

「わたしたちも。今までの、天使たちも」

日羽は髪をかき上げた。

その左手首には、白い包帯が巻かれている。

ああそうか、とわたしは悟った。

前に日羽が、わたしにこの話をしたとき、そのときも彼女は左手首に包帯をしていた。

日羽はそのときも同じことをしてたんだ。あのときも、天使病が偶然ではないという証拠を確認してたんだ。

もうずっと前、わたしたちが白くなった頃から、知ってたんだ……。

だったら。

「どうして」

知ってた、のに。

「どうして、止めなかったの」

もっと前に止めておけば、儚は、あんな苦しい思いをせずに済んだんじゃないのか。

点滴なんかしなければ。薬なんか飲まなければ。

「どうして、止めなかったんだ！」

そうすれば、儚はもっとずっと、天使さまで居られたんじゃないのか！

「どうして!!」

「やつ、やめて、沙風ちゃん!」

気がつけばわたしは日羽に手を伸ばしていて、その腕に、涙でぐちゃぐちゃになった奈緒がすりついていていた。

「やめてよ……けんかしいで」

「……ごめん」

急に気持ちがいっぱいだわたしは、離れてベッドに座り込み、膝を抱えた。

沈黙。

やがて日羽が、ぽつぽつと、喋り始めた。

硬くて痛いものを吐き出すような、告白……。

「……私は、どうしていいか、分からなかったの」

こんなときでさえ、いつもと変わらない、冷静な日羽だと思っていた。

そうじゃなかったと、わたしはこのとき初めて理解した。

「私は、やめさせるべきかもしれないと思った。でも、僕と奈緒の顔を見ていたら」

奈緒が顔をあげ、赤い目で日羽を見た。

「やめさせたら、天使になれなくなる……。だから、私は」

日羽の声が、そのとき初めて、ふるえた。

「とめられなかった」

いつもと変わらない、冷静な日羽なんかではなかった。

それはただ、どうしていいか分からないから、いつも通りにしかできないだけだった。

無表情な日羽の目から、涙がひとすじ、つ　と落ちた。

「私には、できなかったの……」

「……日羽」

日羽だって、つらくないわけじゃない。

そんなの当然だ。日羽だってわたしと同じ気持ちなんだ。一緒に羽根が生える痛みに耐え、天使さまとして手を取り合った、たいせ

つな友だちなんだから。

「ごめん、なさい」

「うっん、日羽……こっちこそ、ごめん。言い過ぎたよ」  
「でも」

それでも納得しない日羽に、わたしは首を振った。

「第一、日羽のせいじゃない。わたしだって……」

そう、わたしだって日羽の話を聞いていたのに、結局何もしなかった。やろうと思えばわたしにだって、止められたはずだ。

日羽のせいじゃない。日羽の話を本気にしなかった、わたしにも責任はある。

「それに、途中で点滴やめたって、本当に止まったかどうか」

「……そう、ね」

日羽はまだ、申し訳なさそうな顔をしている。

その表情一つ見ても、よく分かる。日羽はわたしたちと、同じ気持ちだと。

本気に決まってる。でなければ、わざわざ自分の手を切ってこんなにも沢山の血を流してまで、事の真偽を確かめたりしない。

「日羽のせいじゃ、ないよ……」

何度も念を押して、ようやく日羽の表情は、すこしだけ和らいだ。  
「……ありがとう。沙風」

### 3章、3

「こんなの、絶対許せない」

誰が悪いのか？ そんなの決まってる。

わたしたちに黒塵を混ぜた、病院が悪いに、決まってる。

「何とか、しないと……」

こんな酷いこと、止めないといけない。

この気持ちもみんな一緒だと、わたしは思っていた。

だけど日羽も、奈緒も、顔を俯けたままだ。

「……どうしたの？」

「本当に、止めるのが、いいのかしら」

「え？」

「もし私たちがこのことを告発したとしたら、きっと……このままではいられない」

「……あ」

「私たちは、きっと、天使ではいられなくなる」

今の生活が壊れる。

それは、怖ろしい想像だった。天使さまとしてこれまでしてきたこと。そしてその結果として得られたこと。みんなの笑顔。わたしたちの生き甲斐。

それがみんな、消えてなくなる。

「……それでも、このことを告発するのが、本当に正しいこと……なのか」

日羽の表情は、苦悩に満ちていた。

ようやくわたしは、日羽が何に悩んでいたのか、どうしてこのことをずっと隠していたのか、その本当の理由に気がついた。

今の生活を壊して、真実を明るみに出すか。

それとも、天使さまとしての立場を守るか。

二つに一つ。

夢のことは、許せない。それは絶対だ。

だけど、わたしたちは、そして他の天使さまたちも、天使さまとしてのお仕事によりかかって生きている。それは決して、簡単には壊せない。わたしたちだけの問題でもない。

わたしは、天使さまでなくなったら、どうしていいのか分からない。

とんでもない二律背反だった。

どうすればいいんだろう……。

「……わたしは」

そこで声をあげたのは、奈緒だった。

「わたしは、本当のことを、みんなに知ってもらうのがいいと思う」

「……奈緒」

「天使の生活が、壊れてしまっても？」

日羽の問いに、奈緒はちいさく、でもはっきりと頷いた。

「わたしたちは天使さまだけど、でも……」

奈緒は俯いたままだったけど、声もちいさかったけど、その言葉ははっきりとわたしたちの耳に届いた。

「わたしたちのしてきたことは、天使さまじゃなくても、できるんじゃないかなって……思うんだ」

「……あ……」

確かに、その通りだ。

目からうることは、このことだ。

わたしたちが普通のひとと違うのは、見た目だけ。

容姿そのものの影響も、少なくはなかったかもしれないけど。

でも、決して、それが全てじゃない。

「確かに天使さまは真っ白で、きれいで……それはいいことだけど、でも、そのために病気になるって、夢ちゃんみたいに…… なっちゃうなんて……」

涙声。

奈緒は、聞いたこともない大声で言った。

「そんなの、ぜったい、まちがってるよ……！」

奈緒が、怒ってる。

初めて見た……。奈緒がこんなにはつきりと、自分の意見を主張するところなんて。

だから余計に、その姿が胸に突き刺さる。

「そう、ね」

「……うん」

わたしは日羽と顔を見合わせ、お互いの気持ちを確認した。

「確かにこんなの、絶対おかしい」

「そのことを知ったからには、必ず真実を、白日の下に」  
喉がつかえそうな、痛くて苦しい気持ちが始まる。

「絶対に」

夢はもう、犠牲になってしまった。わたしたちも遠くない将来、同じようになるかもしれない。もう手遅れかもしれない。そしてわたしたちの行動で、天使さまたちの生活を粉々に壊してしまうかもしれない。

だとしても。

「戦おう。わたしたちが、最後の天使さまになるように」

三人、手を取り合って、頷いた。

「でも、どうすればいいのかな……」

奈緒の言葉は、もっともだ。戦う、と言っても一体どうすればいいのか。

「うーん。そだな……」

腕組みして考える。

「やっぱり、警察……？」

黒塵を体の中に入れてるなんてそんな馬鹿なこと、常識的に通るわけない。どう考えても犯罪行為、いやそれ以前の問題だ。

でも日羽はわたしの意見を否定する。

「警察は、信用できないと思う」

「どうして？」

「……そもそも私たちがここに来たきっかけ、覚えてる？」

「ええと」何だったかな。

「健康診断」

「ああ」そうだ。学校で受けた、年に一度の健康診断。

「あれは、国がそうしなさいと決めているものなのよね。今にして思えば、天使のオーディションを兼ねていたんでしょうけど」

日羽の口元は皮肉げに歪んでいる。ちよつとこわい。

「ということは、天使病って……」

「国が絡んでいる可能性が、高いと思う」

敵の正体は、国でした。……いきなりスケール広がった気が。

「だとすれば、警察も信用できないわよね」

「確かに、そうかも」

「というか、そもそも警察に駆け込むにしたってどうすればいい？  
という話ではある。」

ここは天使病院であり、外との連絡手段は全く、ないのだ。携帯もない。固定電話もない。ネットも書き込みやサイト開設などの情報発信は不可。……こうなってみると、都合悪い情報をリークされないようにそうなってるようにしか思えない。

じゃあ逃げ出せばいいかというと、これも難しい。ここが何処なのか、いつもへりで出入りしてるせいで全然分らない。どこかの山の中だったことは分かるけど、歩いて人里までたどり着けるのかどうか。それ以前に、敷地から出るのさえ難しい。

ともかく、警察のセンが駄目だとすると……。

「あ」

情報発信の手段、あるじゃないか。

わたしたちは天使さま。お茶の間の定番だ。

「あのさ。テレビに出たとき、このこと言ってみるってどうかな」

それも録画じゃなくて、生中継ライヴのときに。

「う、うん。そうだね」

奈緒はちよつと頬を赤くして、乗り気みたいだったけど、

「そうね……」

日羽的にはいまいちなようだった。

「きつとすぐ止められてしまうと思うわ」

そういえば、天使さまが外に出るときには、病院の先生の他に警備員の人が必要、同行する。今まではわたしたちを守るために居てくれてるんだと思ってたけど……。

「でも、少しでも伝えられれば」

「ここに戻った後で二度と外に出してもらえなくなつて、テレビでは良いように情報操作されてしまう……、と思う、わ」

「そうかな」

テレビの線もだめか……。

どうすればいいんだろう。

「うー」

分からない。

理不尽。

理不尽だ、本当に。

「だいたい、何だつて病院側はこんなことしてるんだろ」

まさか真つ白な天使さまを作り出して社会貢献させるため、じゃないだろうし。

「社会貢献というのも理由の一つかもしれないけれど」

「え？」

「いえ、現状の天使人気つてすごいでしょう？ 社会現象にまでなっているし」

「それは確かにそうだけど……」

「ええ、もちろん結果論だとは思うわ。けどわたしたちの存在が、不満を逸らすための広告塔プロパガンダになっているのは確かだと思う」

不満、か。確かに今の世の中、暗いけど。



「それに、美形の人ばかりがここに集まっているのも、そうだと思う  
えば納得できるわ。……というより、それ以外の理由が思いつか  
ない」

「確かにね……でもそれが主目的じゃないよね？」

「そうでしょうね」

「じゃあ何のために？」

日羽はちよつと考え込んだ。

「……人体実験、とか」

その口から、気味の悪い言葉が吐き出された。

「黒塵の影響を見るための？」

「ええ。今では濃度が薄まったとはいえ、黒塵は未曾有の大災害。  
再発防止のため手段は選んでいられない……ということかもしれない  
いわね」

天使さまそのものはロマンチックな存在なのに、その存在意義を  
語る日羽の言葉は、ひどく現実リアリスティックで醜悪グロテスクだ。

人体実験。たとえ災害対策目的だろうと、黙って薬打って病気に  
してしまうなんてどうかしてる。これじゃ今までの天使さまたちも  
浮かばれない……。

……そうだ。

そもそもこれは、わたしたちだけの問題じゃない。一般のひとに  
知らせるよりも、まず当事者……つまり、天使さまたちが知るのが  
先じゃないか？

「そ、そうだね」

奈緒はその意見に同意してくれる。

「日羽はどう思う？」

「……え？」

考え込んでいて、聞いてなかったらしい。思いつめたような表情  
だ。

「無理もないかもしれないけど、そんなに思いつめないほうが」

「ああ、ごめんなさい、大丈夫よ。……それで、何だったかしら？」

「うん、まずは他の天使さまにこのこと、知らせるのが先かなって」  
「そう、ね」

そう言っただけ、日羽はまたすこし、考え込んだ。

「……いきなり全員に知らせるよりも、少しずつ広めていったほうがいいかもしれない」

「うん……そうだね。あんまり大きな騒ぎになって、病院側に知られちゃうとよくないよね」

「ええ」

とすると、わたしたちがよく知ってるひとからがいいだろう。

「まずは歌撫さまから、かな」

「そうね……」

「よし、じゃあ今から行こう。いいよね？」

頷く二人。

日羽の表情は、まだちょっと暗い。いや、奈緒もそうだし、わたしだってきつとそうだ。こんな状況じゃそれも当たり前なんだけど、日羽には何か心に引っかかっているものがあるみたいな感じで、少し気になる。

「少しだけ待ってくれる？」

そんな日羽はおもむろに立ち上がると、血の入ったマグカップを取って洗面台のほうに歩いて行った。

「あ、それ……これからも使うの？」

こういうのも何だけど、ちょっと気味悪いのでは……。

だけど日羽はあっさりしたもので、

「使うわよ」

そう言って、にやりと笑った。

「だって、わたしたちの血は、黒蜜なんだろう？」

「……よく覚えてるね」

それはわたしたちが初めてお仕事に行ったとき、わたしが子どもたちに言った言葉だ。

「だから平気よ。洗えばきれいになるわ」

につこりとわらって、蛇口をひねる。

あのときは何も考えないで黒蜜とか言ったけれど、今ではずいぶん皮肉に聞こえる。

「……まあ、でも」

日羽は、とつぜん真顔に戻ると、

「私はそういう甘いものは、余り好きじゃないんだけれどね」  
洗面台の上でマグカップを逆さにして、自分の血を捨てた。

### 3章、4

歌撫さまの部屋は、病棟の四階にある。造りはわたしたちの部屋と同じだけど、今ではあのひと一人だけで、その部屋に住んでいる。歌撫さまはベッドに座って、ぼうつと外を眺めていた。今日の空はそれほどきれいでもない。斑な雲が薄青く沈んでいる。

「きみたちから訪ねてくるとは珍しいね……」

緩慢に振り向いて、そう言った。

「儚ちゃんのことかな？」

いつも強気な歌撫さまには珍しい、気弱な微笑みだった。

「知ってたんですか」

「そりゃ、まあね。姿消す理由なんて、ここではあれくらいしかないし」

わたしは空いているベッドの一つに腰掛けた。奈緒が隣に座る。

日羽は立ったまままだ。

歌撫さまは、膝を抱えた。

「分かったでしょ？　ぼくらが、天使として、しっかりやってかなくちやいけない理由」

「……それは」

大切なともだちの死に恥じないように、とか。

遠くはない未来に死ぬ自分のために、とか。

でも。

「……歌撫さま」

「何？」

「もし」

「うん？」

「もしも、ですよ」

どうしてわたしは「もしも」なんて言うんだろう。

天使としてしっかりしなくちゃ、なんて話をされたせいだろうか。

これからわたしたちは、それを壊すための話をしようとしているから。

「天使病の、正体が……」

「天使病にはいくつかおかしいところがあるって？」

わたしは目を見開いた。隣に座る奈緒も身を固くしたようだ。

「知ってたんですか？」

「伊達に四年もここで過ごしてないよ。そんな話は毎年出るしね」

面白くなさそうな、いやむしろ、怒っているような調子で、歌撫さまは吐き捨てる。

「美形揃いだとか、病状の進行速度が……特に生翼までの時間が似すぎだとか、他にもいろいろ。くだらない。証拠なんか、何も無いに」

「証拠、」

わたしはそんな歌撫さまの気配に威圧されて、喉に言葉を引っ掛けてしまった。

代わりにそのことを告げたのは、驚いたことに、奈緒だった。

「証拠なら、あります」

歌撫さまがものすごい勢いでこっちを見た。見たこともないような、驚き、の形相。

「……何だって？」

その顔に驚いて、奈緒は少し腰が引けてしまったようだった。

だからわたしが代わりに、ついさっきわたしたちが日羽に見せてもらったことを話した。血を流してみせることはしなかったけれど。聞き終えた歌撫さまは、しばらく、蒼い顔で黙り込んでいた。

「そんなに……簡単なことだったのか……」  
ちいさくちいさく、呟いた。

信じてもらえたようだ。歌撫さまにも、もしかしたら思い当たる節があったのかもしれない。もし信じてもらえなかったら、今度はわたしが血を流すつもりでいたから少し安心した。

歌撫さまの反応は、無理もない。

血が証拠だなんて、知らなかったら分からない。ここでは血が出るような事故なんてほとんど起こらないし、天使さまの人数はとも少ない。さらに少しかり血がかかったくらいでは、あの変化は起こらないのだ。

…… 儂の容態が急変したときは、血が沢山出たけど。あれは、例外中の例外だったらしいし。

「わたしたちは、戦います」

わたしは静かに宣言した。

「歌撫さまも、いつしよに」最後まで言えなかった。

「それはできない」

大きな声、硬い、拒絶の言葉。

「…… どうしてですか？」

ようやく、それだけを言った。

「ぼくはね」

死人みたいに青白い顔に、死地に向かう兵士のような決意を浮かべ、

「死んでいった子たちのために、最高の人生を送って、ぼくも笑って、みんなの笑顔に囲まれて、死んでやろうって決めたんだ」

歌撫さまは、自分の想いを吐き出した。

「ぼくたちには、天使にはそれができるからね。…… きみたちがやろうとしてるのは」

急に話が自分のほうを向き、わたしはうろたえた。

「天使の生活を、壊そうとすることだ」

その通りだ。

そんなことは、分かっている。

いや、分かっていたはずなのに。

いざその生活を守ろうとするひとを目の前にして、

その余りに重い四年間を前にして、

天使さまを続けるということの、本当の意味を、わたしはちゃんと分かっていなかったのだと思い知った。

「……」

でも。

でも、だ。

分かっていなくても。いや、まだ分かっていないからこそ。

「僕は、たまたま病気になったんじゃないんです」

わたしたちは、退くわけにはいかないんだ。

「僕だけじゃない、わたしたちだってそうです。わたしたちは……  
これまでの天使さまたちみんな……、殺されたような、ものなんです」

歌撫さまはじつと、わたしの目を見た。怖かった。だけど目を逸らすわけにはいかなかった。

ふと、歌撫さまの目線が逸れた。奈緒と、日羽を見ている。二人もわたしと同じように、歌撫さまを見つめている。

心強かった。わたしはひとりじゃない。

「……わかった」

わたしはその言葉を聞いて、一瞬ほっとした。  
勘違いだった。

「手伝うことはできない。でも、せめて、今の話は忘れてあげる」  
歌撫さまは膝を抱えた腕の中に、顔を埋めた。

わたしたちは、動けなくなってしまった。ショックだとか。何とかならないか、とか。

すると、ずっと黙っていた日羽が、言葉を発した。

「一つだけ、聞かせてください」

歌撫さまは、顔を上げない。

「放っておけば、これから私たちと同じ境遇の子が生まれる。それでも、いいと言うんですか？」

歌撫さまは、返事をしない。

返事を、しなかった。

長い間そうしていたあと、歌撫さまは一言だけ、ぽつりと呟いた。  
「……出てって」

肩の羽根が、少し震えていた。

日羽は踵を返し、わたしたちだけに聞こえる小声で言った。

「……行きましょう」

わたしたちは静かにベッドから腰を上げると、音を立てないように入口に向かった。

後ろから聞こえてくる、か細い声。

「……ぼくの気持ちを、覆さないでほしい」

聞いたこともない、弱々しい声だった。

「あ……………」

病室に戻ると、わたしはばたりとベッドに突っ伏した。

めちやくちゃ疲れた……、精神的に。

まさか、こんなにはつきりと拒絶されるなんて思ってもみなかった。天使さまであるということは、わたしの予想を遥かに超えた重みを持っているということか……。

だけどわたしたちにも、譲れないものというのが、あるのだ。

「あとは浅川せんせくらいかなあ……………」

他の天使さまも歌撫さまと同じ気持ちかもしれないし、だいいち余り面識がないから話を聞いてもらえるかどうかさえ分からない。

「先生もきつと、駄目だと思うわよ」

日羽の声は冷たい。

「なんで？ 話してみないと分からないじゃん」

簡単に諦めるわけにもいかない。やれることはやらないと。

「……先生に話すのは、歌撫さんに話すのよりリスクが高いってこともあるわ」

「せんせがグルだつてこと？」

日羽は回答を避けた。わたしはせんせがそうだななんて考えたくないし、たぶん日羽も同じなんだろう。

でも……。確かに日羽の言うことは、一理ある。



……そもそも、誰がどこまで知ってるんだろう。わたしたちが真相に気付いている、ということをして「敵」に気付かれたら終わりなんだから、その辺りはつきりさせておきたいところではある。

と言っても、当たって砕ける方法しかわたしには思いつかない。

「う……………」

砕けちゃ困る。今のところ仲間は三人しかいないのに、率先して欠けるわけにもいかない。

「……少し落ち着いて、これからのことを考えましょう。捕まったらお終い、焦りは禁物だと思うわ」

わたしは一刻も早く、この馬鹿げた真実を暴いてやりたい、  
だけど今は、日羽の言う通りにするのが正解なんだろうな……。

結局、いい案は思い浮かばずに。

わたしたちは真実に気付いていることを隠すために、薬も点滴も、  
今まで通り続けることにした。

\*

平行線を辿った一週間後、日羽がとんでもないことを言い出した。

「テレビで告発するわ」

「え？」

わたしと奈緒は驚いて日羽の顔を見た。

「来週、私だけが生中継ライヴで取材を受ける予定が入ったから。そのとき」

「ちょ、ちょっと待ってよ。それは駄目だって言ったの、日羽自身じゃないか」

日羽の目は、本気だ。

「……玉砕する気？」

「もちろん、そんな気はないわ」

「じゃあ、どうするつもりなの？」

日羽は賢いひとだ。無謀なんて言葉は、似合わない。  
今も、きつとそうだ。

「目的は、告発そのものではないの」

でも、その考えはわたしには分らない。

「どういうこと？」

「目的は、ここの皆を、動かすこと」

「ここの皆……天使さまたちを？」

ええ、と日羽は頷く。

「どうやって……いや、それよりも、そんなことしたら日羽の身が危ないんじゃない？」

捕まって……二度と外に出られなくて……。

「承知の上よ」

「そんな」

日羽らしくない。

こんな風に、まるで捨て身みたいに、自分から虎の穴に飛び込むような真似……。

「私たちだけじゃ無理でも、ここの皆で一斉に動けば、きつとここから逃げられるはず。そこで今度こそ、本当の告発をするのよ」

「待って、だめだよ、日羽だけにそんな危ないこと……だいたい皆で一斉に動いたからって本当に逃げられるかどうか……。そんなあやふやな計画」

わたしは何としても、日羽を止めたかった。

「沙風」

でもそんな風に強い調子で名前を呼ばれたら、黙るしかない。

「誰かが、やらないといけないのよ」

じつとわたしの目を見て、日羽は告げる。

彼女の覚悟を。

「このままでは何もできない。壁に囲まれたまま、いずれ、私たちも儚と同じようになってしまう。だから、誰かが、壁に穴を開けな

ければならない。そして、真実を明るみに出すための、流れを作る。その役がたまたま、私だっというだけの話よ」

「でも……それなら、わたしも」

「だめよ。私がやろうとしているのは、ただの布石に過ぎない。それにこれは、私だけがやれば済む話よ」

彼女はいつでも、論理的だ。だけど、今回はかりは。

「でも、そんな、理屈で納得できることじゃない」

そう言っていると、日羽は、少し哀しげに目を伏せた。

「……私はずっと、動かなかった」

「え？」

「真実に気付きながら、ずっと傍観者のままだった」

「……日羽？」

「もう、そんな自分は、嫌なのよ」

日羽の目は鋭く、虚空を睨みつけていた。まるでそこに、自分の嫌う自分が見えているかのように。

「私はもう傍観者では居たくない。私は自分の手で壁を壊して、道を作っていくたい」

日羽の気持ちが、わたしを打った。

このひとはもうやると決めてしまったのだと、理屈ではなく、納得した。

気持ちは同じだ。夢のために。わたしたち自身のために。もう新たな天使さまを、生み出させない。

その気持ちをかたちにしようとしているひとを、どうしてわたしは止められるだろう。どうしてその想いに、応えないでいられるだろう。

「……分かった」

日羽の表情が和らぐ。

「日羽ちゃん……大丈夫、だよ」

不安そうな奈緒の言葉に、日羽ははっきりとした声で応えた。

「当然。無策でなんて、臨まないわ」

そこにあるのは、確信的な笑顔。

日野日羽は、冷徹な論理に裏打ちされた女だ。

だけど今回ばかりは、その笑顔はまるで、強がりみたいに見えた。それでも、わたしたちはやらなければならぬ。それがあやふやな、計画とは呼べないきつかけでしかないとしても。

何も変わらないまま死ぬなんて、できないから。

### 3章、5

日羽が単独インタビューを受ける日、すなわちわたしたちの戦いの決行日の朝。ヘリに乗り、発つ日羽を、わたしたちは見送る。

これから日羽は、わたしたちだけが知っている真実を、テレビカメラの前で口にする。

相手だって、これだけ大掛かりなことをしておいて、ばれないための対策を取ってないわけはないだろう。

だからたぶん、日羽は捕まる。

もしかしたら、もう会えないかもしれない……。

「日羽ちゃん」

奈緒は涙混じりの声で、日羽に抱きついた。

「また、……会えるよね」

日羽は奈緒の頭を撫でながら、しっかりと答えた。

「ええ。必ず」

口元には微笑みがありながら、でも目はちょっと悲しそうだった。

「沙凧も。元気だね」

まるで学校帰りにまた明日、と言つみたいな口調だった。

だからわたしは、余計に悲しい気持ちになってしまう。いや、また会える、と日羽は約束したのだ。だからわたしはそれを信じる。信じればいい。信じないといけない。

ああ、わたしはだめな人だ。また会えると信じているのに、どうして涙が出てくるんだろう……。

「日羽……」

「そんな顔しないで。私ならうまくやれるわ。私のことはよく知ってるでしょう？」

知ってる。日羽は賢い。

でも、こんなときに自信過剰な台詞を吐くなんてことは、知らなかった。

「また会いましょう。少しだけ痛い思いをするかもしれないけど、次に会うときは笑顔になってるわよ、きっとね」

まだ知らない日羽がいる。だからまだ、お別れには早すぎる。

「うん。絶対、成功させないと、いやだからね？ わたし」

「当然、そのつもりよ」

日羽の笑顔は力強く、すこしだけはかない。

そしてわたしたちは、そのときを待つ。

日羽が映るのは、ちょうどお昼どき。そのとき、動かすべき相手すなわち天使さまたちは、お昼ごはんを食べに食堂に集まっている。そして食堂にはテレビがあつて、それはいつも、天使さまの番組を優先的に流している。だから日羽の姿をみんなに見せるのに、特別なことをする必要は何もなかった。

これからのことを考える。すると、逆に、ここでのことが思い出されてきた。

あまり長い間いたわけじゃないけど、この病院にもずいぶんたくさんのお思い出ができた。だから、すこしばかり感傷的な気分が湧いてくるのだ。まるで、卒業式みたいな。

何か、やり残したことはあるだろうか。

奈緒は墓地セメタリに行った。でもわたしには、あの場所にそこまでの思い入れはない。

……やり残したことなんか、何も思い浮かばなかった。

だからせめて、みんなと過ごしたこの部屋を、記憶に焼き付けていくことにする。

入院してから今までに、随分とこの部屋にはものが増えた。最初ただの病室でしかなかったこの部屋は、少しずつ時間をかけて、わたしたちの部屋になっていったのだ。

これからわたしは、ここを出ていく。もう二度と、戻れないかもしれない。

日羽の机は、整然としている、というより必要最低限のものしか置かれていない。それなのに本棚には本が納まりきらず、床にまで溢れ出しているのがすこし可笑しい。

奈緒の生活空間は、女の子らしくファンシーだ。机の上からベッドの周りまで、大小さまざまなぬいぐるみで溢れていてとてもかわいらしい。

わたしの場所は散らかっている。どうも整理が苦手なのだ。でも趣味らしい趣味を持たないわたしは、そもそもものが増えないので辛うじて散らかり具合が致命傷<sup>レッドゾーン</sup>に達するのを免れている。

そして、

居るべきもうひとりが、居ないのだ。今、そこにはただ、白くてもがらみどうの空気が漂っている。

「……儚」

ここに儚が居たことを示す痕跡は、今はもう、たった一つしかない。

それは、キャンバス。奈緒の場所にはぬいぐるみのほかに、布がかけられたキャンバスがある。それはあの子が少しずつ描き続けていた、そして最近は全然進んでいない、儚の絵だ。奈緒は墓地に行く前、それに布をかけていった。

もう描けないかもしれない、儚の絵。

せめて完成したところを見たかったな、と思う。奈緒、うまかったのに。

でももう、そんな時間はない。

最後にもう一度だけ全体を見渡して、わたしは部屋を後にした。

緊張を胸に　　食堂へ。

天使さまが続々と集まってくる。歌撫さまもいる。みんないる。奈緒とわたしは緊張の余り、食事が喉を通らない。

これから自分たちがどれだけ無茶なことをしようとしてるのか……

…こんな状況でまともに食事できるひとがいたら、そのひとはよほどの偉人か、ただのおばかさんだ。

隅っこで二人、明らかにダークな空気を発散させるわたしたちに對し、他の天使さまの様子は当然ながらいつも通りの明るいお昼。このかけがえない日常風景を、今からわたしたちが破壊してしまうと思うと、胃がきりきり痛んでくる。

でもやらなきゃ。

というか、もうとっくに賽は投げられてる。日羽によって。

わたしはぎゅっと、ポケットの中のお守りを握り締める。

そうして、食堂の賑わいも頂点に達する頃。

テレビに、日羽が映った。

「さて、今日は新しい天使さまの中でも、特に知的な美しさが光る日野日羽さまにお話を伺いたいと思います！」

いつそ場違いなくらい明るいレポーターさんの声に、心臓を鷲掴みにされたような気分になる。

ついに来た。

食堂の一角を占めるばかりでつかいテレビの中に映る、誰よりもよく知ってる天使さま。

白くて長い髪、知的な眼差しの、無二の友たち。

「日羽さまはご両親が学者さんの、頭脳派の家系にお生まれのとことですが……」

「はい。今日は私のほうから、天使病について話したいと思います」  
レポーターさんが固まった。  
急すぎる話題転換。

それとも天使病という単語のせいか、  
食堂が、少し静かになった。

「……」

日羽は少し無言で、まるでこちらの様子を確かめるように、カメ



ラ目線になった。

「ええっと……？」

困惑した、レポーターさんの声。

「天使病は……」

日羽がそう言った瞬間、食堂の喧騒が、完全に消えた。

誰も喋らない食堂に、ボリウム最大の日羽の声が響き渡る……。

その手には、喧騒をかき消した最大の原因、

カッターナイフが握られている。

「作られた病よ」

カメラの前にはつきりとかざされ、何の言い訳もきかない程にはつきりと、それは映った。

カッターナイフが手首に当てられ、ゆっくりと　深く　引かれる。

彼女の手首に刻まれる、三本目の傷。

じわり　血が、黒い血が溢れて手首を伝う。

レポーターの悲鳴。少し遅れて、画面の外からの怒号。

それら全てに勝る大声で、日羽は叫んだ。

「天使病なんて病気はないわ！　治療と称して黒塵を体に入れられ、私たちは　」

そこまでだった。

画面はノイズに塗り潰され、すぐに放送事故を伝えるそれに切り替わる。

食堂は、おそろしい静寂に包まれたままだった。

しばらくの間、誰も、何も喋らなかった。

そこに、一言。

「　やって、くれたね」

ただ一人、立ち上がる天使さま　歌撫さまの声が、水面に一滴黒インクを垂らしたように、静かな食堂に染み渡った。

歌撫さまは蒼白な顔で、凍りついたテレビ画面を、凝視している。不意にその顔が、わたしたちのほうを向いた。

「きみたち……やってくれたね」

じつと、おそろしい目付きでわたしたちを睨みつける歌撫さまに  
対抗するように、わたしは奈緒と手を握り合って立ち上がった。

「はい。……わたしたちが、やりました」

食堂の全ての視線が、わたしたちに集中する。ものすごい重圧だ  
った。

「どうなるか、分かってやったの」

「……はい」

「とんでもないことを、してくれたね……」

歌撫さまの視線はわたしたちに固定されて剥がれない。

「こんな……、こんなことをされたら」

歌撫さまは、何かに耐えるように、絞り出すように、言葉を紡ぐ。  
目の前で、あんな風に、血を流されたら……っ

震えを抑えるように、自分の肩を抱いて。

「こんな、気持ちになったらっ……！」

大きな痛みに耐えるように、大声で叫ぶ、

「……動くしか、ないじゃないか！」

まるでその言葉を合図としたみたいに、天使さまたちが、一斉に  
立ち上がった。

一様に蒼い顔をして、でも残らず覚悟を決めたような眼差しで。

「ぼくはきみたちを、恨むよ」

まるで泣いてるみたいなの、歌撫さまの声が胸に刺さる。

「……これから、どうするつもり？」

「ここから出ます。出て、本当のことを言います」

「分かった」

歌撫さまは踵を返して、食堂から出て行った。他の天使さまたち  
もそれに続く。

わたしは人知れず、胸をなでおろす。心中はどうあれ、日羽の目

論見、天使さまたちを動かすことには成功したようだ。

日羽の言葉通り。

歌撫さまは、あと一押し、きっかけさえあれば行動を起こすだろうと、彼女は言った。前に歌撫さまに本当のことを言ったときの様子から、そう判断したらしい。曰く、弱々しい声色と態度は、迷いの表れ。

日羽の目は、確かだった。

日羽は確かに、彼女にできる行動を起し、そしてやり遂げたのだ。彼女はもう、傍観者なんかじゃない。

そして次は、わたしたちの番だ。

「行こう、奈緒」

「うん」

頷きあつて、食堂を出る。

そのまま外に出ようとしたりわたしたちは、ところが、棟の出口辺りで足止めを食うことになった。

天使さまたちと、制服を着た警備員の男のひとが揉み合ってる。

(……そんな、もう来たの?)

日羽の行動を知った病院側が、わたしたちの動きを警戒するだろうとは考えていた。だけどこんなに動きが速いのは、想定外だ。

取り押さえようとする警備員の怒声と、抵抗する天使さまの悲鳴が混じって騒然となった、病棟の出入口。

警備員の数は二人。でも、これからもっと増えるだろう。

取り押さえられそうになってるのは、集団の先頭に居た、歌撫さまだ。

「放せっ！ 放せったらっ！」

必死で抵抗しているけど、女の子の腕力じゃ大の男の手を振り解けない。

潰される。

せっかく天使さまたちを動かすことができたのに、その流れが、せき止められる。

だけど、そんなのは、とっくに予想済みだ。

「奈緒……」

「……うん」

わたしたちはポケットの中のお守りをぎゅっと握り締めたまま、混乱する天使さまたちを掻き分け、警備員の矢面に立った。

わたしは大声を張り上げる。

「こつちを見て！」

警備員だけじゃなく、天使さまたちまでわたしを見る。

視線が集中する。

その真っ只中でわたしは、持っていたお守りを、>使用<する。  
日羽のことを想う、

彼女はこのために、三度も手首を切って、痛い思いをした。

三度もだ。

日羽だけに、そんな痛い思いは、させない。

お守り、すなわちカッターナイフを、わたしは手首に当てる。

見せ付けるように、はつきりとかざし。

決意と覚悟と力を込めて。

日羽が教えてくれた、わたしたちの、わたしたちだけの武器を、わたしは、体の中から取り出した。

「この血はっ、黒塵から出来ているんだ！」

切り裂く激痛、手首を中心に脈動する、鋭い寒気。脂汗が吹き出る。視界が少し狭まる。でもそんなの、大したことじゃない。

溢れる黒血で手首を濡らし、わたしはそれを、歌撫さまを押さえる敵、警備員に向けて突きつけた。

「これがつけば、あなたも病気になる！」

呆気にとられてわたしの自傷を見ていた警備員は、その言葉を聞くなり顔を蒼白にして飛びのいた。解放された歌撫さまは、機を

逃さずその場を離れる。

「ほらっ！」

そのまま詰め寄ると、小さく悲鳴を上げてその場から逃げて行った。思ってた通り、いやそれ以上の、黒塵がもたらす病気への恐怖が、その顔には貼り付いていた。

まるで、化物を見るような顔……。

もう一人の警備員は、同じく泣きながら腕を切った奈緒が追い払っていた。

「……沙凪くん、奈緒くん」

歌撫さまが、乱れた天使服の裾を直しながら呟いた。視線はわたしたちの腕に向けられている。

今でもまだ蒼い顔で、歌撫さまは少しの間、じっとしていた。と思うと、わたしの手からカッターナイフをひったくる。

「きみたちにはわかり、いいところ持ってかれるわけにはいかない」  
止める間もなく刃を出して、

「ぼくだって……！」

歌撫さまは、腕を切った。

「うっ……！」

顔をしかめる。

「痛いな、もう……！」

見る見る黒く染まる腕を押さえて、歌撫さまは悪態をつく。すこし、涙目になっていた。

「点滴の比じゃないぞっ……」

当たり前ですよ……。

見ると、何人かの天使さまは、わたしや奈緒のカッターナイフを受け取って自分の体を傷つけ、血を流していた。

「……行くぞっ！」

歌撫さまの号令一下、天使さまは外へ向けてあふれ出そうとしたが。

「待ちなさい」

背後からの声。わたしたちは一斉に振り向いた。

「浅川、せんせ」

廊下を、わたしたちに向けて駆けてくる、わたしたちの教師、浅川せんせ。

せんせはわたしたちから少し離れたところで、立ち止まった。

歌撫さまがせんせに近いところまで出てきた。

「何しに来たの？ 先生」

棘のある声だった。

「もし、邪魔しに来たって言うなら……」

「場合によってはね」

せんせは感情の掠れた声で、そう言った。

と思えば、わたしや奈緒、歌撫さまの腕を見て、哀しそうに顔を歪める。

「全く……馬鹿なことを……」

このひとは味方だ、と、わたしは直感的に思った。だけど本当にそうかどうかは、分からない。歌撫さまは警戒を解いていない。

「一つだけ、確認させて」

せんせはわたしたちの傷から、目を逸らさない。

「……日野がテレビで言っていたこと。本当、なのね？」

よく見ると、せんせの体はちいさく震えていた。顔色も悪い。

「本当です」

わたしは、はっきりと答えた。

「証拠もあります。わたしたちの血に植物を浸せば……」

せんせはじつと、わたしの目を見た。

「……分かった」

「せんせ……」

「あなたたちは単なる思い込みでこんなことをしてるわけじゃない。そうね？」

「そうです」

わたしはしっかりと頷いた。

「分かった……、私もあなたたちと、一緒に行く」

「先生は、天使病の本当のことは知らなかったんだね」

「知らなかったわ……今更こんなことを言っても何もならないけど、知ってたら、止めてた」

せんせの顔が苦しげにゆがむ。

「……こんな……馬鹿なこと」

やっぱりせんせは、わたしたちの味方だ。

「あなたたち、これからどうするつもりなの？」

「外に出ます。出て、天使病の真実を世の中に知らせます」

「そう……分かった。私がヘリで連れていくわ」

願ってもない申し出だった。

せんせの協力によって、目の前に明るい道が開けたような気がした。逃げると言っても、実際のところ、山の中を走って行くのはあまり現実味がなかったし。

「ねえ、行くなら早く。もたもたしているとどんどん人が集まってくる」

「は、はい」

歌撫さまの焦った声に急かされ、わたしたちは今度こそ、外へと溢れ出した。

目指すはヘリの発着場。警備員が現れては行く手を遮るけど、わたしたちは血塗れの腕をかざして、彼らを押しのける。

怒涛のように。

わたしたちは、白い波になった。まっさらな体に、黒い毒を塗りつけて。怒りと哀しみを原動力に。全ての間違いを飲み込んで、粉々に砕こうと。

わたしたちは、走った。

### 3章、6

ある分岐路に差し掛かったとき、きゅうに歌撫さまが進路を変えた。

「歌撫さま！？　へりはそっちじゃ」

「分かってるよ！」

怒鳴り返されて、わたしは怯んだ。

歌撫さまが行こうとした先にあるものは……。

「年少病棟……？」

「そうだよ。きみらの考えなしの行動のせいで、ちいさい子たちがおかしい扱いを受けるかもしれないんだ」

わたしは大きな衝撃を受けた。歌撫さまの言う通りだった。

「だからぼくは、あの子たちのところに行く」

「わ、わたしも」

「ばっかっ！」

反射的に歌撫さまについて行こうとしたわたしは、一喝されて子どもみたいに首を竦めた。

「きみらが行かなくて、誰が行くんだ」

歌撫さまは真っ直ぐにわたしを、奈緒を、睨みつけている。

「言いだしっぺなんだから、しっかり責任取ってよ」

歌撫さまは真っ青な顔で、でも乾いてきた血を補充するために、また腕を切った。

「痛い……！　この痛み、無駄にしたら、許さないからな！」

警備員がまた、迫ってくる。一体どこからこんなに湧いてくるのかと思うほどの数だ。

「ほら、早く行って！」

追い払うように、大きく腕を振る歌撫さま。

「沙凪ちゃん……」

奈緒に袖を引かれる。



彼女こそ、年少病棟にいる子どもたちのことが心配なはずだった。なのに先に行こうとわたしを引っ張っている。

奈緒には、自分のやるべきことがちゃんと分かってる。

わたしは……。

「……行こう」

まだ少し後ろ髪引かれる思いがしつつも、わたしは歌撫さまと、歌撫さまに続いた天使さまたちに背を向けて走り出した。

と、数歩も行かない内に、その歩みは止められた。

「放せ……っ！」

歌撫さまの苦しげな声が聞こえてきたからだ。

思わず振り返ると、年少病棟のほうに向かった天使さまたちが、警備員に取り押さえられているのが見えた。

「なんで……」

今までの警備員全員、血を突きつければ怯んで道を開けたのに。どうして急に？

（あ……）

警備員たちの向こうに、白衣を着た大人が見えた。警備員たちの指揮を取っている。何か叫んでいた。

遠くて全部は聞き取れない……だけど、断片から、何を言っているのか分かった。

曰く、患者の体には、治療のための抑制剤が点滴されている。

多少患者の血液に触れたくらいでは、黒雨のような病は発症しない。

それはわたしたちの武器を無効にする、最悪の情報だった。

その言葉に力を得て、警備員たちは次々と天使さまたちを取り押さえていく。

「そんな……」

腕を取られ、地面に組み伏せられる天使さまたち。

苦しそうな、悔しそうな顔がいくつも地面に押し付けられる。

交錯する悲鳴と怒号。

絶望的な空気が流れる。

だけど、そのとき。

歌撫さまの様子が、変化した。

「うつ……」

それはもしかしたら、取り押さえられ叩き伏せられるよりも、もつとずっと深い絶望かも知れず。

「うつ、うつ」

だけど確かに、どこにも行けなくなりかけた、この状況を打破するもの。

「う、あ、ああ……っ！」

急速に歌撫さまのシルエットが肥大する。

誰もが口を噤む。

一瞬のうちに静寂が満ちたその場、  
ちきちきと、ちきちきと、枯木が折れような不吉な音色が、虚ろに響く。

歌撫さまの肩から生える翼の色は、絶望色、すなわち黒。

「ああああ……ッ！」

絶叫と共に、

「ひっ……！」

歌撫さまの翼から大量に、真っ黒い液体が飛び散り、

「ひああああ……ッ！」

歌撫さまを取り押さえていた警備員がそれを頭からかぶり、パニックを起こして飛びのいた。

夢と、同じ症状。

天使病の、末期段階　黒変。

「はっ、はっ、はっ……」

浅く速く、繰り返される呼吸はちいさいはずなのに、わたしの鼓膜を強烈に打ち据える。

ゆつくりと　歌撫さまは、黒い翼を背負ったまま、立ち上がった。

天使さまたちは歌撫さまに寄り添い、今にも折れそうな体を支える。

敵は慄き、遠巻きに退いた。

「はっ、はっ、ハ」

今や全身血塗れの、真っ黒な天使さまになった歌撫さまは、聞いたこともないほど悲痛な声で、絶叫した。

「近付くな……！！」

早く、行けっ！！」

「はっ、はいっ！」

それが届いたかどうかは、分からない。

反射的に返事をしたわたしは、奈緒の手を引いて、歌撫さまの声に、姿に、背中を押されるように駆け出した。

歌撫さま。歌撫さま。歌撫さま。

ごめんなさい。こんなことに巻き込んでしまってごめんなさい。

わたしたち、やります。きっとやり遂げてみせます。

だから、どうか、

どうか死なないでください。

ヘリの発着場まで辿り着いたのは結局のところ、わたしと奈緒と浅川せんせの三人だけだった。ほとんどが歌撫さまと一緒に年少病棟に行ってしまったし、少しだけわたしたちについてきてくれた天使さまも、みんな取り押さえられてしまった。

逃がしてくれた天使さまたちが、どうなるか。歌撫さまの容態や、日羽がどうなったかも心配だ。

だけど、それは今のわたしにはどうにもできないこと。

できるのは、わたしたちが置かれた状況を正しく伝え、天使病なんでいる馬鹿げた病気に罹るひとを、もう二度と生み出さないよう

にすることだけだ。

言うなれば、わたしたちの希望を乗せて、へりは飛び立った。

「……話はいったわ」

しばらくの間、外と連絡を取っていた浅川せんせがそう言った。外とはすなわち、民放局だ。邪魔が入らず、大勢の目に触れ、かつ即時性のある情報伝達手段として、せんせが民間のテレビ局を提案してくれたのだ。

せんせの言葉に、わたしたち二人はしっかりと、頷く。

「私に出来ることは、もうお終い」

「いえ、十分過ぎるくらいです……ありがとうございます、本当に」

奈緒と一緒に、お礼を言う。

偽らざる気持ちだった。

わたしは、もしかしたら浅川せんせが敵かもしれないと思い、この話を話しに行かずに行動を起こしたことを後悔していた。

天使病患者の教師役を買って出てくれたのは、浅川せんせだった。患者が天使さまとして外に出れるよう病院側に無理を押し通したのも、せんせだった。

いつでも浅川せんせは、わたしたちの味方だったのに。

最後に信じ切れなかった、自分が嫌だ。

「ごめんなさい、せんせ」

「何を謝ってるの？」

「色々です。……疑っちゃったこととか」

浅川せんせが笑ったのが、気配で分かった。

「いいのよ」

「でも」

「むしろ私は、あなたたちが自力でここまでのことをしでかしたことに、尊敬の念すら抱いているのよ」

せんせに尊敬されるほどのことなんて、何もしてない。

「それに、気が付かなかった、私にも罪はある」

「せんせは悪くないです!」

少しの間、せんせは黙った。

「……今からあなたたちがやろうとしてることは、あなたたちにしか出来ないこと」

わたしの言葉に答えずに、せんせは続けた。

「こんな状況に対応する術は、教えられなかったけど」

悔しそうな声だった。

「……あなたたちは、間違ってない。胸を張って、告発しなさい」  
かされる、その声に、

「はい」

わたしたちは、はつきりと返事をした。

真っ赤に染まる夕空の下を、ヘリコプターは飛ぶ。

今度こそ、邪魔の入らない状況で、みんなに天使病の真実を伝えるために。

### 3章、7

わたしと奈緒は二人で、テレビカメラの前に座った。

大きなカメラ。今からこれに向けて、話さないといけない。

天使さまとして何度もテレビに映り、インタビューも受けてきたけど、今からしようとしてることとはわけが違う。

ライヴ生中継で、わたしたちは告発する。

日羽がきっかけを作ってくれて、

歌撫さまや他の天使さま、みんなが立ち上がってくれて、

浅川せんせに連れてきてもらって……。

みんなが身を挺してくれたお陰で、わたしたちは今ここに立てている。

テレビ局側の対応もずいぶん速かった。今まで天使さまに関しては、スキャンダル国営放送《NHK》の独占状態だったせいかもしれない。内容が内 容だし……。

わたしたちの目の前で、着々と、目まぐるしく、準備は整っている。

不安だ。

うまく言えるのかどうか。

みんながしてくれたことを、ちゃんと活かせるのか。

どうしようもなく背中が震える。緊張で喉が強張る。

羽根が重くて潰れそう。

はあ……、と、たまらず特大のため息をこぼしたわたしの手が、そつと握られた。

「……奈緒」

奈緒の顔は真っ青だった。きつとわたしと、同じ気持ち。

「沙凼ちゃん」

ちいさくて形のいい唇が、わたしの名を呼ぶ。

わたしは、奈緒の手を握り返した。

確かに不安で、緊張しすぎてお腹痛いけど、でもわたしは今、ひとりじゃない。たいせつな友だちが隣にいて、手を握ってくれてる。初めからずっと、共に居た友だち……。奈緒がここに居てくれて、良かった。大丈夫。わたしは頑張れる。

そして準備は整った。

撮影開始の合図が、今　下された。

\*

「こんにちは、みなさん……」

まず、心を落ち着けるために、わたしは何でもない挨拶を口にした。

「今日は、みなさんに、わたしたちの……天使さまのことを、話したいと、思います」

カメラから目を外して、奈緒を見た。奈緒もわたしのほうを見た。カメラがなんだか、おそろしかった。

「今日の昼間、わたしの友だち……日羽が、テレビに出ていたのを見てくれたひとも、いると思います」

スタジオはだだっ広く、今は放送内容ゆえに余分なものが何もなくて、だから余計に孤独感が煽られる。

「……日羽の言ったことは、本当です」

わたしは奈緒の身体を、ほとんど抱くように寄せながら、言った。「天使病は、作られた病気。天使病なんていう病気は、本当はないんです」

血に塗れた、自分の左手をカメラの前にかざす。

奈緒も同じように、血に塗れた腕を見せた。

「わたしたちの血は、赤いというより……黒いです。黒雨と、同じ

です。黒塵がわたしたちのからだの中に入って……そのせいで、わたしたちの血は、黒く染まったんです」

喋りながら、わたしの中に、色々な想いが湧いては消えていく。

初めは、天使病に罹ったなんて、ただの災難だとは思ってなかった。病気で、入院で、しかも面会謝絶だったから。

でも、このみんなに出会えて、天使さまに対するわたしの気持ち、すこしずつ変わっていった。

着実に進行していく症状、刻々と流れる時間が怖かった。

セメタリ墓地の大きさに、圧倒されたこともあった。

でも、みんながいたから、やってゆけた。

そして、みんなで羽根が生える痛みに耐えて。わたしたちは一緒に、天使さまになった。

そう、やつと、なれたのに。

みんなで、ずっと幸せなまま、天使さまをやリたかったのに。

そんなことさえ、叶えられずに。

わたしたちは、大切なともだちと、離ればなれになってしまったんだ。

もう、夢には、会えない。

胸元から、ひう、とちいさくしゃくりあげる声が聞こえた。

奈緒が、泣いていた。

それを見たわたしも、鼻の奥がつんとなって、喉の奥から詰まるような痛みがこみ上げてきた。

視界がぼやける。

奈緒のからだを、ぎゅっと抱きしめた。

「夢は……真っ黒になって……わたしたちの病室から、運ばれて行って……」

それで、戻って……来なかった……です」

涙が、どんどん溢れる。うまく喋れなくなってくる。



「……返せとか、治せなんて言いません。そんなこと言っても誰も、何も戻って来ないし……でも」

わたしは頑張って涙を止めて、きつとカメラを睨み吸えて。今、一番言わなければならぬことを、一生懸命に喋った。

「でも、これからのことに対しては、何も言わないなんて、できません。だから、はつきりと言います。

もう二度と、新しい天使さまは、生まれなくて欲しい。もうわたしたちと同じ、ありもしない病気にされて死んでしまうような子は、生まれなくて欲しいんです。

わたしたちの身体をこんな風にした人たちを、わたしたちは、許しません。その人たちのしたことの証拠が、ここにあります」

わたしは、血塗れの腕を突きつける。

左手を、胸に当てて、はつきりと示す。

「わたしたちの身体が 証拠です」

言えた。

ちゃんと言えた、と思う。

わたしはわたしにできることをやれた。

これで、いいよね？ 儚……日羽……歌撫さま。

わたしちゃんと、できたよね？

「ね、奈緒……これでいいよね」

わたしは奈緒にだけ聞こえる小声で、そう確認した。

奈緒は泣き腫らして、うさぎみたいに真っ赤になった目でわたしを見ていた。

その瞳は、だけど、何かを訴えるみたいに揺れていた。

「沙風ちゃん……」

ちいさく、わたしを呼ぶ。何か、言い忘れたことあったのかな……

あ、そっか……。

「待ってください」

わたしは撮影を止めようとしたスタッフのひとを制止した。

「まだ、言うこと、あります」

スタッフのひとは頷き、わたしの発言を促した。

そう、まだいいことを言っただけだった。

わたしたちは確かに、望まずに病気にさせられた。それは許せない。

「だけども……」

「わたしたち、天使さまのお仕事は、大好きです」

袖を掴む奈緒の腕に、ぎゅっと力がこもる。奈緒は少しだけ微笑んで、わたしを見ていた。

それは、わたしの、偽らざる気持ちだった。

初めはぴんと来なかった。

ただ流されるままに天使さまになることにした。

だけど、みんなと一緒に天使さまをやっている内に、わたしの気持ちは変わった。少しずつ、少しずつ変わっていった。

今ならわかる。

断言できる。

わたし、天使さまが好きだ。

「暗かった表情が、笑顔になるとき。みんなのよろこぶ顔が、わたしは好きです。天使さまになれて、初めて知ったこの喜びを、わたしは手放したくない。この手で行えることを、大切にしたい。たとえどんな結果になっても、わたしは、白くてやさしい、天使さまのままでいたいです」

奈緒と二人、頷き合う。

許せないことがあって、わたしたちはそれを壊そうとした。

だけど、何もかもを壊したいわけじゃない。

守りたいものも、ある。

みんなを強引に巻き込んでおいて、それはちょっとわがままかも

しれないけど。

それでもわたしは、やっぱり、天使さまでいたい。

終

終　　夕空の下、天使さま。

結論から言うと、わたしたちの行動は、しっかりと実を結んだ。

日羽がきっかけとなって天使さまたちが立ち上がり、わたしが奈緒と一緒にテレビで告発した一連の事件によって、天使病の真実は余すところなく、世間の知るところとなった。正確に言うとなたしの告発の後にも色々（警察の不祥事発覚とか政権交代劇とか）あったんだけど、その中心にいたのは天使さまではなく、政府の息がかかってない医者たちだとか、人権団体のひとだとか、世論だとか、警察だとか、そういう人たち。まあ少しからだを調べられたりはしたけど……その詳細にはわたしはあまり、興味がない。

このことについて重要なのは、ひとつだけで。

つまり、わたしたちの願いは、叶えられたので。

もう、白い天使さまは、生まれないのだ。

単身捨身の自傷行為で突破口を開き、テレビ局で囚われの身となった日羽は、何だかんだで無事だった。その場で取り押さえられはしたものの、直後にわたしたちが起こした事件のせいで警備員に一時待機の命令が飛び、更にわたしの告発を契機に、捕えておくのは無駄だと説得、自力で解放させたらしい。

このひとは別にわたしなんかは何もしなくても、勝手に何とかしたんじゃないだろうか。

「沙凼、かつこよかったわよ」

その本人は今、目の前でにやにや、わたしを見ている。

「天使さまのお仕事、大好きです　なんて、私胸を打たれたわ」  
わざわざ身振りまでつけ、告発したときのわたしの真似をしてく

れるこのサディスト女を何とかしてほしい。

ああああ恥ずかしい……あのときはへんなテンションになっちゃって心の赴くまま喋ってたから、いつもは絶対言わないようなことを言っちゃってたのだ。一体これからどれほど、あのことをネタにいじられるのやら……。

でも、不安ではありつつも、日羽が無事だったのは素直に嬉しい。

事後、わたしたちは入院生活を続けることになった。場所は元と同じところだけど、普通の病院みたいに部外者のお見舞いがオーケーになった。……と言っても山奥だし、更に元々身寄りのないひとが天使さまに選ばれてたという事情もあり、お見舞い客はほとんど訪れない。外部への連絡も可になったから久々に美加子と話をしたけど、すぐにお見舞いに来る、ということには流石にならなかった。食事は、残念なことに、普通になってしまった。理由は単純で、予算のせいだそう。今まで滝のようにお金を下ろしてた今回の黒幕、政府がひっくり返ってしまったので普通の待遇になるということ。無駄にお金のかかった部分は、それなりにコストパフォーマンスを重視したかたちになっていくということだ。

ちなみに、敷地内の楽園のような庭園は、維持されるそう。天使さまを使った人体実験の副産物として、植物にも効く黒塵効果抑制剤が完成していたらしい。この技術は広く公開され、今後街には少しずつ緑が戻っていくでしょう、という話をわたしはニュースで聞いた。

そう、植物用があるということは、当然人間用の抑制剤もあるのだ。だからそれを使って、今度はわたしたちの、本当の治療が行われる。

もしかして髪の色とか、肩の羽根とか、元に戻るのかなと思ったけど、そうはならなかった。残念なような気もするし、このままでいいような気もする、複雑な気分。

でも薬を打っている限り、症状が悪化することはないでしょう、と言われた。

天使病が死病なのは、もう過去の話になったのだ。

それで。

「お爺ちゃん、元気にしてますか？」

「おおー元気だあ。天使さまが来てくれたんだから二十年は寿命が延びた気がするぞう」

そう言っただけのお尻に手を伸ばすお爺さん。別に寿命延びなくても元気じゃないですか、むしろ延びた寿命をわたくしが削ってやるつか……いやだめだっ、他の天使さまが見てる。天使さまは慈愛の精神、南無……じゃなくて。

「沙凼ちゃん、笑顔、笑顔」

奈緒に小声で背中をつつかれた。いや、笑顔のつもりなんだけど。「あおすじ」

日羽がぼそつと一言。気付けばえろ爺さん、引いてしまってます。これはいけない。

「お爺ちゃん、はい、あーん」

むいていた林檎を差し出す。満面の笑顔、これで完璧！

「沙凼ちゃんそれナイフ！」

「え？」

「ナイフとフォーク間違えてるから！」

「お、おお」これはうっかりさん。

「おおじゃなくって！」

奈緒に林檎ごとナイフを取り上げられた。

「わ、わはは、わっははは、お嬢ちゃんお茶目だなあ！」

笑ってないで爺は少しくらい反省してください。

というわけで。

わたしたちは変わらず、社会貢献している。結局、わたしたちの生活で変わったところなんて、ほとんど何もなかったのだ。天使さまはまだ、天使さまである。テレビにも出る。むしろ人気は前より、盛り上がったかもしれない。

でもたぶん、それは一時的なことだ。

人気なんか関係ない。わたしは今、自分の意志でこうしている。恥ずかしいからもう言わないけど、天使さまが好きでいる。

それがたぶん一番だいじなことで、それだけでいいんだと、そう思う。

\*

「あのとときの沙風ちゃん、ちょっと怖かったよ……」

最近どんどん口数が増え、しっかりしていつてる奈緒に、わたしは怒られっぱなし。

「ナイフ突きつけるなんて……」

「そのうっかり加減がまた、沙風の魅力なのよ」

日羽がしたり顔で説明する。天然はかわいって言いたいのか。

「あら、不満？」

心底不思議そうな顔。どう見ても作ってるけど。

「こ、これからはもう少ししっかりしますよ」

くちびるを尖らせて反論するけど、どうしても弱いわたし。

一時はどうなることかと思ったけど、病室でまた、こんな風に他愛無いやりとりができて本当によかったと思う。食事グレードダウンは不満だけど、最初に予想してた内容に比べれば、基本的には文句のない結果だ。

「テレビでお話したときは、すごかったのに……」

奈緒がナチュラルにわたしの急所を突き刺した。この子こそ天然。「そうそう」サディスト女、日野日羽が喜悦に歪んだ表情で相槌を

打つ。このひと本当にこの話が好きだな。「白くてやさしい、天使さまでいたいのよね」

そう一字一句覚えてるんだよこのひと！ 陰湿だつ。

「天使さまは、慈愛のこころ……」

奈緒がぼけつと呟く。わたしはさらに恥ずかしくなる。  
かくなる上は。

「ね、ねえ、助けてよ、」

「 儚」

「私も沙風は、格好いいと思うわよ？」

ふんわり花咲くように、お人形さんみたいにきれいな天使さまが、ベッドの上で微笑んでいる。

「いやあ、ぼくもあれはすごく良かったと思うよ。切々と、涙ながらにぼくらの悲境を訴える……ひとりの立派な天使さま！」

少年みたいな口調の、だけど誰より女の子らしい容姿の天使さまが、その隣で大げさに頷いている。

「いやそれフォローになってませんから！」

突っ込みつつも、こうしてまた和やかにお話ができることを、わたしはろくに信じてもない神さまに感謝したい気持ちだった。まあいいよね。一応「天使」だし。

そう、儚も、歌撫さまも、ちゃんと生きてる。末期発作で黒くなった羽根は、外科手術で取り除かれ、きれいになくなっている。症状に関しても、ちゃんとしたお薬を打ち始めているせいか、とても安定している。

二人の手首には、黒いバンド。まだ安静にしてなきゃならないけど、わたしたちと同じ白いバンドに戻る日は、そう遠くないという話だ。

あの日、発作を起こした儚は、末期患者のための緩和ケア病棟に運ばれていった。そこは当時立入禁止だったから会いに行くことも



できず、結局再会できたのは、わたしたちが起した事件の後だ。  
歌撫さまも、同じく元気。

また、みんなで、天使さまができる。

これ以上は望むべくもない、すてきな結果だと思う。

「ところで、あそこのあれって、奈緒の描いた絵かしら？」

ふと、夢がそんなことを言った。

「あつ、うん」

慌てて奈緒が、病室の隅に立てかけておいた絵を取りに行く。

「やっと完成したから、見てもらおうと思って……」

布に包まれたそれを両手で抱えて、奈緒はぱたぱたと戻ってきた。  
そして夢のかたわらに座り直すと、ゆっくりと、包みを解いていく。

「わぁ……」

ちいさく歓声をあげたのは、誰だったか。

だいじに額に入れられた、水彩画。

淡い色彩のやさしい絵。

本物の純白の翼を生やした天使さまが、ゆるく目を閉じ、夕空の下で微笑んでいる。

輝く天使の輪を戴いた、白い髪、夢の絵だ。

「素敵な絵……」感極まったように、夢が呟く。

「ほう、うまいね」歌撫さまが感心する。

「本当、才能あるわよこれ」日羽も掛け値なしに褒める。

「えへへ……」奈緒は顔を真っ赤にして照れている。

わたしたちが立ち上がった日を境に、もう二度と描かれないかもしれないなかった夢の絵が、いま夢自身の手の中に収まっている。

それはもしかしたら、実現しなかったかもしれないこと。完成しなかったはずの絵が、ここにある。

これもわたしたちの行動の、ひとつの結果なんだ。

「ね、奈緒。この絵の題って、もうつけたの？」

「あ、ううん。まだだよ」

「そっか」

わたしたちは、最後の白い天使さま。

だから、黄昏どきに、幸せそうな表情で微笑む真っ白な天使さま……今のわたしたちに、これほど相応しい絵もないと思う。

「じゃあさ、こんなのはどうか」

みんなが、わたしを見てる。ちょっと緊張したけど、わたしは思い切って、その言葉を告げた。

白い天使さまの最後を飾る、そのきれいでやさしく、そして少しだけ切ない、絵の名前は。

『夕空の下、天使さま』。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0796d/>

---

夕空の下の、天使さま。

2010年10月8日13時57分発行